
モンスターハンター 【覇気と力を持つ者達】

Billy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 【覇気と力を持つ者達】

【Nコード】

N5537S

【作者名】

Billy

【あらすじ】

世界はモンスター達が生息する世界。人々は各々の目的を果たすため、【防具】や【武器】を装備して依頼をこなす。そんな世界で様々な異変が起こる。

ある少年ハンター、スカイ・アレルドバークがその異変に立ち向かう。その最中に沢山の仲間達と出会う。何故だか分からないがその仲間達はみんな美少女！

その美少女達はスカイと旅をするにつれて、次第にスカイの事が…だがスカイはその気持ちに全く気付かない鈍感キャラ！

そんなスカイだが、スカイはただのハンターではなく、ある【力】
を持った特別なハンターだった！

スカイの未来はどうなってしまっうのか！？

スカイ達の狩りが今始まる！！

第1話 力を持つ者達（前書き）

この作品はモンスターハンターの世界、つまり異世界の話。でも、そのモンスターハンターに私なりのアレンジを加えたものです。この作品は、モンスターとの戦闘だけでなく、登場する女の子キャラとのドタバタしたりもします。どうか、肩の力を抜いて気軽に見てください。

第1話 力を持つ者達

モンスターハンター。彼らは人々や村や町を襲うモンスターを狩猟して人々に安心を与えるために、日々狩猟団体に届く依頼を遂行する。ハンターは集会場、集会浴場と言った場所での依頼をするかを決めている。狩猟団体の事は主に<ギルド>と言われており、ハンターはギルドの仲間と一緒に依頼を遂行したりする。

「今日も天候が優れないなあ。もう半年になるぞ・・・」

ここ、ポツケ村は夜になると雪が降り、朝にはいつも温かい太陽がポツケ村の皆を迎えてくれる。そんな天候が半年前から曇りに変わり、時には吹雪になる時もある。原因はまだ分かっていない。その時、後ろから声をかけられた。

「スカイ、ここに居ったのか。お前は相変わらずここが好きじゃのう。」この人はこのポツケ村の村長。

「村長さん、どうしたんですか？また困難な依頼でも来ましたか？」村長がスカイの所に直々に出向くなんて、相当困難な依頼が来た時しかない。現にかなり難しい顔をしている。

「どうしたんですか村長さん、そんな難しい顔して？また依頼ですか？」とスカイが尋ねると、

「いや、今回は少し訳が違うのじゃ。詳しい事は集会場で話す。おアシはあの装備で来てくれ。出来るだけ早くじゃ、いいな？」とかなり深刻な面持ちで言う。

「わ、分かりました・・・」スカイは一瞬、村長に圧倒された。

「では、集会場で待つておるぞ。」と言い残すと、村長はその場を後にした。

ここはポツケ村の一番隅の、<スクライの森>の入口にある一本の大きな木の傍。スカイはここに何かしらの思い出があるらしい。スカイはその場を後にすると、急いで自分の家に戻った。部屋に入ると、居間は3つの部屋と繋がっていて、1つは今までに作った防具

や素材などのアイテム置き部屋。1つはキッチン。最後は寝室。スカイは急いで防具を置いてある部屋に入り、村長が言っていたあの装備、<リオソウルZ>を装備する。武器は、スカイが持っている中で一番使い勝手の良いと思っっている<夜刀月影やとづつきかげ>装備。アイテムは適当に持って、急いで集会場に向かう。家はから集会場までは大体3分くらい。

そして、集会場に入ると、スカイは言葉を失った。大した事ではないのだが、ハンターがいない。いつもなら少なくとも10人はいるはずの集会場に1人もいないなんて、こんな光景を見るのはスカイは初めてだったのだ。すると、奥の方にある扉からヒョコつと顔を出す。

「スカイ、来たか。早うこっちに来い。」と急かす村長。一体何があつたのだろうか？

一応コンコンつとノックして入る。

「失礼します。」すると、そこにはポツケ村の村長を含め、周りの村の村長達、数えて5人。これは相当厄介な事になりそうだと、スカイは思っていた。

「君が噂のスカイ・アレルドバーク君か。まあ座ってくれ。」と、どこかの村長さんが椅子を出してくれた。

「あ、ありがとうございます。で、御用件は？こんなに村長さん達が集まって話すなんて、よっぽどの事でしょ？」

「うむ・・・実は・・・」とこれまた知らない所の村長さんが話し始めた。スカイはその話を聞いて驚愕した。

話の内容は、天候の変化の原因の事だった。最近の天候の変化の原因は、神話に出てくる<崩竜ウカムルバス>と言われる竜が原因と村長が話した。どうやら、この天候の変化はポツケ村付近だけでなく、世界全体で変化し始めているらしい。

「う、ウカムルバスなんて・・・本当にいたんですね。でも何故、ウカムルバスって分かったんですか？」

「各地、火山や密林、孤島に溪流や砂漠や雪山に調査団を送らせた。

すると、雪山に向かった調査団が返ってこなかった・・・そして、火山に向かった調査団に、雪山の調査団からの連絡が来たらしい。それによると、姿はウカムルバスその物だったとか。それが最後の連絡だったらしい・・・」

「なるほど・・・それは災難でしたね・・・で、いまだに分からないのですが何故、俺を呼んだんですか？」とポツケ村の村長に向かって言うと、

「何故？お前も薄々気づいとるじゃろう。」村長がその言葉を言った時、俺は思った。(・・・そう言うことねえ。)と。

「お前は不思議な力を持っておるらしいな。スカイ君。」

そう、俺は普通のハンターに無い、不思議な力を持っている。

「世界にはお前と同じ力を持ったハンターがあと6人おる。出来るだけ多く力を持った者を集めて、そして、ウカムルバスに挑むのじや。」

「お、俺がそいつらを集めるんですか？世界ですよ！？範囲大き過ぎませんか？」

「言ったじゃろう、出来るだけ多くと。最悪お前1人でも言うてもらう。」

「マジですか！？無理ですよ！そもそも誰が力を持っているか分かっているんですか？」

「誰が力を持っているかの事は問題ない。お前はまだ自分以外の力を持った者を見た事がないから分かんと思うが、力を持った者が力を持った者を見ると、そやつの周りにオーラのようなものが見えるらしい。」

「何でそんな事分かるんですか？」

「ワシのギルドにもスカイ君と同じ、力を持ったハンターが居る。そやつが言っていた。ワシはユクモ村の村長。ここからユクモまで相当遠くだが、行ってみるといい。そやつの名前はリリー・サシユラット。まあ、見れば分かるじゃろう。」

「わ、分かりました！」俺にはそう言うしかなかった。これは、俺

やポケット村だけの問題じゃない。世界全体の問題なんだとスカイは思う。

「いいか、お前に仲間を集められる時間は・・・1年じゃ！今は天候の変化程度しか異変はなかったが、もうそろそろ奴も動き始めるはずじゃ。出来るだけ急げ！いいな？」

「はいっ！！」スカイはそう言うのと集会場を飛び出た。

「スカイはまだ18。何が起こるかわからんぞ。途中で挫^{くじ}けるやもしれん。」それでも、村長達はスカイ・アレルドバークに賭けるしかなかった。

スカイは旅の支度を30分もかけて準備した。

そして、スカイは仲間を探しに、世界を守る為の旅に出た。

第2話 雷の力を纏う少女

旅に出てもう3日、ずっと歩きっぱなし。おそらく隈が出来ていることだろう。

「うう、も、もうそろそろユクモ村。確か、ユクモ村は和風の村って聞いたな」

そして、少し遠くを見てみると、ぼやけているがそこにはユクモ村があった。

「おお！ やつと見えたか！ ようし、もうすぐだ」15歳。まだ若いのによくここまで頑張ったものだ。スカイは自分で自分を褒めた。そして、ようやくユクモ村についた。が、門番さんに止められてしまった。

「こら君！ 勝手に入ったらダメだろ。ほら、ここに名前書いて」スカイは既にへろへろなので自分の名前すら上手く書けない。

「す、スカイ・アレルド・バ・・・」名前を書いている途中で、疲労のあまり倒れて気を失ってしまった。

目を覚ますと、スカイは沢山の人で囲まれていた。

「大丈夫かい？ 君、2日も寝込んでいたんだよ」とこの村の人が話してくれた。

「あ、そうなんですか。迷惑かけてすいません」と言うと、

「いや、全然大丈夫だけど、君は一体誰なのかな？」スカイは、門番さんの所で名前を書いている途中で気を失ったから、正式な名前を誰も知らないのだ。

「あ、すいません。私の名前はスカイ・アレルドバーク。スカイと呼んでください」と少し頭を下げながら言う。と突然何かを思い出したのか、焦り気味でスカイは、

「すいません、この村にリリー・サシユラットと言う人いませんか？」と聞いた。

すると、年配の方が

「あゝ、リリーちゃんね。確か10分前くらいにジンオウガを狩りに行ったよ」それを聞いてスカイはキョトンとする。

「じ、ジンオウガ？それは一体・・・何者？」とスカイが聞くと、「君はジンオウガを知らんのかね。ジンオウガはこら辺によく出没するモンスターでね、でも最近はリリーちゃんが狩ってくれて相当数は減ったと思うよ。雷を使う竜でね、種族は牙竜だったかな？」ジンオウガ？ポツケ村に居た時はそんなモンスター、1度も聞いた事がない。それに牙竜なんて種族も聞いた事がない。

ユクモ村。ポツケ村とは大分環境が違うみたいだな。スカイがそんな事を考えていると、高い透き通った声で

「ただいま、今帰ったよ！」と聞こえてきた。それを見た村人は「リリーちゃん、客人だよ。」と言う。それを聞いたリリーも「え？誰？何の用？」と明るい感じで返してきた。

村長達の言う通り、こいつからは黄色いオーラのようなものが見えた。

「・・・！？」向こうもこちらに気付いたみたいだ。

「へ、変わった客人だね。で、何の用だい？」とまたもや明るく質問してきた。

「俺はスカイ・アレルドバーク。スカイと呼んでくれ。」すると今度は向こうが、

「僕はリリー・サシユラツトよ、よろしく。リリーでいいよ！」と気軽に挨拶してくるが、今はそんな場合ではない。

「リリー、お前も最近変だと思っ事、無かったか？村付近での環境の異変とか。」と言うと思いだたる節があったようだ。

「！！そう言えば、最近やけにジンオウガがよく出てくるようになった気がする。」

「その防具。それが噂のジンオウガの防具？」と聞くと、

「そう、この防具を使い始めて力が目覚めたの。あなたも？」

「ああ、リリーは見る限り、雷の力だな？」

「うん、君は炎だね。やはり、力と色は関係があるみたいだね。」

と言っりりー。

「まあ、その事はいい。問題は環境の異変の事。その原因は・・・」
とスカイは村長達に言われた事をリリーにも言った。

「そう言うことね。で、スカイは今仲間を集めてるってワケか！」
と状況を理解したのか、すぐに仲間になってくれた。

「オツケー。で、あと何人くらい必要なわけ？」

「俺とリリーを含めて7人だから、少なくともあと2人は欲しいね。」

「そう言うと、リリーは黙って頷き、「ちよつと待ってて。今支度してくる。」と言って自分の家に戻っていった。

10分後、門で待っているとリリーが急いで来た。

「ゴメンゴメン。いろんな人にお礼とか、お別れとか言ったら遅れちゃった」

「いいさ、当分の間会えなくなるんだ。そのくらいが妥当だと思うぞ」とスカイは少しも責めずにそう言った。

「よし、それじゃあ行くか!!」

そしてスカイとリリーの仲間探しの旅が始まった。

第2話 雷の力を纏う少女（後書き）

ポケ村にはジンオウガの依頼が無いので、スカイはジンオウガ初見です。

また、次回の新キャラ登場！！戦闘も入ってきますよぉ〜b

第3話 リリーの實力 そしてスカイの昔の戦友

ユクモ村を出てもう一週間。二日前ほどにネイビス村と言う村を訪れたのだが、そこには力を持ったハンターは居らず、噂すらも無かった。

「なかなか大変だね、仲間を探すのって。まあ、世界に7人しかないなら仕方ないけど。」とリリーは少し疲れ気味にそう言う

「そう言えば、家にある武器や防具ってどうなっちゃうの？出来れば、モンスターに相性の良い武器や防具を使いたいんだけど・・・」と質問してきた。その事については知っていたから即答出来た。

「確か、自分の村の村長に手紙か何かで頼めば送ってくれたと思う。まあ、時間はかかるけどね」

すると、リリーは納得したのかそれ以上何も聞いてこなかった。

しばらく歩いていると何かを感じた。おそらく、感じたのは俺だけだ。これも力のおかげだと思う。

「静かに。何か、大きいのが近づいて来てる。」それを聞いたリリ

ーは両手で口を押さえ、声を殺した。

その時！突如、上から何か大きい物が降りてきた。その何かが降りてきた時に生じた風で、スカイとリリーは3メートル程飛ばされた。

「うわああ！」スカイはそのままゴロゴロと転がって行った。リリ

ーは村で受け身の練習をしているから上手く体勢を整える事が出来た。

「くっ・・・これは!？」その声にスカイが反応して。何か降りてきた方を見る。すると、そこに居たのはティガレクスだった!! ティガレクスとは、飛竜種ではあるが上手く飛ぶ事が出来ない変わった飛竜。しかし走る事に富んでいる。通常、飛竜は飛ぶ事に富んでいて走りはあまり上手くない。しかし、ティガレクスは腕の造りが他の飛竜種と比べて人型に少し近い。逆に飛竜とは造りが少し異なっているため、走るのには上手いが飛ぶのは下手なのである。

「クソ！何でこんなところに！」とスカイがキレ気味に言う

「ここは村と村の間にある密林。飛竜がいてもおかしくないですよ？」と冷静な判断をしたリリーがそう言う。しかし、冷静の中にも笑いが混じっている

「ティガレックス相手に、随分と余裕だな」

「へへ、僕の目に狂いが必要はこのティガはおそらく下位レベル。余裕を持って当然な相手でしょ？」と笑顔で返してきた。

「下位だからって油断するな！！」

「え・・・スカイ、どうしたの？」スカイはつい、本気でキレてしまったと若干後悔していた。

その時、ティガが襲いかかって来た！

「よ、避ける！」スカイがそう言う前にリリーは既に横に回避していた。

「分かってるよ。丁度良い。スカイに僕の実力を見せてあげる！！」そう言うと、リリーのオーラのようなものが一気に大きく膨れ上がった。その瞬間、リリーは消えた！

「！？り、リリー？」と言うとリリーが突っ込んできたティガの後ろに居るのが見えた。

「ここだよ！」と、言う通りリリーは背負っていた折り畳み式の大剣を手に、ティガの尻尾めがけておもいきり振った。

「オリアアツ！」今ので尻尾にだいぶダメージを与えたはず。しかし、ティガの方も攻撃を止めようとしない。ティガは体をおもいきり回して、周りにあるものを吹き飛ばす。

「リリー！！」とリリーのいた方に行こうとすると

「大丈夫。ギリギリでガードしたから。」とこちらにウィンクしているのが見える。それを見たスカイは「ほっ・・・」と安心の表情を浮かべる。それ見たリリーは

「僕はこんなことじゃ殺られないよ。」とスカイを安心させる。

「無理はするな。頼むから、死なないでくれよな・・・」それを聞いたリリーは頬を赤らめている。それをスカイに見られないように

必死で隠す。

「あ、当たり前でしょ！スカイは少し僕を甘く見過ぎだよ。」と言
い返す。

そして、リリーは次にティガの腕をザツシュ、ザツシュと斬る。だ
がティガレックスの攻撃も止まない。リリーはティガの攻撃を回避
しながら確実に、正確に決めている。その慣れた立ち周りは見事な
ものでしかなかった。そうして腕だけでなく胴や頭、尻尾に攻撃し
ていると、ティガが足をひこずり始めた。

「よし、それじゃあ本気出すよお！！」と言った次の瞬間。リリー
の右腕に青色の炎のようなものが灯った。その状態でリリーは大剣
特有の技、＜溜め斬＞の構えをとっている。リリーからは微かに「
ハアアア・・・」と聞こえる。

そして、ティガが飛んで逃げようとしたその時！

「ハアアアッ！！」と言う声と同時にリリーは大剣を振り下ろす。
凄まじい雷がティガを襲う。その斬撃はティガに上手くヒットし、
ティガは動かなくなった。

「流石だなあ。本来なら武器が持っている属性攻撃はあんな状態変
化はしない。やはり、お前の力か？」とスカイが訊くと

「そうだね、あの状態変化を習得するのに4年かかったよ。でも、
結構いいでしょ？」と自慢気に言うリリー。

「そ、そうだな。」そう言うしかなかった。俺もあんな状態変化は
出来ない。

スカイ達が言うく力。それは、属性の属性値の上昇と属性の状態
変化を扱える、特別な力の事。本来なら斬ったところに武器が持つ、
少量の属性値を与えるだけなのだか、状態変化だと訳が違う。その
属性そのものが武器に成り得るほどののだ。しかし、状態変化にも
出来るものと出来ないものがある。日々の練習、修行、鍛錬をして
やっとく出来ないく壁を乗り越える事が出来るのだ。彼女は4年間
も修行したから、まるで雷で出来た大剣のような形に状態変化させ
る事が出来るのだ。

突然リリーから

「えっと・・・さつきはゴメンね。ちょっと調子に乗りすぎたよ。」と反省の言葉がきた。

「いやいや、いいんだ。ちょっと訳があつてな。」スカイは無理やり笑いながらそう言った。

「何か、あつたの？」と聞かれて、スカイは少し戸惑った。だが答えはすぐに出た。

「これから長い間、一緒に旅をする仲間だ。隠し事なんてよくないよな・・・」とスカイは呟く。そして、自分の過去に経験してきた話をした。

「2年前の話だ。俺のはラッツと言う仲間がいた・・・ラッツは俺なんかよりも優秀なハンターだった。ある日、二人でディアブロス亜種を狩りに行ったんだ。上位だったがラッツが優秀だったから、二人でも余裕だつて思つてたんだ。だけど、そのディア亜種は上位とは思えないくらい強かつたんだ。俺はラッツと話し合つて、一先ひしまず村に帰る事にしたんだ。でも、返つてる途中で地面からディア亜種が・・・吹き飛ばされたラッツは左足に大きな傷を負つてしまつたんだ。俺が時間を稼ぐために閃光玉を投げようとしたんだが・・・手遅れで・・・ラッツの胸はディア亜種の角が貫通していたんだ・・・それ以来、俺はその頃の記憶がないんだ・・・」

そんな悲しい過去の体験をスカイは泣きながらリリーに話した。そんなスカイを、リリーは抱きしめた。慰めのつもりなのだろう。おそらく、リリーは自分にはこのくらいしかできないと思つたのだ。3分くらいして、スカイはようやく泣き止んだ。そしてスカイは小さい声で

「あ、ありがとう、リリー。」と言った。

リリーはそんな辛い事を言わせてしまつて、罪悪感を感じているのだろう。

「そんな悲しい顔すんなよ。」とスカイはリリーを慰める。

「ほんとにごめんね。そんな辛い事言わせちゃつて・・・」やはり、

リリーは自分が悪いと思っている。

「リリーは何も悪くないよ。俺が勝手に話したんだ。だからそんな悲しい顔をすんなよ。」

そんな優しい言葉をかけてくれるスカイに、リリーは少し頬を赤らめる。

「よし、今日はもう少し進んだところにテントを張ろう!」その言葉に、リリーは無言で頷く。スカイには、何故リリーが下を向いているのか分からなかった。

そして、今日も仲間探しの旅の1日が終わろうとしていた。

第3話 リリーの實力 そしてスカイの昔の戦友（後書き）

今作品は「カ」とはどういうものなのか、そしてスカイの過去の話で終わってしまいました。

次回作でまた、新たな仲間が登場します！！期待しててください
m () m

第4話 仲間…なのか？（前書き）

前もって言うておきます。この作品では実際にはない武器や属性が出てきます。本来のMHが好きなお方には申し訳がないと思っているのですが・・・本当にすいません。今作品には出ません。あと、ついでに言うと。タイトルにもある<覇気>。これは後半に入ると出てくるワードなのでまだ期待しないでください。本当にすいません。

第4話 仲間…なのか？

ティガ戦があつてもう6日。その頃からリリーの様子がどうもおかしい。何か隠し事をしてると言うか、モジモジしていると言うか…

「あのさあ、リリー」と話かけると、

「はい。何でしょうか？」以前と口調が違う気がする。

「何かあつたのか？」と訊いてみると、

「いえいえ！何も無いよ！ハハハハ…」

「まあ、同じ年頃の男女がいつつも一緒だと、何か嫌なことの一つや2つは出てくるだろう。これも男の使命。うんうん…」と思うスカイだが実際は違う。

「もう、スカイって鈍いんだから……」と呟くりりー。

「ん？何か言つたか？」と在り来りな返しをするスカイ。

「何でも無いよ！！まったく……」と少し怒り気味に返すりりー。

「何怒つてんだよ？」

「怒つてないよ！！フンツ」やはり、鈍いと改めて思うりりーだった。

そんな会話をしているとスカイがある事に気付いた。

「おい！リリー、町だぞ！」とはしゃぐ。15には思えないほどだった。でも、リリーはそう言う所も含めてスカイの事が好きだった。

「早く、早く！！」と急かすスカイ。

「わ、分かつてるよ！」動揺しながら返すりりー。

スカイとリリーは町に入る門の所で、門番さんに手続きの紙を貰つて、それを書いていた。

「はい、出来ました。」スカイが終わつてすぐ、

「僕も終わったよ。」とリリーも続いた。するも、門番さんはその紙を見て、

「よし、町に入る事を許可する。でも、暴れたり、悪いことしちゃいけないよ？」と子供を見る目でそう言った。

「分かってますって！ありがとうございます」と門番さんにお礼を言うと、

「ありがとうね」とリリーは笑顔で門番さんにそう言った。門番さんはリリーが村に入って行ったあとも、頬を赤らめてずっとリリーの行った方を見ていた。

この町はオルファン。ポツケ村の何十倍もあるこの大都市は、世界中でもトップクラスの加工技術や医療技術が整っている。こんなに大きな都市、力を持ったハンターがいるに違いない、とスカイは期待を膨らませる。

「こんなに大きくて有名な都市なんだ。力を持った人の1人や2人居てもおかしくないよ！」とリリーもスカイと全く同じことを考えていた。

「よし、まずは集会場に行ってみよう。」スカイが提案する。もちろん、リリーには反対する理由なんてないから、集会場を訪れる事にした。

集会場の扉を開けた。

「すいませえん。」と言うと、おそらくギルドマネージャーであろう人から、

「いらつしやいませえ。」と万遍の笑みで返ってきた。

辺りを見渡してみる。力を持っているハンターがいれば、オーラのようなものですぐに分かる。しかし、それらしき人はいなかった。

少しでも情報が欲しい2人はGMに訊いてみる事にした。

「すいません、このあたりに特別な力を持ったハンターがいる、みたいな情報入ってないですか？」それを訊くとGMは困った表情を浮かべながら、

「申し訳ありません。そのような情報は一通も来ておりません。」その返答に2人は肩を落とす。

「そうですか、ありがとうございます。」そう言って2人は集会場を出た。その2人を2階から眺めていた、1人の少女がいた。2人は気付かなかつたのだがこの集会場は2階があり、2階からは1

階を見渡せるようになっていたのだ。

「……あの2人も力を持っていた…そして私を探していたのか？力を持ったハンターが2人、そしてまだ力を持った者を集めている…何かあるな…」

その後、スカイとリリーは町4分の1を探すので精一杯だった。

「今日はもう休もう。探すのはまた明日だ」リリーもその意見に賛成だった。

宿は事前に村長達が予約してくれていたらしい。お金の方も村長達が払ってくれていた。

「村長、感謝してます！」と言うとスカイは自分の部屋のカードを貰うと、速攻で自分の部屋を探しに行った。それを見ていたリリーも早く自分の部屋に行きたいと思っていたのだが、なかなかカードをくれない。

「あのお、私のカードは？」と訊くと驚きの返答が返ってきた。

「リリー様ですね…すいません、先ほどの方と相部屋でございます。」

「……ええええッ！？」宿全体に響くその声はスカイの所にも届いていた。

「リリー！？どうした？」

そして、スカイに相部屋であることを話すと、

「何だ、そんな事か。じゃあ、早く行こうぜ。」

「ち、ちよつと！スカイい…」と遠くに行くに連れて、声も小さくなっていく。

「本当にいいの？僕と同じ部屋で？」

「え？それ、俺に言う？お前こそ、俺と同じで嫌じゃねえか？」やはりスカイも今回の事には少し照れている。

「ぼ、僕はいいけど…」

その時、「コンコン」部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「はあい。」とスカイが出て見るとそこには誰もいなかった。と思つたら廊下の曲がり角、誰かが曲がるのが見えた。しかも、スカイ

の目に狂いが必要ならば、そいつは力を持っている。

「すまん、すぐ帰ってくる！」とだけ言い残し、スカイは部屋を出た。

「ち、ちよつと！スカイ！！……もつ……」

そいつが外に出て行くのが見えた。

「待て！！」と言って止まるのであれば苦労はしないのだが……と思つて外に出て見るとそいつは外に出たすぐの場所で止まっていた。

「と、止まってんのかよ……」と呆れた口調で言うと、ある事に気付いた。

「やっぱりお前、力持ってるのか……」オーラのようなものが出ていたからすぐに分かった。

「君たちは力を持ったハンターを探しているんだって？」スカイは驚いた。

「何で知っている……」

「集会場で、君がGMに話しているのを訊かせてもらったよ。」とスカイに背を向けながら言う。

「……顔を、見せてくれないか？」すると、そいつは無言でこちらを向いた。

「私の名前はスバン・キャットト。水の力を使うハンターだ！悪いが、君たちと同行させてもらう。」

そのスバンと名乗る少女は綺麗なロングの黒髪で瞳はサファイアのよくな綺麗な青色をしていた。

第4話 仲間…なのか？（後書き）

突然過ぎる展開ですいません。いよいよ3人目の力の持ち主登場。
今後の展開、いったいどうなるのか！

次回作は3人のドタバタとしたストーリーとは無縁の回になりそうです。

すいません……………

第5話 新しい仲間との旅

「…えええ！？」突然過ぎる告白に動揺するスカイ。

「君たちは力を持ったハンターを探しているのだろう？」

それはそうなのだが、突然過ぎて上手く頭の中を整理出来ない。

「それに、私はもうお前の事をすっかり気に入ってしまった。好意を寄せる者の近くに居たいと思うのは当然ではないか？」

もう頭の中には何も入ってこない。今の言葉も、何を言っているのか全く分からなかった。さり気なくスカイに告白したスバンの思いも届かなかった。

「ん、まあ1つだけ言えることがある。お前：スバンって言ったか？お前も力を持っているなら、是非とも一緒に旅に来てほしい。」その言葉、スバンから訊いていると告白の返事が「オッケー」と言っているようなものだった。

「うん、そうであろう。」スバンは腕を組みながらウン、ウンと頷いている。

「まあ、今日はもう遅い。一先ず今日は寝よう。スバンは旅に出る準備を家でしていてくれよな。」

「うん、わかった！」そう言うとスバンは急いで自分の家のある方に帰って行った。

そしてスカイは、何事も無かったかのように自分の部屋に戻った。部屋に入るとリリーが心配そうな顔をしてスカイを見つめる。

「どうしたの？急に部屋を飛び出して。…心配したんだから」リリーは照れながらそう言うが、スカイには一言も入ってこなかった。そして、スカイはこう呟いた。

「3人目が見るかった…」その言葉に一番驚いたのはリリーでなく、スカイだった。

「…ん？…おおおお！！リリー！3人目が見つかったぞお！」スカイはリリーの両肩を持ち、前後に振った。

「す、スカイ！？ストップ！ストオオツプ！！」その声に反応して我に返ったかのように、肩を振るのを止めた。気付くと、リリーはへろへろになっていた。

「リリー！？すまん、テンションが上がりすぎた。」その言葉にリリーは

「ぜ、全然大丈夫…」と言い返した。それを最後にリリーは寝てしまった。相当疲れていたに違いない。何せ、6日間も歩きっぱなしだったのだから。

「寝ちゃったか…今日はもう遅いし、俺も寝るかな」そう言うと、スカイはリリーをベッドに寝かせ自分は少し大きめのソファに横になった。しかし、すぐには眠れなかった。そこでスカイは考え事をしていた。

「リリーはともかく、3人目がこんなに早く見つかるものなのか？世界に7人しかいないのに…」そこで、スカイはある事に気付く。

「！？待てよ、力を持った者は7人。属性は特殊攻撃を除いて5つ。明らかに数が合わない…どう言う事なんだ…」そう考えていると、いつの間にかスカイは眠りに落ちていた。

ハッ、と目が覚めるとベッドにリリーはいなかった。

「こんな有名な町に来たんだ。ぶらぶらしているのだろう」とスカイは思った。

スカイは歯を磨くために洗面所に行った。

すると、そこには町の見学に行っていたかと思っていたリリーがいた。「あ…」スカイはその光景に目を疑った。驚き過ぎて空いた口がふさがらなかつた。

「ひ、ひいいい！！」とリリーが言った直後

「スカイのへ、変態いいツ！！」と叫んだ。その声に圧倒され、スカイは4、5歩下がってそのまま尻もちをついた。そしてリリーは他人には最も見られたくない場所を手やらタオルやらで隠しながらドアを閉めた。どうやらリリーは朝風呂に入っていたみたいだ。

スカイは、本当に申し訳のない事をしてしまったと思いたいベッドに腰

掛け、どう謝るかを考えていた。

5分後、リリーが洗面所から出てきた。おそらく、風呂に入る為には洗面所に一旦はいるしかない造りになっているらしい。

そして、リリーはタオルを口に当てながら、ソファーに腰掛けた。気まずい空気が流れる。その状況を打開したのは予想外の人物だった。ドアの方から「ピー、カチャ！」というカギの開く音が聞こえた。

「スカイ、入るぞ。」それは昨日初めて会った、水の力の持ち主のスバンであった。

「スバン！？どうした？」と訊くと

「いや、どうしたも何も、旅に出るのであるう？ならば早い方が良いかと思ったのだが…」と言うとスバンはある事に気付いた。リリーがキョトンツとした表情でスバンの方を見ている。

「えっと、君は…雷の力の持ち主だね。よろしく、私は水の力の持ち主、スバン・キャトットだ」

リリーはもの凄く動揺している。突然過ぎる登場、突然過ぎる告白。リリーには全く理解の出来ないものだった。そして、もっと理解の出来ない事がスバンの口から告げられた。

「一応、スカイは私の旦那様なので、そこをよろしくお願いしますね。」

その告白にはリリーは本当に驚愕した。そして、スカイの方を見る。スカイは旅へ出るための準備をしていてこちらの話を全く聞いていない。スカイに近寄って、本当かどうかを確かめる。

「す、スカイ？き、君はスバンの旦那様なの？」するとスカイは「ん？旦那？俺が？俺はまだそんな歳じゃないぞ。…それよりさっきはすまなかつたな…」と覗きをしてみた事をまだ反省していた。その時、リリーは何故だか嬉しくなったかのように笑みを浮かべた。

「そ、そんな事はもう良いよ。それにわざとじゃないんでしょ？」
リリーがそう訊くと

「それはそうだが…」とまだ反省している。それを見たリリーは
「フフツ、スカイは優しいんだね」と微笑みながら言う。

そして、リリーはスバンの元へ行き

「残念ながら、スカイはあんたの旦那じゃないって!!」と勝ち誇
ったかのように言う。

それに対してスバンも

「いいえ、確かにあの時スカイは、私の告白に「オツケー」の返事
をしました!」と抵抗する。

そんな事を言い合っていると

「お前等! お喋りするのは良いが、旅の支度は出来てるんだろうな
?」そう聞くと、2人とも笑みを浮かべ

「当たり前でしょ!!」「もちろん!!」と返ってきた。

「よし、じゃあお喋りするのは旅の途中ですてくれよな。」そして
スカイ達は宿を出て、次の村や町へ行くために歩みを始めた。

「それじゃあ行くか!!」スカイはそう言いながら拳を上に翳かざした。

第5話 新しい仲間との旅（後書き）

上手くまとまっているか心配です・・・次回は戦闘に入ります！！
新キャラは出るか分かりません。まだ未定。

そして、前回の後書きでの予告通りにならなくて本当にすいません
！！

これからはちゃんと予定を立てて書きたいと思います。

第6話 明かされた真実 悲しみの涙

オルファンを出てもう3週間になる。その間にこう言う話題になっ
た。

「スバン、お前に訊きたい事がある」

「何だスカイ？」

「お前、何であの街にいたんだ？」

スバンは質問の意図が掴めず首を傾げる。

「と、言うത്？」

「おかしくないか？リリーはともかくスバン、お前はあの街のハン
ターじゃないのに俺たちの近くにいた。世界で7人しかない力の
持ち主がこんなに固まると思うか？それに！」

続きを言おうとした時、スバンが喋り始めた。しかし、何か訳があ
るようだ。スバンは少し下を向き目を瞑りながらこう言った。

「我々が持っているこの力と言うもの、今の科学の技術では何も解
明できない不思議なもの…まだ何も解明されていないこの力、もし
かしたら力を持った者同士を引き寄せる力があるのかもしれないな」
スバンのその言葉に、スカイは言葉を失った。だが、リリーは不思
議そうに首を傾げる。

「引き寄せる？」

リリーがそう言うと、スバンはリリーの方を向き顎に拳をあててリ
リーの質問に答える。

「ん、あくまで私の憶測だが…」

その応えにスカイは疑問を持った。

「でも、その憶測が正しいとすると、今まで引き寄せられなかった
のは何故なんだ？」

その質問には、流石のスバンでも分からない。

「それは分からん。さっきも言ったようにあくまで憶測だ。ただ…」
その続きがスバンの頭の中にはあるようだ。しかし、この続きも憶

測に過ぎない。

「ただ？」

「ただ、何か目的を持った時、その目的を持った者に引き寄せられるのかもしれない…これも憶測だがな」

スバンがそう言うときスカイは納得したのか、急に頭を下げて

「そうか…すまなかつたな。変な質問して。それに仲間なのに疑っちまうて」と謝罪する。

その様子を見たスバンは笑いながらこう言った。

「ハハハッ、頭を上げてくれ。仲間なら頭の下げ合いっこは無しだ。仲間とはそういうものだろ？」

スバンはスカイに向かってウインクしながらそう言った。

こう言った出来事が、オルファンを出ての3週間の間にあった。

そして今、黙々と旅地を歩んでいるとスバンが何かを発見したようだ。

「お、村が見えたな。今日はあそこの村に宿を借りよう」そう言って走り出した。そして、すっかり親しくなったのかスカイもスバンを追いかけるように走り出した。

「リリー、お前も早く来いよなあ！」スカイのその言葉にリリーは少し焦り気味に

「う、うん！」と言った。リリーはあまりスバンと関わっていないせいか、スバンの後を追うのをあまり乗り気ではなかった。

村の入口まで来て手続きを済まし、宿のある場所を訊いてそこに行く。門番さんは宿に向かうスカイ等一行を見ながら、

「両手に花束つてあんな事を言うんだなあ…」と鼻の下を最大限まで伸ばしながら、ついでによだれをダラダラと垂らしながら呟いていた。まあ、よだれはともかく、鼻の下を伸ばしてしまう人は門番さんだけではないだろう。むしろ、鼻の下を伸ばさない人の方が少ないかもしれない。

リリーは腰ほどまである金髪のロング、顔も整っていてかなり綺麗な目はとても穏やかで髪の色に近い黄色。スバンはリリーより少し短

いくらいの長さ。色は黒。目はサファイアのような綺麗で透き通っているような青。顔つきは目は鋭く大人の女性のような綺麗な顔つき。凜々しさが感じられる。とにかく、二人とも異常過ぎる可愛さ。そして、そんな美少女達を率いているのがスカイ。髪型は<レウスレイヤー>と言う後ろが刺々しくなっている髪型で、色は空のように少し薄めの蒼。それなのに目は綺麗な赤色。スカイの顔はとてモッコよく、リリーやスバンが惚れるのも納得できるカッコよさ。しかし、恋愛感情に対しては鈍感でリリーやスバンが自分の事を好きって事も知らない。リリーとスバンはスカイに猛アタックしているのだがスカイには無意味。なんとも可哀相な二人だ。そして、スカイ等一行は宿に着いた。やらしい話だが村長達のおかげで<タダ>で泊る事が出来るのでスカイは本当に村長達に感謝している。おそらく、リリーとスバンも村長達には感謝しているに違いない。

今回は2部屋借りる事が出来た。もちろん、スカイは1人部屋。

「じゃあまた後で！用があったらいつでも来てくれ」

スカイのその一言に、リリーとスバンは目をキラキラと輝かせているように見えたのはスカイだけではないはず。

(えっと…何であの二人は喜んでたのかな)とスカイは苦笑いしながら頬を掻く。そして、最後に手を振って扉を閉めた。

「…さて、明日の旅の準備でもするかな。えっと、回復薬はあるし、こんがり肉もあ」

その時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

(誰だ？リリーやスバンはおそらく明日の旅の準備をしているし…)と考えるながら部屋のドアを開ける。

「はーい、どちらさ…!？」そこにはリリーとスバンがいた。スバンは普通だがリリーは何やらモジモジしている。二人は防具を脱いで、私服に着替えいた。その着替えた姿の二人を見て、スカイは頬が少し赤くなった。スカイが赤くなったのも無理はない。二人の私服姿は、防具を纏っている時より明らかに可愛い。二人は元々可愛い

いが私服姿になるとより一層、可愛さが増す。

スカイは動揺しながらも二人に用件を訊く。

「ど、どうした、二人とも…って言うかその服どうした？」

「部屋の中のクローゼットの中にあつたものを借りたのだ。とにかく中に入れてもらう」

その強引なスバンの後にリリーがスカイの元に来て

「これ、スカイのもあつたから。はい」

「お、おう、ありがと…」

「じゃあ、お邪魔します」

と何の躊躇ためらいもなく入って行ったスバンに比べてリリーは仲間の部屋に入る時にも一礼するほどの真面目な子。

「そんな、いちいち礼しなくても良いよ？さあ、入って入って！」

そう言つてスカイはリリーの背中を押しながら自分の部屋の中に入つた。

部屋には机と4人分の椅子があつたので、まずスカイが座りその隣にスバン、スカイの前の席にリリーが座つた。

「で、用件はなんですか？」

スカイがそう訊くと何故だか分からないが沈黙になつた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

その時、この空気を打開しようとか話題を出そうと思考をフル回転させていたスカイが何かを思いついたかのように2人にこう訊いた。

「そ、そうだ！2人の防具とスキルを教えてくださいませんか？仲間である以上、そういう事は把握しておきたい」

その問いに先に答えたのはリリーだつた。

「じゃあ、僕から。僕の防具はジンオウX。エックスジンオウガの素材を使

つている防具で、スキルは力の解放+2、雷属性攻撃強化+2、回避距離UP、回避性能+1。」

そこでスカイは疑問に思った事があった。

「ち、力の解放？雷属性攻撃強化？それはいつたい…」

スカイが知らないのも無理はない。リリーが育ったユクモ村は防具やスキルの開発技術が他の村や街よりも優れているため、ポツケ村には伝わっていないスキルが沢山あるのだ。

「力の解放は一定条件を満たすと発動するスキルで、発動時心率が上がって、回避や走ったりするときのスタミナ消費を軽減してくれるスキルで、雷属性攻撃強化は文字通り、雷属性の攻撃を強くするスキルなんだあ」

リリーの丁寧な説明でスカイは納得したのか「説明ありがとうな」と微笑みながらリリーに言う。そしてリリーは褒められて嬉しいのか、頬を赤くして照れている。

今のを見ていたスバンはムツとしながら

「私の装備は荒天・真。アマツマガツチの素材を使っている。スキルは力の解放+2、水属性攻撃強化+2、斬れ味レベル+1、スタミナ奪収だ」と言った。

「スタミナ奪収？」

スカイがそう訊くと

「ああ、そうか、すまん」少しバカにされた気分になったスカイ。

「スタミナ奪収とは、攻撃にモンスターのスタミナを奪う力をつけるスキルだ。どう言う原理かわ私も分からないが…」

その説明にスカイは「うんうん」と頷く。

ふとリリーの方を見てみると口が半開きになっていた。

「リリー、どうした？」と訊くと

「アマツマガツチの防具って事は…あなたはもしかして<蒼眼の荒士>!？」

それを聞いてスカイも驚く。

蒼眼の荒士。その荒々しい剣捌きけんさばの中にも巧みさを感じさせる凄腕ハンター。モンスターを狩っている時にその綺麗な蒼い瞳が閃光しで見えるところからその異名が付けられたと訊いている。

スカイとリリーが驚愕している中、スバンが衝撃の事実を告げる。

「そう言う君こそく金色（金色）の稲妻いなずまだろ？」

それを聞いてスカイはまたも驚愕する。

金色の稲妻。その名を世界中に轟かせた超有名且つ凄腕ハンターの異名。一躍有名にはなったが急に姿を消した。そんなハンターが目の前にいたら誰だつて驚愕する。そもそも異名を持ったハンターは世界に16人しかいない。その中の2人が目の前にいる事にも驚愕した。

「そして、スカイ。何自分はしらばつくてんの？」

その言葉の意味がスカイには分からなかった？

「…と言いますと？」

「君は今ハンター界でも一番有名なハンターだろ？」

…え？スカイには本気で分からなかった。

「もしかして、自分の異名知らない…とか？」

「いやいや、大体俺、異名なんて持ってないんだが…」

その一言にスバンとリリーは言葉を失った。

「スカイ、君は天空の武者つて知ってるか？」

「あ、ああ。今一番有名とされていて、さまざまな太刀を使ってあらゆるモンスターを狩猟している凄腕ハンターだろ？」

スバンとリリーは一瞬自画自賛しているのかと思ったがそうではなく本当に知らないらしい。

「その天空の武者はスカイ、君の事なんだよ？」

スカイは言葉を失い、目が点になった。驚愕の真実を目の当たりにした人はこうなるのかとスバンとリリーは思った。

微動だにしないスカイを見てスバンとリリーは「困ったなあ」とアイコンタクトしようとした時、

「えええええ！？俺が天空の武者？…ええええええ！？」

スバンとリリーは苦笑いをするしかなかった。

数十分後、ようやくスカイも落ち着き、まともに口が訊ける程度まで回復した。

「スカイ、大丈夫か？気分悪くないか？」

心配してくれるスバンにスカイは

「もう大丈夫。心配してくれてありがとな」とスカイは微笑みながらスバンに言う。

それを見たスバンはクルリと背中を向けた。スバンの頬は赤くなっている、照れているのだ。

いつしか、スバンはスカイの目を見る事が出来なくなっていた。

「じゃあ、防具の説明も終わったし今日はもう遅い。今日はこの辺で終わりにしよう」

この発言にリリーとスバンは悲しい表情を浮かべる。スカイには見えないように…

そして自分の部屋に帰って行く2人。2人が自分たちの部屋に入っていくのを見届けると、スカイはベッドに横になって目を瞑る。目を瞑ると昔の記憶が蘇ってくる。

ラッツと一緒に初めてギアノスを狩った時の記憶。ラッツの武器強化を手伝った記憶。…ラッツがディアブロスに…

「ハッ！！」気付けばスカイは汗だくだった。あの忌まわしき夢が蘇ってくる。後悔ばかりか募る。

スカイは上半身を起こして気持ちを現にする。

「クソッ！！何で、何であの時俺は…」拳をベッドに叩きつける。

何度も何度も叩きつける。

額の汗が頬を伝って顎へ、そして顎から汗が滴る。何滴も、何滴も…スカイは気付かなかった。最初から、滴っていたのは汗ではなく涙だった事を…

第6話 明かされた真実 悲しみの涙（後書き）

いかがだったでしょうか？スカイ、リリー、スバンの3人とも異名の持ち主。

異名を持つ者はとても強い人達ばかりです。

そして、スカイは有名人になっちゃいましたね（汗）

そして、昔の戦友ラッツに起こった悲劇を自分のせいだと思ってしまっているスカイ。ここの展開にも注目しててくださいね。

では、さいならノシ

次回作はいつになるかは分かりませんので・・・

第7話 消えない闇 戦友（ラッツ）を追って

午前7時前。スバンとリリーは旅の支度を終わらせいつでも出発出来るようにしていた。

7時に宿のロビーに集合予定するようになっていた。

だが、集合時間を10分過ぎてもスカイは来なかった。

「どうしたのかな？いつもは遅れるなんて事無かったのに…」

「心配だな。見に行ってみよう」

そう言うと2人はスカイの部屋に向かった。リリーの中には不安が立ちこめていた。

（何か嫌な予感がする…スカイ…無事でいて、変な気を起さないでね…）

部屋の前に着くとスバンは何の躊躇ためらいもなくドアを開ける。その行動に、リリーは少し動揺する。

「スカイ、どうしたッ!!」部屋の中にはベッドに腰掛けて俯うつむいているスカイがいた。

リリーは躊躇いながらも心配そうに声を掛ける。

「スカイ…どうしたの？き、気分でも悪い？」そう訊くとスカイは俯うついたまま

「2人とも…椅子に座ってくれないか…大事な話がある…」

俯うついてはいるが2人とも、スカイがかなり深刻な表情を浮かべている事を悟った。

2人は昨夜とは違い、2人並んで座っている。そして、その前の席のどちらかにスカイが座る形になった。スカイの雰囲気からしてその形が一番理想的である事を悟ったのだ。

そして、スカイはどちらとも前とも言えない、丁度真中に座った。

「…この旅は、世界を守るために<力>を持ったハンターを探して、一緒に神話に出てくる竜、崩竜ウカムルバスを倒すのが目的なのは、2人も承知の事だと思っ…」

その問いに2人は無言で頷く。そして、それを見てスカイは続きを話す。

「でも、ハンター1人を守る事も出来ないのに世界を守る事なんて出来る訳ないよな…」とスカイは苦笑いしながら言う。その表情からは悲しさ、そして自分を無力さを哀れに思う気持ちが感じられる。そして、スカイは衝撃の一言を2人に告げる。

「……ッ!?」2人はその一言を聞いて一瞬フリーズ状態になり、そしてやっと理解してこれまでにないほど驚愕する。

「た、旅から抜けるッ!?」

「そ、それは一体、どういう…」そうスカイに問うとスカイは過去にあった出来事を話した。

「リリーには前に話したのだが、俺には戦友がいたんだ。名前はラツツ、かなりの凄腕ハンターだったんだ…」

「だった?」

「ああ、ラツツは俺と2人で上位のディア亜種の依頼を受けたんだ。だがそのディア亜種は上位とは思えないくらい強くて、流石のラツツでも勝てない相手だと思って一時撤退する事にしたんだ。でもラツツはディア亜種の地中からの奇襲で足に大怪我を負ったんだ。これはマズイと思って俺は閃光玉を投げようとしたんだが…手遅れだった…ディア亜種の角はラツツの胸を貫通していたんだ…」

その話の内容にスバンは口に手を当て驚く。一度訊いた事のあるリリーは目を瞑り、下を向いている。

「俺はダメなハンターだ…ディアブ羅斯は地中からの攻撃の後には隙が多い。閃光玉を当てる事なんて素人でも出来る事を、俺は出来なかった…」その言葉をリリーは必死に否定する。

「そんな事ない!仲間が吹き飛ばされたら誰だって驚く!閃光玉を投げる事なんて熟練のハンターでも忘れちゃうよ!」

「そ、そうだ!それに前は救えなかったが今は世界を救えるほどの力を持っている!それに仲間だっているんだぞツ?」

その言葉にスカイの体は一瞬ピクツと反応するが、自分の身に起き

ている事実を話す。

「少し目を瞑っただけで出てくるんだ…あの忌まわしい記憶が…当時の記憶はそれ以外全て消えたんだ…なのに、その記憶だけはすぐに蘇ってくる…」

その一言にスバンは言葉をなくす。

「こんな気持ちじゃ神話に出てくる竜なんて倒せるわけがないんだよ…」

リリーとスバンにはスカイに対して言える言葉なんて一言も無かった。

「…あ…いや…それじゃあな…もし、俺がダメだったらお前達の力で世界を守ってくれ…」

その言葉に2人はまたも驚愕した。

「ど、どう言う事…なの？」

その問いにスカイは少し微笑みながら2人に向かってこう言った

「俺が…一人で崩竜に挑もうと思う…もちろん勝てるとは思っていないよ…ただ、多少のダメージを与える事くらいは出来ると思うんだ…だから…」

その事にはリリーは両手で口を押さえて驚きの表情を浮かべる。スバンも驚愕のあまり、言葉を失った。背筋が凍りついた。その言葉は「自分は死に行きます」と言っているのと変わらなかった。

「それはダメだッ！私がゆる…ッ!？」スバンが必死に止めようとしている中、スバンは肩を叩かれた。肩を叩いたのはいつもとは違うリリーだった。前髪が目^{つか}に掛つていて表情を窺^{うかが}う事が出来ない。

スバンがリリーの方を見るとリリーは首を左右に振った。リリーは悟ったのだ。これ以上何を言ってもスカイには無駄だという事を。

「リリーッ!!お前はスカイの事がす」そこまで言った時リリーが本当に小さい声、スカイはおるかスバンにすら聞こえたか分からないほど小さい声でボソボソと何か言っている。そんな小さい声を聞き取ったスバンはリリー同様、下を向き、スカイに対して何も言わなくなった。

「…へッ、お前達なら大丈夫。上手くやれるさ！」その明るさは無理矢理作ったものだどリリーもスバンも分かっていた。

「すまないな、自分勝手に…じゃあな。…頑張れよ」

スカイは最後に2人にそう言い残し、部屋を出た。リリーとスバンの目には涙が溜まっていた。その涙は何滴滴つても滴り終える事はなかった…

スバンの頭の中にはあの時、リリーに言われた事が何回も繰り返されていた。

「…好きだから。スカイの事が、どうしようもなく好きだから…スカイのやりたいようにさせてあげたい…か…」

そう言っていたリリーはボロボロと涙を流していた…

2ヶ月後2人は、世界の危機に立ち向かう1人のハンターが崩竜に挑み、そして…行方不明になったと、その村のGMから報告を受けた。ギルドマネージャー

その時2人は膝から崩れ落ち、声を上げて泣いた。

第7話 消えない闇 戦友（ラッツ）を追って（後書き）

ストーリーの主人公が行方不明!?

この物語、大丈夫? と思った方、安心ください。

主人公が今後出るかは分かりませんが、一応どういふ方向に進んで行くかは計算済みです!!

あと、前回の話でオリジナルの防具を勝手に作っちゃいました。すいません…

第8話 2人の笑顔 救いの手を差し伸べるは…

スカイが行ってしまってもう3ヶ月にもなる。その間、2人は何度も狩猟に行ったが良い結果を残せてはいなかった。

きつとスカイが行方不明になってしまつて動揺しているのだろう。こんな気持ちではモンスターに勝てないと思つたのか、ここ1ヶ月はずつと旅をしている。だが、力の持ったハンターを見つける事が出来ずにいた。

もうすぐ夜になる。旅地を歩んでいたその時、リリーが少し先の方に村を見つけた。

「今日はあそこに宿を借りようよ？」

「そうだな、最近はずつとテントを張っていたからな。久しぶりの宿は嬉しいな…」嬉しいと言っているのに表情は嬉しそうではなく、少し悲しそうだった。この悲しさはスカイがいなくなつてからずっと続いているものだった。

門番さんの所まで行くと、門番さんは焦りながら2人に尋ねた。

「お2人方、もしかすると蒼眼の荒土と金色の稻妻ではないでしょうか？」

2人は1回目を合わせそして

「はい、そうですか何か？」と応えた。

すると門番さんが

「手続きはいいから急いで集会場まで行ってください！」と2人に言った。

2人は意図が掴めないまま、疲れ果てた体の力を出せるだけ出して走つた。その走りはやはり遅い。相当疲れてるに違いない。

2人は集会場に着いたが今日は閉まつていた。そして2人はその場に座り込んだ。

「はあはあ、一体何だつたんだろう。あんなに急かすなんて…しかも集会場は閉まつてるし…」

そう呟いたりリリーにスバンが声を掛けようとした時、閉まっているはずの集会場の中からGMキルトマネージャーであるう人が出て来て

「蒼眼の荒土様と金色の稲妻様でいらっしやいますか？」

2度目の問いだけあって、応えるのにそう時間はかからなかった。

「そうだが、何だ？」まだ少し呼吸が荒いがスバンは立ち上がり、そう応えた。

すると、GMから衝撃の事実が告げられた。

「なんと！お2人方は行方不明と報告があつたスカイ様、異名天空の武者様の生存がポツケ村の調査団より、確認されましたッ！！」
ようやく立ち上がったリリーだがその事実を告げられた瞬間、またその場に座り込んだ。いや、今回は座り込んだと言うより膝から崩れ落ちたと言つた方が正しい。

そして、声を上げながら泣く。

「うわああああん、うっ、うわああああん」

ポロポロと涙がこぼれ落ちる。

スバンはGMの肩を掴み

「それは本当か？本当なんだろうなッ！！」とGMの体を前後に振る。

「ほ、本当です。本当ですから体を振るの止めて下さいッ！！」

それを聞いたスバンは両手で顔を隠した。だが、隠していてもポロポロと涙を流している様子は分かる。

「良かった…本当に良かった…ッ！！」

その2人の表情と言葉を見聞きしたGMは微かに微笑んだ。

「…良かったですね。お2人とも…」

その後、リリーとスバンが詳しく訊いたところによると、今はこの辺りで一番医療技術が発達しているクルツトライマ>と言う街に運ばれたらしい。

2人はすぐさまその街に行こうとしたがGMに止められてた。

「な、何をするッ！！」

するとGMからこう告げられた。

「お仲間様を気遣う事はとても良いことだと思えます。ですが、それで自分たちの体を壊されてはお仲間様も喜ばれませんよ?」

確かにそうだ。それにここからルットライマまではかなりの距離になる。行くのに4ヶ月はかかる。1ヶ月も歩きつ放しの2人にとって休息は今一番必要な事なのだ。流石にその事は分かっていたのか、2人は言い返さずそうする事にした。

「わかった。では宿を借りる事にする」

「分かりました。宿はここから」

とGMが親切に宿までの道を教えてくれた。

「ありかとう、それでは」と言つてスバンは教えられた方に行く。リリーはGMが見えなくなるまで手を振っていた。きっとスカイが生きていた、見つかった事を教えてくれて感謝しているのだ。リリーだけではない、スバンも内心とても感謝しているに違いない。何しろ、いつもはとても悲しい表情をしていたスバンが今では笑みを浮かべるほど上機嫌になっているのだから。

スバンとリリーは宿に着いて手続きをしていた。

「お部屋の数は1部屋にしますか?2部屋にしますか?」

2部屋借りられるのなら2部屋と言つに決まっている。

「じゃあ、2へ」

「1部屋で!」

「わッ!?!」

入つて来たのはリリーとすぐ分かった。が、何故1部屋にしたのかわからない。

そして、スバンは店主が持っている1つしかない鍵を渋滞受け取る。

部屋に着くまでの間にスバンはリリーに尋ねる。

「おい、リリー。何故1部屋にしたのだ?2部屋借りられるなら2部屋借りた方がスペースも取らないし自由に使えただろうに…」

その問いにリリーは優しく微笑みながら応えた。

「もう1部屋借りる時、その部屋はスカイの部屋だから…」

その応えにスバンは少し驚いた。そんな事まで考えているのか…ス

バンはリリーに感心した。

「…リリーはスカイの事が本当に好きなんだな」

その一言を聞き、リリーは顔がカツと赤くなる。そしてスバンの方を向く。リリーはてつきり、からかわれているのだと思った。しかし、スバンの目を見ると冗談とは思えない、が、どこかに優しさを感じさせるような瞳をしていた。

その後、スバンは微笑んで

「私は、スカイの事が好きだ。大好きだ！リリーやるつもりはないぞ」その言葉は笑いが少し入っているがそれよりも真剣さが伝わって来た。とても真剣で、本当にスカイの事が大好きなんだと言う事が伝わる。

それを聞いたリリーも、小さな声ではあったが

「…僕だって一歩も引く気はないよ。僕だってスカイの事…大好きだもん…」

自分で言っただけで赤くなるリリーに、スバンはフツツと笑った。そうこうしてる間に部屋に着いた。鍵を開け、中に入りドサツと音を立てながら荷物を置く。

「シャワーだが、私が先に入っても良いかな？」とスバンはリリーに訊く。リリーはニコツツと笑いながら頷く。

スバンが脱衣所に入って行くのを見て1人になってしまったリリーはスカイとの旅を思い出していた。

「短い時間だったけど一緒に旅が出来て良かった…そして、これからも一緒に旅が出来たら良いなあ」

そして次にユクモ村にいた頃の事を思い出す。

「ユクモ村、懐かしいなあ…皆何してるかなあ…ママやパパは元気にしてるかなあ…」

ユクモ村には思い返せないほど思い出がある。

「そういえば師匠と初めて会ったのがユクモ村だったなあ…ルーガ師匠、何してるかなあ。きっと弟子達の稽古に付いてるに違いない…」

結構長い事思い出していたらしく、スバンがシャワーを浴び終わり、下着を着て頭をタオルで拭きながら出てきた。

「上がったぞ、リリーの番だ」

「あ、うん。ありがとう…」

リリーは少しビツクリした。スバンの・・・胸のデカさに：Gは有ろう大きさだ。それに比べてリリーは有ってくくらい・・・自分の胸とスバンの胸を交互に何度か見る。

「あのお、スバンって何歳なの？」あまりの大きさに歳を訊いてみた。

「私か？私は17。今年で18になる。でも、どうした？その質問にはどういう意味が隠されているのだ？」リリーは苦笑いしながら「いえいえ、意味なんてないよ。僕といくつ違うのかなぁと思って」「リリーは何才なんだ？」リリーよりもスバンは先輩なので似合わないが敬語を使う。

「15です。今年で16になります」やはり自分に敬語は似合わないと思ったりリリーだったがスバンが

「おっと！私とリリーは仲間なんだ。敬語は無しにしよう」と優しく言ってくれた。

「フフツ、優しいね。スバンは」と言うと、スバンは頬を赤らめて「うるさい！いいから早くシャワー浴びてこい！」と言った。

それに対してリリーは微笑みながら

「は〜い」と言って脱衣所に入っていく。

そんなリリーを見ているとスバンは「あんな妹がいたら、楽しいだろうな」と目を瞑って笑みを浮かべる。

そしてベッドに腰掛け、リリー同様、スカイの事を思い出す。

「スカイ、無事でいてくれ：そして今度は私とリリーと3人で挑もう：まあ、仲間が増えた時は4人で挑もう：」そんな事を考えていたら、いつの間にかスバンは眠りに付いていた。

リリーがシャワーを浴び終わり、身体も拭き終わって脱衣所を出る

と、スバンはもう寝ていた。

「相変わらずデカイ胸だあ…」と近寄って行くと、リリーはある事に気付き、笑みを浮かべる。

「…可愛くて優しい、幸せそうな寝顔だなあ」リリーの見たその寝顔は、まるで夢の中にスカイが出てきているのではないかと思うくらい幸せそうな寝顔だった。

そして、リリーも、もう1つのベッドの上で仰向けになる。

リリーもいつの間にか眠りについていて、その顔もスバンの寝顔のように幸せそうな可愛らしい寝顔になっていた…

ここはスカイが運ばれた街、ルツトライマ。この街はオルファンほど大きくはないが、医療技術はオルファンよりも優れている。そんな街ですら、スカイの怪我には苦戦を^{していた}虚けられていた。

スカイの怪我はかなり重く、生きていたのは奇跡以外のなにもものもなかった。確立で言うと、1体のリオレウスから^{てんりん}天燐が5枚剥ぎ取れるのと同じくらいの確率。

だが、助かったのはいいが、医療の街と言われているルツトライマの全ての医療技術を^{ほと}施しても助かる可能性は、スカイが助かった奇跡の確率よりも低い。その前に、スカイの身体がもたない。全ての医者が諦めかけたその時、1人の少女が現れた。

頭以外は防具を纏い、背中にはLBの銘火竜弩【^{みどりびく}緑桜】が背負われている。

「き、君ッ！どこから入って」と医者の説教の途中にこの少女は宣言した。

「私が、このハンターを助ける…ッ！」

第8話 2人の笑顔 救いの手を差し伸べるは…（後書き）

どうでしたか？

スカイはいなくなつて早々出てきちゃいましたが大怪我を負っているようです…

そんな事を知らない2人は大はしゃぎ。果たしてスカイは助かるのでしょうか？（まだ未定）。

そして、最後に出てきた少女、一体何者？

しかもツ！？オリジナル武器登場！！と言つても実際にある武器にちよつと付け足しただけの名前なんですけどね（汗）

しかし、能力はちよつぱり変化を加えるつもりです！！キリッ！
と言うわけで、今回もここまでで終了です。

サイナラあノシ

第9話 空の運命 救うは桜の焰

「…は、はあッ!？」

医者たちが驚くのも無理はない。ここは世界でもトップクラスの医療技術を持つ街、ルットライマ。そんな街の医者でも手の尽くしようがない大怪我なのに、少女1人で治すなんて…況してはこの少女は医者ではなくハンターだと言う事をこの場の誰もが理解していた。「時間が無いの、私がこのハンターを助ける。異論があるなら早く言え」

その時、医者たちは察した。この少女は冗談で言っているわけではない。本気で言っているのだと。

「し、しかしだなあ。君はハンターだろ? 医療なんて出来ないのに、こんな手の施しようがない怪我人を」 「まだ途中の医者の言葉に気に食わない事があったのか、医者を見ながら近づくと少女。

「ハンターは」

「ん? な、何だ?」

少女から放たれた言葉に医者は目の開きが大きくなり、口はポカーンと開いてしまった。

「ハンターは医療を持っていないというイメージがあるのか? それは残念だな…私はお前達、いや、この村の医療を遥かに超える腕を持つているぞ?」

「な、何だと!？」

「フツ、ではそのハンターを助けてみせよう」

そう言いながら少女はスカイに近づく。そして、少女から思いもしない言葉が放たれる。

「やはりスカイだったか…無茶しおって…」

「あなた、このハンターのお知り合いで?」

その質問に少女は応えなかった。少女はスカイの傷の具合、深さなどを見ているようだ。その手付きや目つき、それは真剣そのものだ

った。その様子を見た医者たちはその場に立ち尽くす。

「ん〜これは酷い…この街の技術ではスカイを助けられる確率、0.005%も無いな。…そして、私の腕でスカイが助かる確立は…7%だ」

その確立に医者はいろんな意味で驚愕した。まず、自分たちの腕で救える確率が自分たちの予想を遥かに下回っていた事。そして、助けると宣言したはずの彼女ですら救える確率は僅か^{わず}7%。

大体、その0.005%や7%はどのようにして出したのかすら分からない。それは同時に、本当かすら分からないと言う事。そんな彼女の言葉を信じると言う方が難しい。そんな疑いの目を彼女に向けた途端、彼女は言った。

「信じろ…とは言わない。だが、それでも…医者として、人として彼を、スカイを助けたいなら！」

その言葉に医者たちは心を動かされたのが、軽く下を向いていた目を彼女の方に向ける。

「スカイを助けたいのなら！私に力を貸して欲しい！さっき言った確立、7%は私が1人でスカイを救える確率だったんだ。だが、この街の医者、あなた方の力があればスカイの助かる確率は25%に上がるッ！！」

そんな自信を持って言われても…と言う顔をする医者たち。

「そ、それでも25%なのか!？」

「…君たちが少しでもミスをすれば助かる確率は0.003%くらいになってしまっ…」

その言葉に動揺を隠せない医者たち。その様子を見た少女は首を傾げる。

「おいおい、そう緊張するな！逆に考えれば、君たちがミスしなければ25%の確率で助かるんだぞ？」

その言葉に医者たちは溜め息をする。

「それでも25%なのか…」

次の言葉で、さっき何故少女が首を傾げたのか、その理由が明らか

になった。

「言っておくが私たちが手を施してスカイを救える率のマックスは25%だ」

「えッ!？」

その言葉に医者たちが驚愕する。

「残りの75%。それは、スカイが生きたいと思うかどうかで決まる。スカイが諦めた瞬間、私たちがどれほど手を施しても結果は変わらない。全てはスカイ次第で事だ」

それを聞いて一瞬、医者たちは戸惑っていたが、すぐにやる気の満ちた目にさま変わりして行った。

「よし、ルットライマの医者としてこの少年を助けてみせるッ!!」
その医者たちの様子を見た少女は少し微笑んだ。だがすぐに真剣な目つきに変わった。

「時間がない。こんな事をしている間にもスカイは死に黙々と近づいている。さあ、手術の準備だ!」

そう言いながら少女は端に武器を置いてオペ室に入っていく。少女に続いて医者たちがスカイを乗せた担架をオペ室に運び入れる。そして少女はオペの準備をしながら医者全員に言った。

「紹介が遅れたな。私は旅の者で見ての通りハンターだ。名前はブルーナ・ストラウトだ、よろしく頼む。ちなみに異名はく桜色の焰ほのおだ」

その紹介を最後に、スカイを救うための手術が始まった。

そんな事は知らないリリーとスバンは愛しのスカイに一刻も早く会うために、ルットライマに向かって歩を進めていた。

「早くスカイに会いたいなあ。元気にしてるかな」

「スカイに事だ、元気に違いない。まあ、多少の怪我はしてるだろうがな」

スバンの予想は大きく外れている。多少、では済まない大怪我を負っているのだから。

そして、もしかすると生きたスカイに会えるのはもう一生ないかも
しれない事を2人は知るよしもなかった…

第9話 空の運命 救うは桜の焔（後書き）

どう、でしたか？

新しく異名を持つハンターが出てきましたねえ。しかも少女（笑）

LB使い。しかもオリジナル武器。強いオーラ出てませんか？

そんな事はともかく、次回はリリース、スパンのお話になると思いますが、
すので（汗）

では、そゆコトでえノシ

第10話 2つの炎

スバン、リリーがルツトライマを目指して旅を始めてから2ヶ月と一週間。本来ならあと1ヶ月とちよつと掛かるのだが2人の驚異的なペースもあって、もう少しでルツトライマに着く所まで来ている。この2ヶ月、2人は泊った村々でいろんな依頼を受けた。そのおかげ(?)でリリーはスバンの異変に気付いた。

「ねえスバン、少し訊いていいかな？」

「ん？なんだ？」

「ルツトライマを目指して旅を始めてから5、6回依頼を受けたけど、どうして力を使わないの？」

その質問をすると、スバンは目線を下にし、下唇を噛んだ。表情は窺いにくい少し悲しい顔をしている。

「え！？な、何か悪い事訊いちゃったかな？ごめん！やっぱり今の質問はなしね」

すると、スバンは顔を上げリリーの方を見る。

「いや、いいんだ。悪い事なんて訊いていないさ」

そう言っただけ少し笑みを浮かべるスバンだったが、それは苦し紛れの笑みで、軽く苦笑いっぽくなっている。それを見たリリーは罪悪感を感じている。

「ごめんね……」

「いいんだ、謝る事なんてないと言っただろ？」

「うん……」

「…私が力を使わない理由……」

リリーの質問に、スバンが応え始めた。

「私が力を使わない理由…それは、力を使いこなせていないからなんだ」

その応えにリリーは驚愕する。しかし、スバンはリリーの反応を見ないまま続けた。

「いや、使いこなせないからじゃない…正確に言えば、力で…人を殺めているからなんだ…」

「ッ!？」

その言葉にリリーはまたも驚愕する。それでも、先ほどとは比べものにならない驚き。

「だから、力を使わないんだ…言ってしまったえばく使わないくではなくく使えないくなのだがな。所謂トラウマってやつだ」鼻で笑うスバン。しかしそれも苦し紛れに出したものだとしりりにはバレバレである。

「こんな簡単な返して悪いな、過去の事はあまり掘り出したくないんだ…」

「ゴメン…」

下を向き、その場に立ち尽くすリリーにスバンは優しく

「気にするな」とリリーの肩をポンツと叩いて言った。

そして、ちよつとしてから

「じゃあ、行こうか。悲しんでいる暇はないぞ？スカイに会いに行くのだから？なら、そんな悲しい顔をするな！」と出発しようとするそれを聞いてリリーも少し元気になったようだ。

「う、うん！行こう！」

そして、歩き始めてから10分程したところで、リリーは飛び跳ねた。

「る、ルットライマだ！スバン、ルットライマだよッ!」それを聞いてスバンも笑みを浮かべる。今回は本当に嬉しくて出た笑みだ。

「よし、走るか!」そう言うとリリーは全速力で走って行った。スバンはそのリリーのあとを追った。

「まったく…リリーは忙しいやつだな…」スバンはリリーを追いながらそう呟いた。

ルットライマの入口まで来るとリリーは入街手続きをしていた。スバンもリリーに次いで手続きをする。リリーの方が早かったにも関

わらず、2人の手続きが終わったのはほぼ同時だった。

リリーは街に入って行った。スカイのいる場所も分からないのに… スバンは門番さんにスカイのいた病院を訊いた。例え退院していてもそこから行った場所を訊けるかもしれないからだ。

「すまんが、1つ訊いても良いか？」

「は、はい！何でしょう！！」スバンとリリーの綺麗さに門番さんは緊張しっぱなしだったようだ。そんなスバンに声を掛けられ、門番さんは声が裏返る。

「2ヶ月ほど前、ここにリオソウルZの防具を纏ったハンターが運ばれてこなかったか？」

「あ、ああ。そのハンターさんなら西にある一番大きな病院に運ばれて行きましたか…」

「ありがとう、では失礼」

そう言つてスバンは行った。その後ろ姿を見ている門番さんの鼻の下が伸びている事をスバンは知らない… 気付くとリリーの姿がない。

「リリーの奴…リリーには悪いが、私は先に行かしてもらおうぞ」そう呟いて、スバンは西にある病院を目指した。

その病院は思ったより早く見つかった。まあデカイので目立つのもあるが…

スバンは早速病院に入り、スカイがいるかを訊く。

「すまんが、1つ訊いても良いか？」

「はい、何でしょう？」

「ここにリオソウルZの防具　　」その名前を口に出すとナーズさんは困った顔をした。

「あ、ああすまん。青色の防具の15歳程のハンターは来なかったか？」

その質問の応えに心当たりがあったのか、険しい表情になった。

「あ、はい…この館の3階の312号室です…」

「はあ！！ありがとうお！！それでは！！」そう言つてスバンはロビー

の脇にある階段で3階を目指して駆け上がる。

3階に着き、312号室を探す。

「306、307、308…」

そして、目当ての312号室を見つけた時の喜びは計り知れない。スバンは、高鳴る心臓の鼓動を必死に抑え、平然を装ってドアをノックする。返事は帰ってこなかったが待ち切れずドアを開けた。

「スカイツー！大丈夫か！！…ツー！」

その部屋にはベッドが6つあったが使用されていたのは1つだけ。左の列の窓際。おそらくスカイなのだろうがこの角度では顔が見えない。

だが、その部屋にはスカイではない、窓際に立ち空を見上げているライトボウガンLBを背負っている1人のハンターがいた。そしてそのハンターを見た時、スバンは気付いた。

「！？お、お前は力を持っているのか？」そう言つとそのハンターはクルリとこちらを向いた。

瞳はルビーのような綺麗な赤、髪は桜色の膝まであるツインテール。防具は…おそらくリオハートZだ。

「初対面の相手にお前とは、どう言う教育を受けてきたんだ…」

「なツー！？…すまない…」

「…まあいい。こいつ、いやスカイの知り合いか？」

「あ、ああ。共に旅をしてきた仲間なのだ」

「…見てみる…」そう言つと、その少女は右の親指でスカイがいる方を指した。

近づくときスカイの顔が少しずつ見えてきた。スカイは眠っていた。呼吸で一定間隔でスカイの胸が上下する。

「こ、これは…」

その時、リリーがノックなしに入ってきた。急過ぎてスバンは「わっ！」と声を出して驚いてしまう。

「り、リリー！ノックくらい」

「スカイツー！！」

リリーは少女に気付かない。気付いているのかもしれないがそれよりもスカイの事が心配なのだ。

「スカイ？スカイツ！？ねえスカイ！！」その訴えにスカイはピクリツとも動かない。動いているのは上下する胸だけ。

「スカイはもう1ヶ月ずっとその状態だ…一応手術は成功しているが…」

その言葉にスバンは驚く。

「1ヶ月も！？それに手術って！」そう言われると少女は黙って人差し指を部屋の隅を指す。スバンはその方向を見ると、そこには無残にも粉々になったリオソウルZがあつた。

「頭は^{ヘルム}バイザーが吹き飛んで、^{スイル}胸は前の右半分がない、^{アーム}腕も右がない、^{コイル}腰と脚は大した破損はない。そして、^{スイル}胸の右半分がないのはスカイの右横腹を見れば分かる。」

そう言うと少女はスカイに近寄り、着ている服のボタンを取る。ちなみに今着ているのは病院で支給されたもの。そしてボタンを外し終わり服を開く。その時、リリーとスバンの背筋は凍りついた。右横腹からヘソの辺りまで届いている傷。^{ウカムルバス}崩竜にやられた傷だ。

2人は両手で口を押さえている。

「そんな傷でよく生きていたものだ。大したもんだ…」

5分程してようやく落ち着いてきた2人。そこでリリーが疑問に思つた事がある。

「あ、あなたは？」

今頃かよ！？とツツコミを入れなくなるようなボケ。しかし、彼女は本気だ。^{マジン}

「私か？私の名前はブルーナ・ストラウト。知つての通り力を持っている。属性は火だ。」

それを聞いて2人は驚愕する。火はもうスカイがいる。なのに何故？そう思つてるに違いない。

「そして、1つ言わせてもらつ…スカイはもうお前達と旅をさせない！…！」

その言葉に2人は目を大きく開いた。そして、次の瞬間。驚きが怒りに変わった。

「お、お前にそんな事を決める権利はない!!!」

「そ、そうだよ! 決めるのはスカイだ!」

その返しに腕を組むブルーナ。

「いいか、お前達は一緒に旅をしていたんだよな? なら、何故1人で行かせた!!!」

「それはスカ」

「この傷はお前達を作ったと言っても過言ではない! スカイにこんな傷を作らせて、それでも一緒に旅をするだと? 身の程を知れ!!!」

2人は何も言い返せず俯いてしまった...

「最悪の場合、意識が戻らない可能性だってあるんだ!」

「!!!?」2人はヒクツと頭が上がりかける。でもまた俯いたままになる。

「スカイツ...」リリーは膝から崩れ、スカイの寝ているベッドに顔を伏せる。

そしてそのまま、無音の状態で日が落ちようとしていた...

第10話 2つの炎（後書き）

どうでしたか？話が急過ぎてすみません…

スカイ、一体どうなるんでしょうね？

一応、私の中では出来てますよお！！

ではまた次回をお楽しみなノシ

第11話 幼なじみ

312号室の静寂は長時間続いた。リリーはスカイの寝ているベッドに伏せて泣きっぱなし。スバンも俯いたまま。気付けばスバンも涙を流していたが拭う気配はない。

ブルーナは窓際に立って空を見上げていたが突然振りかえり、もはや防具の役目を果たせなくなった姿のリオソウルズに近づく。そして頭、胸、腕、と手に取って見ている。全ての部分を見終わるとブルーナは肩を落として

「これはもう使い物にならない」とため息をつき病室を出ていく。

ブルーナは5分ほどで帰って来た。しかし、ブルーナが病室を出ていく時と帰ってきた時の2人の変化は微塵も無かった。リリーは相変わらず顔を伏せ、スバンは俯いたままボロボロと涙を流している。もちろんこの涙はスカイの事を本気で心配して出ている涙だと言う事をブルーナも理解している。2人ともかなり罪悪感を感じているに違いない。そんな2人を見てブルーナはまたため息する。

「…ふう、こんな可愛い女の子2人を置いて先に行ってしまうのか？スカイ」その言葉にスカイはピクリツとも動かなかったが、2人はその言葉を聞いて反応した。リリーは顔を上げスバンは涙を拭った。やはりリリーは泣いていたらしく目元が腫れている。もちろん、スバンも目元が腫れている事は言うまでもない。

「ブルーナさん…」2人とも反応があつた事に少しホツとして笑みを浮かべるブルーナ。

「先ほどはすまなかつたな、旅をさせないなどときつい言い方をして…だが私もスカイの事が心配なのだ。医療を持つ者として、そして幼なじみとして」その言葉に2人は驚き、ブルーナの方を見る。

「幼なじみ…って？」スバンがそう訊くとブルーナは少し驚いた様子を見せたがすぐに理由が分かった。

「おっと！まだ言っていないかったようだな。私はスカイと同じ、ポツケ村出身だ。スカイとは小さい頃からの付き合いだ」

「そう、だったんですか……」その返しに2人は納得しそして、スバンは先ほど同様に俯いてしまう。

その場の空気が再び沈黙と化す。この空気はあまりにもいき苦しい。ブルーナはこの場の空気に苦しい顔を隠しきれない。

「ん……まあ今日はもう暗い。1度宿に泊って行くと良い。それにスカイがいつ起きるか分からん、毎日見舞いに来てやってくれ。スカイも喜ぶぞ」とブルーナは2人に報告してみるものの応答はない。それでもきつと聞いているもの思ったのかブルーナは黙って病室を出ていく。

時刻11時14分。ブルーナが病室を出て約1時間が経過していた。先に口を開いたのはスバンだった。

「……リリー、そろそろ宿に行くぞ。また明日来よう」そう言うとりリーは無言で立ち上がり、トボトボと病室を後にした。スバンもリリーの後を追うように病室を出た。

「また明日来るからな、スカイ」入口からではスカイの顔は見えないが、スカイの顔があるであろう場所を見ながら病室を後にした。

この街、ルットライマの西にある一番大きな病院、ルットライマ西部第一病院の向かいには、旅人がこの街に宿を決める時最も人気のある宿がある。リリーとスバンはそこに泊る事にした。設備も整っていて、何より探す手間が省けるからだ。

人気な宿だけあって満室かと思っていたが2人はその宿に泊まる事が出来た。最近起こっている環境の変化、そのせいでキャンセルの問い合わせ何件か出たらしくそのため空室があったというわけだ。

2人は手続きを済ますと鍵を貰い、自分たちの部屋に向かった。

いつもなら新しい宿の部屋に着くとはしゃいでいたリリーだが今日はいつもと違いテンションが低い。

2人は部屋に着くとまず防具を脱ぐ。

「リリー、私が先にシャワーを浴びても良いか？」防具を全て脱ぎ終わったスバンがリリーに訊くとリリーは無言で頷いた。リリーは頭と胴の防具を外し終わり今、腕の防具を外している。

スバンは脱衣室に入っただけで、腕の防具の下に着ていたインナーを脱いで浴室に入る。中に入るとシャワーからお湯を出す為にレバーをひねる。

最初シャワーから放出されるのはお湯ではなく水。だがそんな事お構いなしにシャワーを浴びるスバン。その時スバンはスカイの事を考えていた。

(…スカイはいつ起きるのだろうか、気がついててももう一緒に旅は出来ない…私があのかいを止めていけば…)

不安と後悔が募る。そう思っているとやっとお湯が出始める。そして頭から足に伝って排水口に流れていく。スバンの涙とともに…

スバンがシャワーを浴びている頃、リリーは防具を脱ぎ終わって2つあるうちの1つのベッドの上で仰向けになっていた。

「スカイ…元気に、なるよね…僕の事、おいて行ったり…しないよね」そう言っただけでリリーは掌を天井に向けて突き出す。その意図は分からない。だがスカイの事を思うといつも手を上に突き出すのがリリーの癖らしい。

リリーはその動作をどれだけしていたのか知らないが浴室の扉が開く音が聞こえた。

そしてその10分後、リリーが脱衣所から出てきた。

「リリー、上がったぞ。お前も入って来い」下着姿で出てきたスバン。

「う、うん…」相変わらずデカイ胸に驚愕するリリー。その驚きの様子に気付かないスバンは頭をタオルでワシワシを拭いている。リリーはスバンに言われて脱衣室に入っただけで、スバンはある程度頭を拭くとクローゼットに入っているバスローブを着る。バスローブ

ブを着るとスバンの胸の大きさがより際立つ。
スバンは先ほどまでリリーがいたベッドと違う方のベッドに仰向けになる。

仰向けになると自然と胸を張ってしまう。そのためスバンの胸がより良く、より良く際立ってしまう！

気付くとスバンはそのまま寝てしまっていた。

リリーがシャワーを終え、身体に付いた滴を拭いて頭にタオルを被せて脱衣所を出ると、スバンの張った胸を目の当たりにする。

「ど、ど、ど、どうすればこんなに実るのかなあ」リリーは不思議でならなかった。

「う、うう…触ってみようかな…」と両手を何かを掴む形にしているリリー。

「ははは、何をしてるんだ僕は！」そう言ってもう一方のベッドに仰向けになる。がスバンの方を1度見てリリーは仰向けになるのを止めた。理由は言うまでもない…

そしてすぐにリリーの寝息が聞こえてきた。

そして今日もまた1日が終わろうとしていた。

第11話 幼なじみ（後書き）

どうでしたか？

今回は自分から見てもあまり纏まった感がしませんでしたけど…まあ

一応（汗）

次回は未定です。狩りに行くか、ドタバタするか…

まあすぐに次回を上げると思いますのでノシ

第12話 優しい炎は2人を癒して

医療都市ルットライマ。その村にスカイが運ばれた事を知ったスバン、リリーがその街に宿を借りて5日。2人は毎日朝から晩までスカイの傍に付きっ切り。それほどスカイの事が大切な人になったのだろう。しかし、そんな2人を差し置いてスカイは微動だにしない。2人の元を離れはスカイは、今世界を滅ぼさんとしている崩竜ウカムルバスに戦いを挑み見事敗北してここに運ばれてきたのだ。

2人がお見舞いに来るようになってブルーナの姿はどこかに消えた。この4日間、2人はブルーナを見ていない。まあ、彼女もハンター。いつまでも見舞いに来る訳にもいかない、という判断を2人は導き出したのだ。そして5日目。今日は2人よりも早くブルーナが見舞いに来ていた。

「ブルーナさん！？ちよつと！どこに行ってたんですか？」そう言っただスカカとブルーナに近寄るのは、驚きの表情を隠せないリリー。いつもより少し目が大きく見開いている。スバンもいつもより少し目が大きく見開いている。だがスバンはすぐにいつもの目に戻る。

「ん？何だ？私の事を心配していたのか？」と訊かれたリリーは若干の戸惑いを見せながらも、

「う、うん…まあ力を持った者同士だしね！」と苦笑いをして見せる。

その返しにブルーナは口元に笑みを浮かべ、

「ありがとう。初対面とは言え君達の事を悪く評価し過ぎていたよ。うだな、すまなかつたな」と明るく言う。そんな明るい笑みを浮かべられ、その上こんなちよつとした事でそこまで反省されてはリリーは少し悪い事をしてしまったと反省せざるを得ない。

「いやいやッ！初対面の相手を悪く仮定する人だっているって！況してこんな物騒な武器を纏ってるんです。それが普通の対応だよ！」

焦っているのが見え見えだ。額には脂汗が滲んでいる。いや、滲むではすまない。ダラダラと滴っている。それを見たスバンが透かさずフォローに入る。

「そ、そうだ。謝る必要はないぞ」苦笑いを浮かべるスバン。

「フツ。君達は優しいな。スカイが好んで旅をするわけだ」

そう言うブルーナだが2人にはブルーナの方が優しいと言わんばかりの感情が込み上げてくる。その感情を口にする前に2人は心の中で1つ誤点を注意した。決して好んで旅をしているわけではない。が、そこは黙っていよう。それにスバンとリリーはスカイとの旅を好んでいるから、あなが強ち間違えではないのだ。

そして、溜めていたブルーナへの感情を露にする。

「ブルーナさあんツ！あなたはなんて優しいんですかあ！！」

「うんツ！君の優しさはもはや驚愕物だな！」

何をそんなに褒められているのか分からないブルーナは、頬を掻きながら苦笑いしている。その様子は苦笑いしているのにも関わらず愛らしく、可愛らしい。この場にスカイがいたら頬をポツと赤くしていたに違いない。

いや、いるにはいるのだが…意識がないのではポツとするところか、幼なじみであるはずのブルーナすら見る事も出来ない。

ブルーナの優しさに気付いた2人、ふとスバンがブルーナに報告と言う名の謝罪を言った。

「あ、先日はスカイの事でブルーナ殿を苛立たせてしまい、申し訳ないことをした。すまなかった」

一瞬、何の事か分からなかったブルーナだったがすぐに把握した。

「？あ、ああ。いいんだ別に。気にするな。それと殿はやめてくれ、普通にブルーナでいい」

「そうか、なら私たちの事も普通に呼んでくれ」

そう言うトリリーも笑顔でウンウンと頷いている。

「ブルーナもスカイの幼なじみなら知っているとと思うが、ラツツという男を自分が殺めてしまったと思いきんでしまっているのだが…」

スバンとリリーは、スカイが行ってしまった日の事をブルーナに話した。

「…なるほど。どうやらスカイは<ラッツの言葉>を覚えていないか、軽い記憶喪失になったのか…まあスカイにとってラッツは掛け替えのない親友、兄弟みたいなものだったからな。そんな大切な仲間が残酷な死に方をすれば記憶喪失になっても仕方がない」

そこでリリーが質問した。スカイの過去が気になったのか、そのスカイの親友ラッツの事を訊き始めた。

「そのラッツってハンターの話をしてもらっても…いいかな？」

「…他人に仲間の個人情報流すのは良くない事だと思うが、君達はスカイの仲間であり、私と同じ力の持ち主だ。ラッツも許してくれよう」

そう言っただけブルーナは過去のポケット村にいたラッツと言うハンターと、その周りに起きた出来事について話してくれた。

第12話 優しい炎は2人を癒して（後書き）

え、と言うわけで次回からは過去編です。スカイに起きた出来事、あの事件の新事実。<ラッツの言葉>とは!?

果たしてどういう事実が明かされるのか?

そして過去編に出てくる新キャラ!今後の発展に注目あれ!!（笑
ではそゆコトでえノシ

第13話 アレルドバーク家の朝

スカイ・アレルドバーク、16歳。スカイはオルファンと言う街にあるハンター訓練養成学校を卒業して自分の故郷であるポツケ村に帰ってハンターと言う命を落としかねない、まさに命懸けの職に歩みを始めていた。

ハンター訓練養成学校とはその名の通りハンターを訓練・養成する学校で、ここで最短3年、最長6年ハンターとしての修業を積む訳だ。1年の初めから半年で優れた実績を見出した者だけが半年で進級する事が出来る。しかし、その成績を出すのは極めて難しく、10年に1人出るか出ないかと言う確率だ。

因みにハンターを目指す者のスタートは3つに分けられる。1つ目はハンター訓練養成学校で修業を積む、2つ目は熟練のハンターに弟子入りする、3つ目は独学でハンターの道を歩む。だが、独学でハンターの道を進む者は極めて少なく、そう言うハンターは大多数がすぐに命を落としてしまうのだ。そして、ハンターのお半がハンター訓練養成学校出身なのだ。熟練ハンターに弟子入りする者も少なくはないが、ハンターは個人で癖や構えのフォームが変わっていく。それは自分にあつたやり方であつて、他人に教えるとなると逆に難しく、弟子入りを断るハンターが多い、だからハンターを目指す者は自然と訓練養成学校出身のハンターが多いのだ。スカイもあるハンターに弟子入りを申し込んだが断られてしまい、訓練養成学校の出身と言うわけだ。そして、つい3ヶ月前にオルファンハンター訓練養成学校を卒業したばかりだ。

今はポツケ村のハンターとして毎日を過ごしている。

ポツケ村の1日の始めまりは訓練養成学校の時より遅く、いつも日が出ていない時間に起きてしまう。学校にいた頃は1日の始まりが早すぎたため、ポツケ村の始まりが遅く感じてしまうのも無理はな

いのだが。

ポツケ村にどこからか分からないが、鶏の鳴き声が響き渡る。それは日の出が近いと言う事を意味しているのをポツケ村の住民は知っている。

「もうすぐ日の出かあ。そろそろ家に戻るかあ」スカイはポツケ村に帰って来て毎日、村の端にあるスクライの森の入口にある1本の大きな木の傍で達の素振りをしている。この事は誰にも教えていない。

入口にある大きな木を中心に、大広場になっている。その風景が神聖さを出しているのか、村の人はその木の事を【護りの樹】と言っているらしい。

スカイはその大広場を後にして家に帰って行く。その背中には鉱石等を使った武器、【鉄刀】が背負われている。腰にはアイテムが入ってパンパンになっているポーチが下げられている。年はまだ若く見えるが、今の見た目は丸つきりハンターそのものだった。

護りの樹から歩いて10分程すると家が密集している地域が見えて来た。そこから見える風景では、各々の家から家事を始めている。その証拠に各々の煙突からモクモクと煙が出ている。スカイの家からも家事を始めたと言わんばかりの煙がモクモクと出ている。それを見たスカイは歩くペースを少し早くした。

ペースを早くしたからか、家に着くのはあっという間だった。

朝早くに稽古をしているのをばれたくないスカイは、2階にある自分の部屋と家の裏を繋いでいる梯子を静かに登る。自分の部屋に着くと背負っている太刀と下げているポーチを木製の机の上に置く。太刀は机の横に立て掛ける。そして、今装備している防具、ハンターシリーズを脱ぎ武器を収めているクローゼットに収める。体中に付いた汗をタオルで拭い、私服に着替えて一階に下りる。

1階に下りると母、リルア・アレルドバークが朝食の準備をしている。リルアはまだ32歳。スカイを16歳で産んだのだ。

そして4つの椅子に囲まれた机、その1つの椅子に座っているのが

父、グラウト・アレルドバーク。彼はハンターをしている。しかもかなりの凄腕ハンター。オルファンでもその名前を轟かせ、知らない者の方が少ない程だ。彼の歳も35と若く、それなのに実力はかなりの者。並みのモンスターではダメージを与えるのも難しいのではないだろうか。

リルアの容姿は、髪は茶のショートで身長は158くらい、顔はとても可愛らしくて美しい。32どころか25と言っても通じるくらい若く見える。アタックすれは落ちない男はいないだろう。

グラウトは、髪は紺色で前髪は上唇程まであり、身長は178前後。目はとても穏やかそうな目をしていて、こう言うのをイケメンと言うのだなと改めて思わされるような顔。イケメンそのものだ。そんな2人から生まれたスカイは幸せ以外のなにもものでもないはずだ。

「おうスカイ、お前は起きるのが早いなあ」

ギルドからのいろんな情報が掲載されている紙、所謂新聞を読むグラウトはスカイが早起きなのに感心している様子でスカイを見ている。

「おはよ。父さんこそ早いね。また依頼が来たの？」

「ああ、今回は上位のドドブランゴ2頭の依頼だ」と余裕の笑みを浮かべるグラウトに対し、リルアとスカイはかなり心配している様子。

「大丈夫なの？お願いだから無理はしないでね？」キッチンにいたリルアはいつの間にかグラウトの傍に来ていた。リルアは特に心配している。まるで自分の事のように。

「大丈夫だよリルア。俺は今までもっと過酷な依頼を何度も達成してるんだ。それと比べたら今回の依頼は楽な方だよ」

「でも……」

リルアがそう言うのとグラウトは席を立ってリルアを軽く抱きしめる。抱きしめられたリルアは頬が赤に染まっている。

「ありがとうリルア。俺にはリルアとスカイがいるから頑張れる。だから心配するな」

「あなた…」

そして2人は口づけを交わした。さつきまでは軽く抱きしめていたグラウトの腕がどんどん強くリルアを抱きしめる。

「あの、息子が見てるんですが…」終止符を打ったのはスカイだった。スカイは頬を赤く染めてグラウトがさつきまで見ていた情報誌を読んでいる。

「あ、スーくんゴメンね。すぐ朝食の準備するから」リルアは苦笑いしながらキッチンに戻って行く。その帰って行くリルアの頬は赤ではすまない真っ赤に染まっていた。

そして情報誌を見ていたスカイは何かを感じた。その感じる方を見ると父、グラウトが立っていた。

「えっと、何かな父さん？」苦笑いしながら人差し指で頬を掻く。

グラウトははぶてているように見えるがスカイには心当たりがない。「父さんはこれから狩りに行くんだ。一時の幸せくらい味あわせてくれよなあ」

いろんな意味で味わっていたら、と突っ込みたくなる一言だったが、父がはぶてていた理由があまりにもしょうもない事だったからスカイは口をポカーンを開けっぱなしになるスカイ。

「まあ、子供のスカイには分からないだろうがな」グラウトは腕を組み誇らし気に笑みを浮かべている。

「…憎たらしいなあ」とスカイは呟く。

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ…」

そう言うとグラウトは「ならいいが…」と呟いて壁に掛けられている時計を見る。

「ふう、じゃありルア。そろそろ行く」

すると朝食の支度中だったリルアは着ているエプロンで手を拭きながらグラウトに近づく。

「本当に、無理はしないでね？」

「分かってるよ」

そう言つと3人は玄関に向かつた玄関にはアイテムが敷き詰められているのが見るだけで分かるポーチとある古龍の素材で作られた火属性の武器、【テスカ・デル・ソル】が立て掛けられていた。グラウトはポーチを腰に下げ、その大剣を背負う。防具はリオレウス亜種の素材で作られた【リオソウルZ】の頭ヘルム以外を纏っている。頭はポーチとは反対側の左側の腰に下げられている。

「じゃあ行つてくる。スカイ、お前もハンターになつたんだ。リルアを一旦任せた。怪我させたらタダじゃ済まさんぞ？」

「へいへい」

「じゃああなた、気を付けてね」

リルアがそう言つとグラウトは無言で頷き、そして出発した。スカイとリルアはグラウトが見えなくなるまで手を振っていた。グラウトが見えなくなると

「じゃあ朝食にしようか！」と言つて家に入つて行つた。

そしてまたスカイの1日が始まるうとしていた。

第13話 アレルドパーク家の朝（後書き）

冒頭でハンター訓練養成学校と言うワードが出ましたね？将来的にはその編も作る予定です。どうかお楽しみにしてください。

今回はまだラッツが出てきませんでしたね、すいませんm（ ）（

m

次回で出ると思いますのでどうか楽しみにしてくださいな！！

第14話 武器強化の道

グラウトが家を出発してすぐ、スカイはあるクエストに行く準備をしていた。

「…あとは…あ！ピツケルを忘れるところだった！危ない危ない…」
そう言つてスカイはアイテムボックスからピツケルを3本ほど出す。
「3本もあれば充分だろ」

その時、スカイの部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「スーくん、ラッツ君とウルちゃんが出来たわよお？」その言葉にスカイは笑みを浮かべる。そしてすぐに「今行くう！」と少し大きめの声で返事をする。

スカイはアイテムポーチを腰に下げ纏っているハンターシリーズの背中に愛武器の鉄刀を背負い、束にしたピツケルを手に持ち準備万端で部屋を後にした。

1階に下りてリルアに出発の報告をする。

「じゃあ母さん、行ってくるよ」

「うん、気を付けてね？無理しちゃダメだよ？失敗しても良いから生きて帰ってくる事、いいね？」

「分かつてるよ。それに今回は狩猟クエストじゃないから安心して」
先ほどまでかなり心配していたリルアもそれを聞いて少し安心の表情を漏らす。

そして玄関に置いていたハンターグリーヴを履き終えると

「それじゃあ、行ってくる！」そう言つてスカイはリルアの方を向いてバイザーを下す。

スカイはリルアに向かって右手の親指を上にした。

「いってらっしゃい」そう言つてリルアもスカイに向かって親指を上にした。その時の表情はとても穏やかで、スカイに安心感を与えた。

玄関の扉を開けるとそこには、2人の防具を纏った少年と少女がい

た。少年はスカイとは違うバトルシリーズに身を包み、腰には【ハンターカリンガ】と言う片手剣が携えられていた。少女はスカイと同じハンターシリーズで、背中には【骨笛】と言う狩猟笛の武器が背負われていた。

「遅えぞスカイ。何分待たせる気だ！」

この少年はラッツ・シュバニクル。見ての通り片手剣使いで、スカイとはハンターになる前から遊んでいた。所謂幼なじみ。

「ま、まあそれほど待ってないからあまり気にしないでね」そう言ったのはウル・ジエニファー。狩猟笛使いでスカイとはハンター訓練養成学校で知り合い、ポツケ村に拠点の置いている新米ハンターだ。今は村長の家にお世話になっているらしい。

「ごめんごめん」ウルはああ言うものの、一応謝っていた方がいいと判断したスカイは軽い感じで謝る。

「まあいいけどよ。ところで今日は何のクエスト行くんだ？」

「えっと確か、スカイ君が決める番だったよね？」この3人はよく一緒にクエストに行くらしいが、いつも3人の行きたいクエストが異なる為、順番に行きたいクエストを決めているらしく今日はスカイの番らしい。

「うん、今日はフルークツクに採取クエに行こうと思う」

フルークツクとは【フルークツク雪山】の事で、そこでは新米ハンターに重要視される【マカライト鉱石】や【鉄鉱石】、【光蟲】と言った素材を簡単に採取できる狩猟場なのだ。鉱石では【火山】の方がより珍しいものを採取できるがその分、危険度も高いためスカイのような新米ハンターには立ち入りを許可されていないのだ。

「採取クエか…何でまた採取なんて選んだんだ？」ラッツが嫌そうな顔をしている。「採取なんて地味なクエストなんか出来るかッ！」「と言わんばかりの顔だ。

「俺の武器、鉄刀なんだがあとマカライト鉱石が2個、鉄鉱石があと1個で強化できるんだ」と自慢でに胸を張るスカイ。

「武器強化ですか…いいね！私も早く強化したいなあ」

「強化かあ…考えてなかったな。まあいい、さっさと行こうぜ！」
「そうだな」「うん！」

そう言つて3人は集会場に向かった。
5分後、3人は集会場の扉を開けた。中からはまだお昼前なのにお酒の臭いと、賑わう声で満ちていた。

「この臭いはいつになつても慣れる気がしないな…」

「そ、そうだね…」ラッツの言葉に賛同するウル。もちろんスカイも同感だった。

スカイ達はクエストボードに向かった。クエストボードとは近くの村からの依頼された依頼書を張り付けているボードの事。ここから自分に合ったクエストを選んでGMキルドマネージャーの所に持つて行き、そこで許可されたらクエストに行く。ハンターランクの問題で許可が下りないクエストは諦めるしかないシステムになっている。それもそうだが、ハンターランクが低いのに難しいクエストに行つても死に行くようなものだからだ。

そこでスカイはクエストボードに張られていた【雪山素材ツアー】のクエストを取り、GMの所まで持つて行く。

「『雪山素材ツアー』ですね。参加数は3人でよろしいでしょうか？」

「はい！」3人は息ピッタリでそう答えると、GMも笑みを浮かべ依頼書に参加人数である「3」の数字を人数欄の部分に書く。

「これでよしつと、それでは完了しましたのであちらの出発口から出発して下さい。竜車を3つ用意しているのでそちらを利用されて結構です」

「ありがとうございます」そう言つてスカイはGMに一礼すると出発口に向かった。GMも3人に向かつて一礼。両手をへその辺りに置き、深々と頭を下げている。

竜車に乗って数十分、ラッツがある事を思い出した。

「あ、そう言えば今日スカイの父さん見たぞ！」

「あ！私も見た！超カツコ良かった！」

グラウトが家を出てすぐにラッツ達 came。だから会っていてもおかしくないと言うわけだ。

「なんかのクエに行ってたのか？」

「うん、ドドブランゴ2頭。それも上位の……」

「スゲー！ってあれ？ドドブランゴって事はもしかして!？」

「残念ながら父さんが向かったのはフルークツクじゃなくてセルク雪山だよ」

それを聞いて2人はテンションが急降下。それを見たスカイはフォロワーに入る。

「ま、まあまあ。俺ん家来たらいつでも見れるからさ、そんなにテンション下げないでよ」

それを聞いて2人は少し生き返った。

「それにしてもスカイのお父さん凄いよね。【天空の騎士】って言われてるんでしょ？」

「だよなあ、異名持ちってところがスゲーよ」

そう、この頃は異名を持っているハンターは世界で4人しかいなかったのだ。そしてその中でも1、2を争っていた1人がスカイの父、グラウト・アレルドバークだ。

そんな事を話していると雪山に着いていた。

「やっぱり寒いね」

「ホットドリンクを飲んだら温かくなるよ」そう言ってスカイはホットドリンクを飲む。次いで2人も同時に飲む。

「プハー、温まるなあ」

「そうだねえ体中が温かいよ」

「それじゃあ行こっか!!」

「うん」スカイの合図で3人は歩を始めた。これから目の当た

りにする恐怖の出来事など知る由もなく…

第15話 緊急事態！救う勇氣は奇跡を起こす

現在は雪山の洞窟の中。3人クエストを始めて25分が経過していた。スカイは目的であったマカライト鉱石2個と鉄鉱石1個を既に採取していて、ポツケ村に帰れば強化することができる状態にあった。だが、せつかく来たのだから時間いっぱいまでクエストを続けようと言う結論になった。だが採取用のアイテムが底をつき始めていた。

「スカイ、ピツケル余ってるかあ？」

「ついさつき壊れて、底をついたよ……」

「私も…虫網もなくなっちゃった」

3人は採取用のアイテムがなくなってしまう気力も下がりつつあった。

「もう帰るか？」

「それもそうだね。スカイ君もそれでいいよね？」

「うん、じゃあ帰ろっか」

そして入って来た洞窟の入り口から外に向かおうとしたその時！

「ウオオオオオオツッ！！」

「……ッ!?」 3人が同じ方を見る。その声は雪山の頂上の方から聞こえた。3人は得体の知れないその声に怯えていた。今までにこんな轟音を聞いた事がない、そんな事を思いながら。

「ななな何だよ、今の……」スカイがかなり怯えた声で2人に尋ねる。「わ、分からないよ……」勿論2人は知るはずもない。3人が今までで会った事のある大型モンスターはせいぜいドスファンゴやドスランプス程度。だがその2頭ともあんな轟音な咆哮はしてこない事を3人は知っていた。これもハンター訓練養成学校で学んだ知識だ。

だが1つ、安心な事に声が出たのは頂上付近から。このままBCにベースキャンプ戻れば頂上を通る事はない。それは同時に、モンスターとの遭遇は

無いと言う事になる。

「こ、声がしたのが頂上付近から良かった。これならモンスターに会う事は」

「な、なあ、声がした所に行ってみないか？」

そう言ったのはラッツだった。ラッツの方を見ると不気味な笑みを浮かべている。

もちろん2人は反対だった。もしも怪我でもしたら、いや、怪我では済まない場合だって起こり得る。第一、そんなリスクを背負ってまで行く必要性がどこにもない。そんな好奇心だけで仲間を危険な目にあらせる事だけは絶対に避けたい。そんな願いからの反対だった。

「な、何馬鹿な事言ってるんだよ！」

「そうだよ！怪我でもしたらどうするのッ！」

2人がラッツの意見を反対すると、ラッツは「チィッ」と言って腰に携えていたハンターカリングを抜き、スカイに刃先を向ける。ラッツは未だ不気味な笑みを浮かべている。

「じゃあ：俺1人で行く！2人はBCに戻ってる。俺は少しでも大型モンスターを生で見たい！じゃあなッ！」

それと同時にラッツはどこからか【けむり玉】を出し、足元に投げつけた。けむり玉は広範囲にわたって白い煙を出し、視界を奪うアイテム。ラッツはそのアイテムを上手く使い、2人の視界を奪って1人頂上に向かった。煙のせいで2人はラッツを追う事が出来ない。「ラッツウウッ！！行くなああ！」

「ラッツウウ！！行かないでえ！」

2人の声はラッツに届いていた。しかし、ラッツは2人の言葉を無視して頂上に向かった。

煙が晴れたのはラッツが行って3分くらいした頃だった。2人は「行こう！！」と言うスカイの言葉を合図に頂上に向かったラッツを追った。

数分洞窟の中を走り続けると頂上に出る出口が見えてきた。

「もう少しだ！」2人は全速力で走る。そして外に出た。

そこには恐ろしい光景が広がっていた。あるモンスターにラッツがポコポコにされていた。所々にラッツのものであろう血が飛び散っていた。ラッツの愛武器であるハンターカリングとその盾が雪の地面に埋もれていて、ラッツ本人は右手で左の二の腕を抑えている状態でモンスターの攻撃をギリギリ回避出来ている。ラッツに迫り来るモンスターそれは…

「あ、あれは…」スカイは見覚えのあるモンスターだった。ハンター訓練養成学校にいた時、資料部屋でモンスターについて書かれていた本に書かれていたモンスターだ。だからそのモンスターの強さも危険さも知っていた。

「き、金獅子：レーザージャンツ！」そのモンスターは熟練ハンターでも手を焼くほどの危険なモンスター。その戦闘方法は荒く重い、情報誌によるとその咆哮は天を割り、その拳は大地を砕くと書かれていた。

そしてこれは見れば誰でもわかる。ラッツは極めて危険な状況下にいる。よく見るとラッツが押さえている左腕、明らかに折れている。頭からも血が流れていて、呼吸も荒い。あれではいずれ回避しきれず攻撃が直撃するのは時間の問題だ。

しかし、2人にはどうもする事が出来なかった。それはそうだ。相手は超強靱なモンスターのレーザーガン。自分が助けに行っても死体が増えるだけだ。かと言ってラッツを見捨てる訳にはいかない。心の何処かでそうは思っているスカイも足が震え、前に進む事が出来なかった。

その時、スカイにある感情が生まれた。

（これは自分勝手な行動を取ったラッツが悪いのだ。何も自分が命を懸けて護る事なんてない）

スカイの足が1歩後ろに下がった。

(今退けばウルと俺は助かる)

そう思ったスカイはラッツを置いて逃げようとした。

その時、父であるグラウトの言葉が蘇ってきた。

(お前は何故ハンターになりたいんだ?)

実際はカツコ良かったから。自分のお父さんがカツコ良かったから、それだけ。そう言ってしまうと反対される気がした。だから適当に答えた。

(皆を守りたい)

その時は適当に浮かんだ答えだった。けど今は違う。心の底から皆を、仲間を…

「守るんだツ!!」

不意に言い放ったためウルを驚かせてしまった。だがそんなウルに目もくれずにスカイは先ほど採取した【ネンチャク草】と【石ころ】をポーチから出して調査する。調査書がないため失敗する可能性があったが無事【素材玉】を作る事が出来た。次にポーチから出したのは虫籠で、その中から【光蟲】を1匹出した。そしてさっき作った素材玉と光蟲を調査した。こちらも1発で成功した。作ったのは閃光玉だ。閃光玉は投げつけると強い光を放ってモンスターの視界を一時的に奪うアイテムだ。

スカイはそれを持ってスカイに向かおうとする。

「す、スカイ!?!」その行動に驚くウル。

「ウルはここにいて!」そう言っただけスカイはレーザーガンに向かって走って行った。

「ウオオオオ!!」スカイの声にレーザーガンもラッツも気付く。

「す、スカイ!」

「目を閉じるツ!!」そう言っただけスカイは閃光玉を投げる。そしてすぐに閃光玉からは強い光が放たれる。それを受けたレーザーガンは両手で目を押さえている。

「ヴオオオオ!」スカイはその一瞬の隙を突いてラッツを負ぶり、ウルのいる方向に向かって全速力で走る。

「す、すまない」

「気にするな、今は逃げる事だけに集中するんだ」
徐々に洞窟に入る入口が近づいてくる。

「もう少しだ!!」スカイが安堵の息を漏らしたその時。

「スカイ君ッ！後ろおおお!!」

ウルがスカイの後ろを指さしている。スカイはウルが指さしている方、自分の背後を見る。

そこに広がるは黄色い、雷で出来た巨大な玉がこちらに向かって来ている光景。距離にして20メートルもない。

その時スカイは悟った。自分は死ぬのだと。だが、ラッツを助けに向かった事は後悔していなかった。ハンターと言う職だけあっていつ死ぬかは分からない。常に死と隣り合わせなのだ。スカイはそれを承知でハンターになったのだ。

その時スカイは自分の横を何かが通るのを感じた。後ろを見ようとした時、スカイは爆風でラッツ諸共吹き飛ばされた。

「うぐッ」雪が積もっていたので着地時にダメージを受ける事は無かった。そして吹き飛ばされたスカイは爆風のした方を見た。そこには1人のハンターがいた。そのハンターの武器にスカイは見覚えがあった。武器はダオラディグリーブグと言う古龍の素材を使った大剣、防具はリオソウルズ。そう、そのハンターは

「スカイ、怪我は無いか!!」

「と、父さん…」

どうやら爆風の原因は雷の玉をスカイの父、グラウトが大剣で防いだ時に生じた風だったらしい。グラウトはガードの姿勢のままスカイの方を向き、微笑んでいた。

「父さん…何で…」

そう訊くと、グラウトは微笑んだまま

「大切な息子とその友達を護るのに理由なんてないさ。さあ、スカイはその子を連れてBCに帰るんだ。あそこにいた子なら先にBC

に戻るよう言っておたから」あそこにいた子とはウル的事。

「と、父さんは？」

「俺はもう少しこいつと遊んで帰る…って言ってもお前達が安全な所に行くまでの時間を稼ぐだけだな」

そう言っているとき閃光玉の効果が切れたらしくラージャンが視界を取り戻している。その証拠にグラウトの事を睨んでいる。

「ほら、親の言うことぐらいちゃんと利け」

「うん。でも絶対に帰って来てね」

「俺を誰だと思ってる！…お前の父親だぞ！」その言葉に、スカイは少し嬉しくなった。

スカイはラッツを負ぶり直して再び洞窟の入口に向かった。

スカイが走り出すのを見てラージャンに視線を戻す。

「さあ、今度は俺と付き合ってもらおうかつ！！」と言ってグラウトとラージャンの戦いが始まった。

スカイがラッツを負ぶって走り続けて10分程が立った。そしてやっと洞窟を出た。

「はあ、はあ、もう少しだぞ！！」ラッツの左腕は絶対に向かない方向を向いていて、かなりの量の血も出ている。

「死ぬんじゃないぞ！！」スカイはそう言いながらBCまで全速力で走った。

BCにはウルがいた。ウルの際には救護アイルーが2匹いてその後ろには人1人がギリギリ乗れる程度しかない担架があった。

「スカイ君！！」ウルが駆け寄ってくる。かなり心配している様子だ。

「アイルー！はあ、はあ、ラッツを頼んだ」頂上からずっと走りつ

ばなしだった為、呼吸は荒くヘルムを脱ぐと汗だくだった。

「スカイ君、大丈夫？」アイルーにラッツを任せたスカイは地べたに座っている。スカイと目線の高さを合わせるようにウルもしゃがむ。

「あ、ああ。大丈夫だよ。ありがとう」

そう言うとスカイは支給品用アイテムボックスの中にある【ネコタケチケット】を納品する。

「一応これでクエストクリアになった」

「う、うん…ラッツ君、大丈夫だよね…」ウル表情を見るとかなり悲しそうで、今にも泣きそうな程だ。

「…ラッツなら大丈夫だ」

今のスカイにはそうとしか言う事が出来なかった。

20秒程した時、竜車の準備が出来た事を知らせる角笛の音が聞こえてきた。

第15話 緊急事態！救つ勇氣は奇跡を起こす（後書き）

グラウト、カツコイイですなあ！！

自分の中で超が付くほど好きなキャラになってしまいました（苦笑
皆さんはどのキャラが好きですか？

因みに今後まだまだ新キャラは登場しますよぉ！！

ラッツ編はまだまだ続く結果になりそうです。すみません（汗
少なくともあと3話はすると思うのでどうか温かい目で見せ頂けると幸いです。

それではサヨナラぁノシ

…皆さんに重大なお知らせがあります。

今後の事を色々と考えていたら、明らかに年齢設定が合わなくなっ
てしまいました（汗

と言う事でキャラクターの年齢設定をいじりました！

スカイ・アレルドバーク 18歳

リリー・サシユラット 15歳

スパン・キャトット 17歳

と言う事になりました！！

勝手ながらすいませんとしか言えません…

第16話 ラッツの告白

スカイとウルがポケ村に帰って来て3週間、その間にこんな事があった。

スカイとウルが村に帰って、そのあとすぐにグラウトも帰って来た。その手には【金獅子の剛角】が握られていた。

「と、父さん！」

「ん？どうしたんだ？」よく見るとグラウトの防具には目立った傷が1つもなかった。あの金獅子を、それも角を1本持って帰ってくるなんて…改めてグラウトの実力を思い知った。

「どうしたんだ、じゃないだろ！心配させやがって…相手はあの金獅子なのに」スカイは拳をグツと固める。瞳には軽く涙を浮かべている。

「だから必要最低限、お前達が安全な所に行くまでしか戦ってないだろ？それと、これはスカイにご褒美だ」と言ってグラウトは握っていた剛角をスカイに投げる。剛角は放物線を描いてスカイの手元に行く。スカイはそれを慌ててそれを落とさないように慎重にキャッチする。

「ご褒美？」

「ああ、お前はラッツ君をあのお金獅子から助け出したんだ。そのご褒美だ」

それを聞いてスカイは俯き、拳をグツと固める。

「ス、スカイ？どうした？」

「俺は…俺は何も護れてなんかいない」

「何言ってるんだ、スカイはラッツ君を助けたじゃないか」

「その助けたラッツは大怪我を負ってる。それに俺は…逃げようとしてたんだ」

「何で？」

「…怖かったんだ…金獅子が…死ぬのが怖かったんだ」

「ん…お前とはまた今度ちゃんと話さないといけないようだな。

2人とも疲れてるだろ？今日はもう家に帰ると良い。スカイ、ウルちゃんを家まで届けてあげろよ」

「あ、うん…ウルもいいか？」

「う、うん…」

そして2人は集会場を出た。その時の集会場の中はまるで、2人を気遣ったかのように誰もいなかった。

ウルの家は集会場から歩いて10分程の所に位置している。スカイの家は歩いて3分程度の場所。ウルは少し申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「ごめんね」

「あ、気にすんなって！それにしてもこうやって2人きりで話すのは久しぶりだよな」

スカイはそう言って空を見上げる。いつの間にか日は沈み、空一面に星が煌めいていた。雲は1つもなく、こんな美しい夜空をスカイは見た事がなかった。

スカイにつられてウルも空を見上げている。

「…綺麗だねえ」

いつの間にかスカイの質問はどこかに消えていた。2人はその美しい夜空に夢中になっていた。

突然スカイがあることを決心した。

「ウル、俺は強くなる。どんなモンスターにも負けない、ウルを、皆を護れるような強いハンターにッ！！」

「…うんッ」最初ウルはポカーンとしていたが、すぐにその表情は満面の笑みに変わった。

それからウルはいつものほしくないような行動を取るようになった。急にスカイの腕を抱きしめたり、スカイに抱きついたり等、ま

るでカッブルのようだ。

因みに、ウルはカッブル気分を満喫しているかもしれないがスカイは一切そんな事は思っていない。

そして無事一（？）ウルを家に送り届けるとスカイは「じゃあな」と言っただけで家に帰ろうとするのと去り際にウルが「今日はありがとね！おやすみッ」と微笑みながら言った。その笑顔はとても可愛らしく、スカイの頬がポツと赤くなった。だがその頬はこの時間なだけあって何にも照らされないためウルには見えない。

ウルは肘からしたただけで手を振っていた。スカイも手だけで手を振った。

ラッツが運ばれたのはポツケ村に唯一一つだけある【ポツケ中央病院】。あまり大きいとは言えないがまあまあな病院だ。その病院の58号室にラッツは運ばれた。スカイをウルは毎日お見舞いに行っていた。目を覚ましたのは入院して3日後、そして今に至っている。

「ラッツ、今日の調子はどうだ？」

お目出度い事に今日はラッツの退院日。ラッツも心待ちにしていた日だ。

「うん、悪くない」

「本当にい？退院日だからって嘘ついたらダメだよ？」若干起こり気味にも見えるが冗談である事をラッツもスカイも分かっている。

「嘘なんてついてねえよ」

そんな話をしてしているとドアのノック音が聞こえた。

ラッツが「どうぞ」と言うと「失礼します」そう言って入って来たのはグラウトだった。

「父さん！？」当然のことながら驚くスカイ。ウルとラッツは「こんにちは」と軽くお辞儀をする。それに対してグラウトも「こんにちは」と微笑みながらお辞儀する。

「と、父さん。どうしたの？」

「いやちよつとね、ラッツ君に渡す物があつてね」確かにグラウトは片手に大きめの紙袋を持っている。

「僕に…ですか？」

「うん、こんな物を渡すのも気に障るかも知れないけど、一応ね」そう言つてグラウトは紙袋の中から短剣と円盤状の何かを取り出した。ラッツには、いや、その場にいたウルもスカイもそれが何かは分かつた。

「それは！！」スカイが驚いて、それを声にした。

「そう、金獅子戦でラッツ君が使つていた武器さ。刃は欠けて、盾はベコベコになつてて使い物にならないかもしれないけど…」

「いえいえ、ありがとうございます」

「それと…」そう言つてグラウトはまた紙袋の中から何かを取りだそうとしている。中から取り出したのはまたもや短剣と円盤状の、恐らく盾であるう物だった。

「これは？」

「これは【オデッセイ】つて言う片手剣だ。僕からの心遣いと退院祝いだよ。素直に受け取ってもらえると嬉しいな」

「いや、しかしですね…ハンターの掟としてレア度3以上のアイテム・武器は受け渡しできないはずじゃ…」

するとグラウトはニコツと笑つて、

「今回の件はギルド情報部のミスもあるからね、大目に見てあげたのさ」

3人はその言葉の意味が分からなかつた。

「あげた？」スカイがそう訊くと、

「ああ、本来ならラッツ君には『独龍剣【藍鬼】』つて言うラオシャンロンの武器をあげる予定だったんだ。流石に止められちゃったけどね」グラウトは後頭部をポリポリと掻きながらそう言つた。

「それつてG級武器じゃないですか！？」片手剣使いなだけに片手剣の事は皆より知っているラッツだけがその武器の事を知っていた。「よく知つてるね、でもごめんね。流石に駆け出しハンターのラツ

ツ君にG級武器を持たせる訳にはいかないって」

「いや、全然！むしろ属性がないオデッセイの方がどのモンスターにも使えるのでむしろこっちの方が良かったです！ありがとうございます」

「気にしないで、そしてそれからスカイをよろしくね。もちろんウルちゃんも」

「はい」「は、はい」

「じゃあ僕はこれで。依頼があるから。スカイ、リルアを任せただぞ！」

「へいへい」

そう言つてグラウトは病室を出て行った。

「フレンドリーで優しいお父さんだね」ウルが羨ましそうに頼杖をついてスカイを見る。

「そ、そうか？」スカイは呆れ気味に返す。

「でも、貰つていいのだろうか？」ラッツが苦笑いしている。まあ、そう思うのも無理はないのだが。オデッセイは片手剣の中でもかなり使いやすい片手剣。そんなものを受け取るのは若干罪悪感。

「あ、いいのいいの。あの人も貰つてほしいって言つてただろ？」

「あの人って」その言葉にウルが苦笑いになる。

その場に突如、ドアのノック音が再び聞こえた。

「ど、どうぞ」

「失礼します」入つて来たのは看護婦だった。それは退院の準備のために入つて来た看護婦さんだった。

そして、ラッツは無事、退院する事が出来た。未だに腕は使えないが…

そして各々の家に帰る道中、ラッツが決意を叫んだ。

「俺はあ！いつか絶対に皆を護れるような立派なハンターになつてみせるッ！！」

「それ…俺がもうウルに言つた事あるぞ？」

「え!？」ラッツは驚愕した。ウルの方を見ると頬を掻き苦笑いを浮かべていた。

「…いやしかし、ここからはオリジナルのはずだ」と言っただけは身体全体をウルに向ける。スカイもウルも首を傾げている。そこでラッツはとんでもない事を口にした。

「ウルツ! 俺と付き合っただけじゃないツ!」スカイの目が大きく見開かれる。ウルも大きく目を見開いてポカーンと開いてしまった口を両手で隠している。頬は真っ赤に染まっていた。

ポケットに冷たい風が吹く。その風は3人の髪を靡なびかせる。ウルのクリーム色のポニーテールは勿論、ラッツのオレンジ色の肩甲骨のあたりまである後ろ髪も、僅かではあるがスカイの水色の髪も。だがその髪が口に入ろうが眼に掛ろうがウルは微動だにしない。

ラッツは怪我をしていない右手をウルの前に突き出す。ラッツは何も話さない。だがウルは悟った。この手を握ることで『愛』を意味するのだと。

ウルは戸惑っていた。スカイと2人きりで家に帰る道中の事が蘇る。スカイの言葉が蘇る。

「ウルの話が好きだ。心の底から…心の底から護りたいと思ってる」

「えッ!？」

その言葉はスカイに言われものと全然違うように感じた。

自然とウルの頬が赤くなる。スカイはそれを見ると、一瞬頬笑み何処かに去って行った。

だが2人はスカイが去って行った事すら気付いていない。それほど真剣な話をしているのだ。

「あ、えつとお、そのお…」

その表情は戸惑いそのもの。ラッツはその表情を見ると差し出していた手を戻し、ウルの目の前に立った。

2人の身長差は約7センチ。ウルはほんの少しだけ顔を上に向ける。

「ら、ラッツ…私　　」ウルはそんな言葉の続きを発することが出来なかった。

ウルは強い力でラッツに抱き寄せられた。ウル顔の横にはラッツの顔があった。

ウルは言葉を失う。何がどうなっているのかが全く理解できない。まさに混乱状態。

だが、その混乱状態だったウルを正常に戻したのはラッツだった。

「　　ってみせる」

「え？」ウルは最初の言葉が聞こえなかった。だが、再びその言葉が繰り返された。

「護つてみせる。ウルのことを俺が護つて見せる。だから、俺の傍にいてほしい」

その言葉にウルは何故かとても安心した。その言葉になら、ラッツになら自分の全てを預けれる、そう思えた。

「…うん」2人はより強く抱きしめ合った。

半年後、3人は集会場を訪れていた。3人は凄まじい勢いでHRハンターラングを上げていった。

スカイ HR5、ウル HR5、ラッツ HR6。

「スカイ、今日は何に行くの？」彼女はウル。防具はレイヤS。武器はサクラノリコーダー改。

「んじゃあ、フルフルでも行こうかな？」彼はスカイ。防具 ギザミス。武器 インペリアルソード。

「フルフルは前々回行っただろ…」たく「彼はラッツ。防具 ナルガS。武器 オデッセイブレイド。

そんな3人は今、ハンター情報誌の『狩りに生きる』で特集続きになっっているパーティーだ。

そんな3人の狩りが今日も始まるうとしていた。

第16話 ラッツの告白（後書き）

如何だったでしょうか？

え、前回でも言ったのですが重大発表があります。

今後の事を考えていたら明らかに年齢設定が合わないのです（汗
と言う事で年齢設定を変更しました。すみません…

こちらです

スカイ 18歳

リリー 15歳

スバン 17歳

第17話 再会の涙

「クソツ！なんてタフなやつだ」

「ほんとだね、そろそろ倒れても良い頃なのに…」

「もう少しははずだ！皆頑張れ！」

ここはラムイト砂漠。今ここでスカイ達4人对一角竜モノブ口スの死闘が繰り広げられていた。

そう4人。

事の発端は3日前の朝。スカイ、ウル、ラッツがいつものように集会場を訪れた時の事。

3人がハンター情報誌『狩りに生きる』に特集されてからと言うものの、ポツケ村は観光客やハンターの訪れる量が以前と比べてかるかに増えていた。だから最近3人は毎日のように集会場を訪れている。そして今日もまた、集会場を訪れたと言うわけだ。

しかし、増えたのは観光客やハンターだけではなかった。そう、3人が有名になったことでポツケ村の集会場に届けられる依頼書もはるかに増えていた。だから最近3人は毎日のように集会場を訪れている。そして今日もまた、集会場を訪れたと言うわけだ。

3人が集会場の中に入ると、そこにはもう10組以上のハンターが依頼を決めたり朝食をとったりしていた。

3人は依頼書がたくさん掲示されているクエストボードに向かった。クエストボードにはもう既に何人かのハンターが屯していた。おそらく、何の依頼にするかを決めているのだろう。

3人もその屯している中に入り、クエストボードに掲示されている依頼書から依頼を決める。

「今日は何に行く？あ、この『雪獅子討伐要請』なんてどう？」

「ドドブランゴかあ、それは前に行った気が　あ、良い依頼書見つけ」

そう言っつて、スカイはその依頼書に手を伸ばす。

そしてスカイがその依頼書を掴むと同時に、スカイとは別の手がその依頼書を掴む。

スカイはその伸びている方を見る。そこには肩甲骨の辺りまである桜色のツインテールの少女ハンターがいた。

防具は上位のリオレウスの素材を使った『レウスS』一式で、背にはLBが。そのLBも上位のリオレウスの素材を使ったであろうボウガンだが名前までは分からない。

その少女ハンターと目が合う。するとその少女ハンターは口をポカーンと開けて何かを思い出したかのように「あ…」と言ってスカイを指さす。指を差されたスカイは「えつとお…へ？」と動揺を隠せず、そもそも自分の事かを確かめるために自分の方を指さす。だが少女は何も答えない。

「す、スカイ…？」突然名前を呼ばれたスカイだったが、スカイはその声に聞き覚えがあるようだ。声だけではない。その少女から香る匂い、その匂いにも覚えがあった。

昔、スカイがまだハンター訓練養成学校に行く前に

「ぶ、ブルーナ…なのか？」

その瞬間、スカイの目の前から少女が消えた。それと同時に何かに抱きしめられた。

「会いたかったよ…会いたかったよスカイ…」今にも泣きそうなその声は、スカイの真横から聞こえた。

スカイは、何故か動きずらい首を横に向けた。そして、そこに広がる光景はスカイを赤面にさせた。スカイだけではなくウルや、それを見ていたGMも大きく開いた口を両手で押さえ、頬を赤らめさせる。

スカイの横にはブルーナの顔が、スカイはブルーナに抱きしめられていた。そしてそのブルーナの顔は今にも泣きそうな自分を必死に堪えていて、少し怒っているようにも見えた。

さっきまで赤面だったスカイはブルーナの表情を見て、

「…はあ、我慢しないでいい、泣いてるのを見られたくないなら

「そう言うのと今まで掴んでいた依頼書を離してその手をブルーナの後頭部に添え自分の胸に軽く当てる。だがスカイは防具を纏っているのでブルーナのおでこ辺りを胸に当てた時にブルーナは少し痛いかもしれない。しかし、こうするとブルーナの顔はスカイに隠れて誰にも見えない。」

「こうすれば見えないから、だから泣いてもいいんだぞ？」ブルーナは何も答えなかった。けれどブルーナの身体は小刻みに震えている。それにスカイの足元にポツポツと雫のようなものが落ちる。きつと我慢が出来なかったのだろう。スカイやウル、ラッツやそれを見ていたGMはその雫が何なのかは既に分かっていた。スカイは空いていた右手でブルーナの頭を何度も撫でた。

数分後、ブルーナから「もう…大丈夫…」と言う声が聞こえたのでスカイは手を離れた。ブルーナはスカイから1歩離れる。するとスカイがある事に気付く。

「ハハハ、何だそのおでこは」その一言でウルとラッツはブルーナのおでこを覗く。ラッツは「フツ」と笑い、ウルは「あははははッ」と大爆笑。ウルはポーチから手鏡を出してブルーナに渡す。

ブルーナのおでこはスカイの胸の防具が当たっていた部分だけ赤くなっている。

「ああッ！むううう」と言って手鏡を持ったまま両手でおでこを隠し、赤らんでいる頬をプクーと膨らませてスカイを上目遣いで睨む。その行動が可愛らしく、スカイの頬もポツと赤くなる。

「何赤くなってるんだ？」上目遣いのブルーナに言われ、返す言葉がない。

話を変えようと思いをフル回転させる。そしてある事を思い出した。「あ、そうそう。この2人は今俺がパーティーを組んでるウルとラッツだ」とブルーナに2人を紹介する。

「こんにちは、ウル・ジェニファーです。よろしく」

「ラッツ・シュバニクルだ、よろしく」2人はブルーナに向かって一礼する。

「ブルーナストラウトだ、こちらこそよろしく。そしてスカイが世話になってるようだ。今後ともスカイをよろしく」と言ってブルーナも2人に向かつて一礼。

そこで今度はラッツが何かを思い出す。

「あ、そう言えばこの依頼、どうする？」そう言ってクエストボードから依頼書を取る。

「ああ、モノブロスの…私はいい、適当に選んだやつだからな」断るブルーナ。だがスカイからの思わぬ一言でブルーナはキョトンとする。

「なんだよ、『どうする』とか『断る』とか、一緒に行こうぜ？」

「…な、何を言ってるんだ。お前にはパーティーがあるだろ？それに」

「でも、パーティーは最大で4人だ。俺たちのパーティーは今3人お前を入れてピッタリ4人だ」

「し、しかし…」

「スカイがこう言うともう無理だよ？一緒に行こうよ。ね？」

「そうだ、ちょうど遠距離武器のハンターが居なくて困ってたところだしな」

「ほら、ラッツもウルも言ってるんだ！行こうぜ？」

3人に誘われて若干困り気味のブルーナ。

「わ、私は1年ぶりにここに帰って来て、今思えば村長に言わなければならぬ事もある。また今度に」

「そんなの後にして行こうぜ？」

強く誘われるブルーナはこれ以上言っても無駄だと悟った。

「…はあ、女を泣かせて仕舞には無理矢理依頼に誘って…ハンター訓練養成学校はそういう面の教育はしないようだ。戻ってきたら私に付き合ってもらおうからな？」

「ああ、分かったよッ」

そして4人はその依頼書をGMの所に持って行き、手続きをする。

「参加人数は4人でよろしいですか？」

「はい」

G Mは参加人数の欄に4の数字を書く。

「それでは手続きが済みましたので、どうか御無事で」

それを聞くと4人はラッツを先頭に出発口に向かった。が、スカイはG Mに止められた。だが3人は気付かない。

「ちょッ。な、何ですか!？」

「スカイ君、あまり女の子を泣かせたらいけませんよ?そんなことしたら男として…『最低^{クズ}』ですよ?」満面の笑みで言われ、冷や汗が止まらない。

「わわわわかりました…以後、気を付けます」スカイは出発口へ向かった。肘と膝は伸びつきりでロボットのようにかクカクした動きだった。

ブルーナ・ストラウト

防具 レウス一式。

武器 LB 火竜弩

年齢 16歳

髪型 ツインテール

髪色 桜色

第17話 再会の涙（後書き）

え、如何だったでしょうか？

ここでようやくブルーナ登場です！

遅い登場でしたね（汗）

過去編から現在の話の戻る時どうすればいいか困っています（泣）

過去編は恐らくあと2〜3話で終わります

長くなってしまいました…

ブルーナはキャラ的ポジション？キャラ設定は『シンデレ』で行こ

うと思ってます（笑）

今まで見て下さった方、本当にありがとうございます！

そして今後ともお付き合い、お願いしますm（）（）m

第18話 溢れだす感情と涙

ポツケ村を出発して3日。それは見えてきた。

「ん？おお、見えて来たぞお」

それを聞いた狩人等はその指さす方を見る。

それはラムイト砂漠。今回のクエストの目的地だ。

スカイ達の今回のクエストは『一角竜モノブロス』の討伐。今回は3日前に再会したブルーナと共に4人での狩猟だ。スカイは出発してからウキウキなのが周りから見ても丸わかりだ。

「そう言えばブルーナ、弾やアイテムは持って来たのか？不足しているアイテムがあるなら言ってくれ」

ラージャンの件以来、何処となく紳士的になったような気がするラッツ。ウルと言う彼女が居ても女性には優しいラッツ。ただ、ラッツの表情を見ると、決してブルーナを口説いているわけではないというのが分かる。これはブルーナに対する親切なのだ。

「いや、大丈夫だ。常にアイテムは所持しているからな。その気持ちには受け取っておくよ、ありがとう」

「そうか」後ろにいたブルーナが準備万端なのを確認し、視線を前に戻す。すると、自然と視野に入ってきたのがラッツの彼女、ウルだ。ウルは不機嫌な表情でラッツを見ている。頬をプウツと膨らませ眼を細くしてラッツを睨む。ラッツは何故自分が睨まれているのかが分からない鈍感野郎なのだ。今のスカイの鈍感さはラッツから移ったと言っても過言ではない。

「何でそんなに不機嫌そうな顔してんだ？可愛い顔が台無しだぞ」
「なッ！？…ラッツのバカ…」

「？」ラッツは鈍感なだけあってこう言う言葉をバンバン言っているらしい。ウルはその度に顔を赤に染めている。今も赤面状態なのは言うまでもない。

ラッツの発言はその場にいた全員が聞いていた。それを聞いてスカ

イはプツと軽く笑い、
「このバカツプルか」と口ずさんだ。ブルーナもスカイ同様に微笑
んでいた。

「今から狩りだと言うのにイチヤイチャして」と言っ
てブルーナだ
つたが2人の事を凄く羨ましがっていた。

（自分もいずればあの2人のように、人生を共に歩む相手が…）
そんな事を思ったブルーナは首を左右に何度も振り、ラツツとウル
から視線をずらす。

（まさかな、私の事を愛してくれる者など…）
ずらした視線の先にはスカイがいた。スカイはラムイト砂漠の方を
向いていて、ブルーナが自分の事を見ているなんて知らない。

ブルーナはスカイに見とれてしまった。
（集会場で再会した時は感極まって涙を流してしまっ
たが、スカイ
の事も恋愛対象としては…）

そこで初めてブルーナは自分が何を想像していたのかが分かった。
さっきのウル見たいにブルーナの顔は一気に真っ赤になった。だが、
ブルーナは列の最後尾だった為、その顔を見られる事は避けられた。
ブルーナがそんな事を思っているといつの間にか目的地に着いてい
た。4人は竜車から降りる。

「やっと着いたあ、ラムイ」
「さっそくだが、まずは肝心のモンスター、モノブロスを見つけない
ければ話にならない。二手に分かれて探そう。ラツツとウル、私と
スカイで探す。見つけ次第ペイントボールを投げてくれ、臭気で居
場所が分かるようになる」

「わかった」「了解」
モノブロス
そうして4人は二手に分かれて一角竜を探し始めた。
何故だかスカイは少しシヨンポリして見えた。

スカイとブルーナが最初に訪れたエリアはマップで言う『エリア6』
だった。そこは何もないただ砂が一面と広がっているエリアだった。

「ここには居ないみたいだな」

「そうだな、次はエリア5と7どちらに行く？」

「…7に行ってみるか」

「そうだな、それじゃ　ん？」

「これはペイントの臭気ッ！！こんなに早く…エリア2あたりじゃないか？」

「ここからなら一度BCベースキャンプに戻った方が早い、行くぞ！」

スカイとブルーナはBCに向かつて走り出した。

ここはエリア2。ラッツとウルは早速一角竜、モノブロスと出くわしていた。

「千里眼の音色があるなら何で最初から言わなかったんだ？」狩猟笛は文字通り武器自体が楽器の構造になっていてその武器から出る音色を組み合わせることで特有の効果を発動させる事が出来る、サポート武器。しかし、その武器の攻撃力はハンマーにも劣らない。

「わ、忘れてたの…そ、そんなのいいからラッツは早く戦って！私も演奏し終わったら戦うから」

「わかった…ッ！」

そう言つてラッツはモノブロスの方に走って行った。ウルも演奏を開始する。

腰に携えたオデッセイブレイドを抜き盾を構え戦闘態勢に入る。モノブロスがラッツに気付き、咆哮のモーションに入る。

「咆哮つつうのはなあ…」

その時、モノブロスの咆哮が辺り一面に響き渡る。

本来ならラッツの立ち位置なら轟音のあまり耳を塞ぎ、その場に立ち尽くしてしまうのが普通なのだが、ラッツは咆哮がした瞬間に前に転がる。この動きは回避に似ている。いや、回避そのもの。

「こうすれば当たらない…ッ！」

そう、ラッツは咆哮を回避したのだ。ラッツが装備しているの防具

のナルガSは装飾品を付けていて回避距離UP・回避性能+1・体術+2と回避に特化した防具なのだ。

ラッツは咆哮を回避してそのままモノブロスの脚に斬りかかる。

「おらッ！」その後も数回斬りつける。がモノブロスも黙ってはいない。体を回し遠心力を使って尻尾でラッツ吹き飛ばそうとする。

しかし、ラッツは華麗な回避で尻尾をバック宙で躲かわす。そしてまた脚に斬りかかる。

斬る度に脚からは血が噴き出す。しかし堅殻が厚く出る血の量はほんの僅か。そのため、狩猟するにはかなりの量の攻撃が必要。

ラッツは攻撃を止めない。ラッツは2回斬りこんだ後はジャンプ斬りで1度の攻撃を終える。それを何度も繰り返した。

そして今、2回目の攻撃を斬り込む。最後にジャンプ斬りで締めようとした。

ラッツがジャンプした瞬間、モノブロスが3、4歩下がる。

「なにッ!？」

後退したモノブロスはラッツに鋭く尖った角を向かって突進する。

ラッツはジャンプ斬りの後で回避する余裕はなかった。

「く、クソッ」

一見もう助からないかと思っただが盾のガードで死は免れた。が、吹き飛ばされてしまった。着地も上手くいかない。砂の地面に叩きつけられても尚、ゴロゴロと転がる。

ラッツの体中に激痛が走る。

手を使って体を起こそうとするが、激痛が走る体を手だけで起こせるわけがなく途中で再び体が砂の地面に埋まる。

そんなラッツに対し、モノブロスは容赦しなかった。ラッツのすぐそこまで来ると、遠心力を使って尻尾を力いっぱいラッツに叩きつけようとする。

「俺も…ここまで…か…」

「はあああッ!…」

尻尾の攻撃を阻止したのはウルだった。ラッツに向かってくる尻尾

に対してウルはサクラノリコーダー改を尻尾めがけて振った。

ウルのサクラノリコーダー改は弾かれ宙を舞い、砂の地面に刺さる。だが、モノブロスの尻尾も軌道がずれる。

その間にウルはラッツを救助する。

「…すまない…」

「いいから、無理しちゃダメだよ？」

「ああ…これで俺は…2回…命を落としたな…」

「何言ってるんの、ラッツは死んでないし死なせないんだから…」

ウルは今にも泣きそうだ。だがそれを必死に堪えている。

ウルはラッツを背負ってBCへ向かう。

しかし、ここは狩り場。そう簡単にはいかないのが現実。

ウルが後ろを向くとモノブロスが突進のモーションに入っている。

(回避すれば避けれるけどラッツが…)

突然、後ろから弱弱しい声が聞こえた。

「ウル…俺を置いて行け…」

その声はラッツの声だった。ラッツの顔を見ると、ラッツは微笑んでいた。

「俺が…護るって…言ったのにな…すまない…俺の事はいいから…行ってくれ」

ついに我慢できなくなり、ウルは泣きだしてしまった。

「何バカな事言ってるんのッ!!そんな事出来るわけ」

「じゃあ2人共死んでもいいのかよ…ッ!!」

その声は残っている力いっぱい声だった。

「…その方が…良いよ…」

「なに!?!」

ウルは走るのを止めた。ウルの瞳からは、ボロボロと涙が頬を伝う。

その涙は砂でできた地面にポツポツと滴る。

モノブロスは刻一刻と近づいてきている。

「見捨てるくらいなら…2人共死んだ方が」

ウルは最後までその言葉を言う事が出来なかった。ある声はその言

葉を掻き消したからだ。

「その言葉はあ」

ウルが後ろを振り向くと、1人のハンターが低い姿勢で背中に携えている太刀の柄を握っている。

ウルはそのハンターが何をしたいのかが分からなかった。後ろからはモノブロスが迫っている。

ウルは目を背ける。が、

「まだ早えぞおツ!!」そのハンターの横をモノブロスが素通りする。だが、モノブロスの脚がそのハンターの横に来た瞬間、ハンターは体を回転させながら抜刀しモノブロスの脚に抜刀斬りを炸裂させた。モノブロスはラッツに蓄積されていたダメージと今の攻撃のダメージで、突進の勢いが死なないまま体が砂の地面に付き、地面を抉りながら勢いを失くす。

そこにいたのはスカイだった。

「す、スカイ…」

「ウル、よく頑張ったな」とウルに頬笑み、ウルの頭を撫でる。

「ラッツ、GMギルドマネージャーが言ってたぞ、女の子を泣かせるのはクズだったな」

「そ、そうだな…」ラッツは御尤もな様子。

「さあ、2人はBCに戻ってな。ウルはラッツを見てやっててくれ」

「え?でも」

「いいから、な?さあ行つて来い!」

それを聞いてウルは頷き、ラッツを背負ってBCへ向かった。

その時、先ほどまで倒れていたモノブロスが立ち直りスカイを睨む。

そこにちょうどブルーナが到着した。

「スカイ、何でBCを通らずに来たんだ、BCを通過して来ていればもう少し早く着いていたのに…」

「へへへ、何って言うか、気まぐれさ」

「たく、お前ってやつは…」ブルーナはスカイの答えに呆れている。ブルーナには気まぐれと言ったが実際は…

(もし、BCを通過して来ていたら恐らく間に合わなかった。危ない

危ない……)

そう、極僅かだが、ペイントの臭気はエリア2と3の間からだった事にスカイは気付いたのだ。だからスカイはBCを通らないルートから向かった。もし、BCを通るルートから向かっていたら恐らくラッツとウルを目の前で亡くしていただろう……

「さぁブルーナ、俺の実力を見せてやるよッ!!」

「それは私も同じだッ!!」

スカイとブルーナが戦闘態勢に入ると同時に、2人を威嚇する一角竜の咆哮がラムイト砂漠に響き渡った。

第18話 溢れだす感情と涙（後書き）

如何だったでしょうか？

今思ったのですが、これはモンハンの小説なのに戦闘シーンが全然ない！！

本当にすみません（汗

これからはもう少し狩猟の方も増やしていきますんで温かい目で見
てやって下さい

今後とも「モンスターハンター【覇気と力を持つ者達】」をよろしく
お願いします

第19話 戦闘開始 一角竜VSスカイ&ブルーナ

「ブルーナ、援護頼んだぞ」

「任せておけッ！」

スカイ・ブルーナ対一角竜モノブロスの戦闘で、最初に仕掛けたのはブルーナだった。

ブルーナは折りたたんで背負っていたLBライトボウガンの【火竜弩】を組み立て、火炎弾を装填した。

火炎弾とは、文字通り強力な火属性を持った弾のこと。

その火炎弾を装填した火竜弩の銃口を一角竜に向け、引き金を引く。その銃口からは5発の火炎弾が射出された。一角竜に向かって走っていたスカイはそれを見て驚いた。

「あのLB、火炎弾が速射になっているのか…」

速射とはLB特有のスキルのこと。決められた弾なら一度に3〜5発連射させる事が出来る。しかし、使用弾数は一発。つまり一つの球で3〜5発撃つ事が出来るのだ。だがこのスキルを持っているLBが種類が少なく、その上、連射を途中で止める事が出来ないため隙も大きいというデメリットもある。

ブルーナのLBは火炎弾の速射が5発。速射の中の最大連射数。そのため隙も一番大きい。

その事をスカイは考えていた。

「…こりゃサポートするのは俺の役目かもしれないな…」苦笑いを浮かべるスカイ。

その時、ブルーナの速射射出された弾の一発目が一角竜の角に命中する。それに続いて2発目、3発目と当たっていく。そして5発目が当たった時にスカイはやっと一角竜モノブロスの足元に辿りついた。

そして背中中の鞘に納めていた太刀の柄を握り、抜刀する。

「…つらよッ！！」片手剣とは違い、一撃で堅殻を裂く。その

裂け目からは致命傷とまではいかないが大量の血が噴き出す。

スカイの抜刀斬りを喰らったモノブ羅斯は身体を回転させる。遠心力を持った尻尾はモノブ羅斯の周りにあるもの無差別に吹き飛ばす。それを見たスカイはモノブ羅斯と距離を取るため、斬り下がりと言う技を使った。

斬り下がりとは後方に下がりながら斬るといふ技で、モンスターが攻撃のモーションに入った時や距離を置きたい時などによく使われる。スカイは一旦モノブ羅斯と距離をとり、息を整える。

モノブ羅斯が身体を回しても尚、ブルーナは射撃を止める気配はない。むしろ今、火炎弾を使った方が効率が良い。身体を回転させている今、スカイは攻撃できない。しかしブルーナは遠距離武器、しかも今は回転しているのでブルーナに攻撃を仕掛ける事はない。ブルーナは攻撃し放題と言うわけだ。

（モノブ羅斯は回転の動作が多い。遠距離武器を使うハンターとしては殺りやすい相手だ。隙が大きい速射もお構いなしに撃てるからなッ！）

ブルーナが6回目の速射を撃ち終わると、モノブ羅斯は回転の動作を止めブルーナを睨みつける。

回転の動作が終わり、スカイはモノブ羅斯の足に太刀を浴びせる。踏み込み斬り、突き、斬り上げ、縦斬り。これが太刀の連続攻撃の基本。

スカイがモノブ羅斯の脚に攻撃していると、モノブ羅斯は頭を低くしてその鋭い角をブルーナに向ける。これは突進のモーションだ。それを見ていた2人はすぐにそれに気付く事が出来た。

「ブルーナッ！！」

「分かっているッ！」スカイとブルーナは回避しやすいように武器を収めた。

スカイはモノブ羅斯の脚の付近から離れるだけでダメージを受ける事はなかった。それはスカイが攻撃対象ではなかったから。そう、今回の攻撃対象はブルーナ。突進を避ける事が出来なかったらあの

世行きだ。

その時、モノブ羅斯はブルーナに向かって走り出した。凄まじい勢いだ。だが、その勢いのあまり途中での方向転換が利かないのだ。なので、突進の攻撃は命中率が限りなく低く、よっぼどの事がない限りは当たらないのだ。

ブルーナはその突進を難なく回避した。そして、体勢を整えるとブルーナはすぐにLBを構え、装填してあった火炎弾をモノブ羅斯の尻尾に命中させた。その武器を組み立てて射撃に入るまでの速さと狙った所に命中させる正確さ、これは簡単なことではない。LB使用の凄腕ハンターも世界には大勢いるが、その凄腕ハンターにも劣らない速さと正確さ。スカイがハンター訓練養成学校に行っている間、ずっとLBを極めるための修業をしていたに違いないとスカイは感心し、尊敬した。

「こりゃ、負けていらねーなッ!!」

スカイはモノブ羅斯の脚に近づき、溜まっていた練気を解放する。

気刃斬り。太刀特有の技。通常攻撃を与えて溜まる練気を太刀に纏わせた状態での連続攻撃。その連続攻撃は斬り方や威力は全く別の物。太刀の必殺技とも言える強力な攻撃だ。気刃斬りを全てモノブ羅斯の脚に炸裂させた。モノブ羅斯の脚はさつきまでの攻撃と今の気刃斬りでダメージが蓄積され、身体を支えられなくなり、モノブ羅斯は砂の地面に倒れ込む。

この時、モンスターは攻撃する事が出来ず、もがくことしかできない。

「今だッ、一気に畳み掛けるぞッ!」

「もちろん、そのつもりだッ!!」

そのもがいているモンスターにスカイとブルーナは容赦なく攻撃を浴びせた。

だが、ずっと倒れこんでいる訳ではない。倒れている時間は僅か。モノブ羅斯はすぐに立ち上がると。2人の方を見る。激怒したのか、モノブ羅斯は空に向かって咆哮した。

「しまった…ッ」

「遠距離武器なのに…距離を…詰め過ぎたか…ッ」

2人は耳を両手で塞ぐことしかできず、その場に棒立ち状態だ。

モノプロスの咆哮が終わっても2人は怯んだ状態のまま。そしてこの距離、10メートルもないだろう。

モノプロスが突進のモーションに入った。2人はまだ怯んでいる。

その怯みが止んだのはモノプロスが走り始めてからだった。

「お…わっ…た…」

ブルーナは諦めていた。だがしかし、

「ッ!?」ブルーナは後ろから強い光を感じた。

そして気付いた。今のは『閃光玉』。モノプロスが怯み状態になっている。あの状態になると、あの凄まじい突進でさえもストップさせ、怯んでいる時は突進をしてこない。これも遠距離武器なら攻撃し放題のチャンスなのだ。

「ブルーナ、テンパリ過ぎだぞ」

そう言われ諦めていた自分がバカのように感じてきた。

(なぜ、閃光玉なんていう簡単な回避方法が出てこなかったんだあ

…そしてなんで私はこんなにあつくなっているのだあッ!?)

頭を抱えて悩むブルーナを見てスカイは、

「何してんだ? 攻撃のチャンスだぞ」その言葉で我に返ったブルー

ナは地面にめり込んでいるLBを拾い上げ、銃口をモノプロスに向けて構える。

そして、火炎弾の速射をモノプロスに浴びせる。スカイも斬り上げや突きを組み合わせ、練気を溜める。

スカイは溜まった練気を解放した。

「うおおおおッ!!」気刃斬を炸裂させた。

第19話 戦闘開始 一角竜VSスカイ&ブルーナ(後書き)

本当にすみません…

実際はラッツ編をこんなに長くする予定ではなかったのですが…

こちらの予定もグダグダになってます(汗

恐らくあと・・・5話は続きちゃうかもしれない…

本当にすみません…

どうか温かい目で見てください

これからもよろしく願いますm()m

第20話 復活（前書き）

作者「さあ！やって参りました【覇気と力を持つ者達】」

スカイ「どうでもいいのだが」

作者「あ、スカイ。居たんだけ…」

スカイ「話させるッ！！…どうでもいいんだが、一体ラッツ編をど
んだけ引つ張るつもりなんだ。いい加減本編に戻らないと…」

リリー「そうだよ！僕退屈でならないよ…」

スバン「そうだ。いい加減本編に戻せ！私とリリーは出番不足で退
屈なんだぞ！」

作者「すいません…ですが！本編に戻るにはもう少し時間がかか
りそうです…」

スカイ「…まあ俺は常に登場してるから良いが…」

作者「まあ！雑談も終わったところでッ！」

全員「モンスターハンター【覇気と力を持つ者達】、スタートッ！
！」

第20話 復活

一体、どれほど時間が経ったのだろう。ブルーナは持って来ていた火炎弾を撃ち尽くして今は調査した火炎弾が底を突こうとしていた。スカイも最初と比べて動きが鈍くなっているのは一目瞭然だ。

モフブロス
一角竜から受けたダメージは大したことないが、気刃斬りの激しい動きのせいで体力の消耗も激しい。

「ハアハア、スカイ、大丈夫か？」

「ツハアハア、大丈夫だ。お前の方こそ、そんな重そうな物持って移動してるが大丈夫か？」

2人の体力にも限界が近づいてきている。

2人の体力を削っているのは一角竜の突進。モフブロスあのスピードの突進を避けるのは回避、時には緊急回避が必須。

さつきから回避しっぱなしの2人はいつ殺られてもおかしくない状況下にいるのだ。

「…まずは奴の角を破壊しよう。角が折れれば突進の回避は楽になる」

「しかし、スカイが角を狙うのはリスクが高い。私が徹甲榴弾で角へのダメージを蓄積していけば折れる。角は私に任せろ」

「わかった。…無理はするなよ」
「わかってる」

徹甲榴弾とは、射出されて物体に突き刺さると数秒後に爆発するという大ダメージを狙える弾だ。しかし、射出後の隙が大きく、ボウガン自体へのダメージもあるという事でギルド本部から、所持している弾数は9発と定められている。あまり使用をお勧めできない弾でもある。

ブルーナは装填していた火炎弾を取り出し、徹甲榴弾Lv1を装填する。

「来るぞッ！！」

数十メートル先にいるモノブロスが突進の態勢に入った。そして勢いよく地面を蹴ってこちらに角先をスカイ達に向けて走って来た。2人は左右に分かれ突進を回避し、スカイはモノブロスの向かって走った。

（こいつの態勢を崩す事が出来れば、頭を狙うブルーナが楽に頭を狙えるようになる。まずは脚を攻撃して、こいつを倒す）

スカイはモノブロスの脚に抜刀斬り、突き、斬り上げ、斬り下しを喰らわせた。

ブルーナも1発目の徹甲榴弾を見事頭に命中させ、数秒後爆発音がスカイの耳にも入った。

「…俺も負けてられねーなッ！！」

スカイは練気を解放した。

「うおおおッ！！」

そして、さつきまで攻撃していた脚に気刃斬を炸裂させた。

すると蓄積されていたダメージもあってか、モノブロスはバランスを崩しその場に倒れた。

「ブルーナッ！！」

「分かっているッ！」

ブルーナはモノブロスの角付近に徹甲榴弾を1発、2発と命中させていく。

その間スカイもモノブロスの尻尾を斬る。

4発目の徹甲榴弾が爆発したときにモノブロスは起き上がるうとした。

「これが最後だな」と言つて銃口をモノブロスの角に向ける。そして引き金を引こうとした時事件は起きた。

「うぐッ」

「ブルーナ　！？」

ブルーナは後ろから強い力で蹴り飛ばされた。ゴロゴロと転がったブルーナは起きる気配がない。

「ぶ、ブルーナッ！！」

よく見るとブルーナの身体は痙攣しているように見えた。そう、ブルーナを蹴り飛ばしたのはゲネポスだった。

ゲネポスとは脚の爪から麻痺性の毒が出ている、ランポスの派生種、鳥竜種の部類のモンスターだ。

ブルーナはゲネポスの毒を受け、麻痺していた。

その時、モノブロスがブルーナの方を見た。

（ブルーナが危ないッ!!）

ブルーナは麻痺していて逃げる事が出来ない。モノブロスが突進の態勢に入った。

（モノブロスがブルーナの方を向いていて閃光玉は効かない）

モノブロスが走り出した。

「ブルーナーッ!!」

スカイは全力で走った。しかし結果は変わらないのはスカイも分かっていた。

「おおお…りゃッ!!」

何処からか聞き覚えのある声が聞こえてきた。

突然、モノブロスの脚が止まった。そして、横に倒れた。

すると、さっきの声やモノブロスが倒れた理由が露になった。

そこにはブルーナに肩を貸すリリーがいた。

「ウルッ!何で」

「私だけじゃないよ、ほら」

そういうとウルは空いている手の親指で後ろを示した。

ウル達の後ろを見てみるとそこにいたのは

「ラッッッ!!」

「待たせたな…心配を掛けてすまないな…だが、もう大丈夫だ」

そこでようやくブルーナの麻痺が治った。

「ありがとう」

「気にしなくていいよ、仲間なんだから私たちは!」

肩を貸してくれたお礼をウルに言うと、ウルはブルーナに微笑んでそう言った。

「よし、行くぞおツ!!」

スカイの掛け声を合図に4人はモノブロスに向かって走り始めた。

第20話 復活（後書き）

作者「如何だったでしょう？今回のモンスターハン
ラッツ「やつと復活したか…」

作者「おいッ！まだ話の途中だったでしょうが！！」
ラッツ「…」

作者「な、なんだその目は…それにしてもラッツは昔とだいぶキヤ
ラ変わったよねえ。前は能天気って言うか何ていうか…今は言葉の
最後に『…』なんて付けておとなしい感じを出してるけど…」

ラッツ「お前がそうさせたんだろ…」

作者「…そうでしたね、すみません…」

ウル「さて次回は…」

作者「コラッ！それは俺の役目であって…」

ブルーナ「次回は『決着』だ。楽しみにしておけ！」

作者「あれブルーナ？そんなキャラだったっけ？」

ブルーナ「…／／／／」

作者「…まあいいや。ではッ！」

全員「次回をお楽しみにッ！！」

第21話 登場人物紹介1（前書き）

作者「今回はストーリーを進めずに登場人物紹介にする事にしました」

スカイ「おい、いいのか？こんなことしてて。リリーにばれたら

」

リリー「作者さん？何してんの？あ！ストーリーでも進める気になつた？」

作者「ああ、いやあ…そのお…」

スパン「作者あ…いい加減本編に戻せつて言つたよなあ？」

作者「えつと…その…あれ？リリー？その振りかざしてるものは何かな？僕には大剣に見えるんだけど　ぎゃああああッ！！」

ブルーナ「それではオープニングコールは私がしよう」

作者「……………」

ブルーナ「『スカイと私のラブラブ狩猟物語』スタートだ！！」

スカイ「ん？ブルーナ、なんか言つたか？スカイと私がどおのこおのつて聞こえたけど？」

ブルーナ「う、う、う、うるさあいッ！！」

スカイ「お、おい！？ば、ばか！散弾を撃つんじゃねえッ！！」

ブルーナ「スカイのバカ…／＼／＼」

第21話 登場人物紹介1

スカイ・アレルドバーク

年齢：18歳 途中で年齢変更がありました。すいません…

身長：172センチ ラッツ編での身長166センチ

武器：夜刀【月影】、???

防具：リオソウルZ スカイのリオソウルZヘルムは特殊仕様で
リオソウルUのようなバイザーが付いている

眼や髪：眼はルビーのような赤色。髪は空のような心落ち着かせる
水色。髪型はレウスレイヤー。

力：炎属性 火属性ではなく炎属性であって決して誤字では誤
字ではありません。

スカイはポケケ村出身の異名【天空の武者】を持つ凄腕ハンター。
しかし、リリーやスバンに会うまで自分が異名持ちだと気付かない
ほどの鈍感キャラ。リリーやスバンが好意を寄せているのにも気づ
いてはいないの言うまでもない。

スカイにはポケケ村のスクライの森の入口の傍にある【護りの樹】
に何か思い出があるようだ。

スカイの力は炎属性としか判明しておらず状態変化、性質攻撃は何
一つ分かっていなく、謎の多い主人公だ。

リリー・サシユラット

年齢：15歳

身長：152センチ

武器：王牙大剣【絶雷】

防具：ジンオウX エックス

眼や髪：眼は黄色で髪は金色。そこから【金色の稲妻】と言う異名が付いたらしい。髪型はもも裏のあたりまであるロング。

力：雷属性

リリーはユクモ村出身の、【金色の稲妻】の異名を持つ凄腕ハンター。しかし、数年前ハンター界から姿を消した。何故ハンター界から姿を消したのかわ明らかになっていない。

いつからかリリーはスカイに好意を寄せるようになっていた。

リリーは雷の状態変化を習得しておりその形はまるで、大きな剣のような形。

リリーのは昔、師匠がいた。その師匠がどんな人なのか…気になるところである。

スバン・キャトット

年齢：17歳

身長：168センチ

武器：凶嵐剣【嵐天】

防具：荒天・真

眼や髪：サファイアのような青色で髪は美しい黒髪。髪型は腰のあたりまであるロング。

力：水属性

スバンの出身地は判明しておらず、異名【蒼眼の荒土】を持つハンター。スバンは【力】を持っているのに過去に起きた事件以来、力の使用にトラウマを持ってしまった。

スバンの特徴は多々あるが、何と言ってもその豊満な胸。リリーが

羨ましがするのも無理はない…

しかしそんな胸がすぐそこにあるのにスカイは見向きもしない。…
実にもつたないッ！！

まあ、作者からの意見ですが私の理想ではリリーくらいの胸がベストで　　何言ってるんだあッ！！

ラッツ・シュバニクル

年齢：16歳

身長：167センチ

武器：オデッセイブレイド

防具：ナルガS

眼や髪：橙色で髪も眼の色と合ったオレンジ色。髪型、襟足は肩甲骨の辺りまであり、もみ上げは肩に当たるほど長い。

力：無し

ラッツの昔の戦友であり親友だった。スカイとラッツは幼なじみで昔から良く遊んでいたらしい。

ラッツはあの【金獅子^{ライザン}】と一戦交えている…と言うか一方的にやられていたのだが…

そんなラッツは今戦っているモノブロスにも殺られかけた。ラッツは決して弱い訳ではないのだから…寧ろスカイ、ウル、ラッツの中では一番強いハンターだ。

設定上まだ公開していない情報だが、ラッツはある悩みを抱えている。その事は彼女であるウルにも話していない…

ウル・ジエニファー

年齢：16歳

身長：160センチ

武器：サクラノリコーダー改

防具：レイヤS

眼や髪：眼の色は若葉色で髪の色はクリーム色。髪型はポニーテール。

力：無し

スカイ、ラッツとはハンター訓練養成学校時代の仲間。

今はポツケ村に拠点を置いている。

最初はスカイに恋心を抱いていたが、ラッツの勢いに押されてラッツの事が好きになった。

ラッツはいつもピンチになるのでその度に泣きそうになっている。なんと優しい子だ。スカイよりもラッツの事を想っている。まあ、それが彼女ってものか…

因みにどうでもいい情報だが、ウルは笑った時にえくぼが出る。可愛らしいですね

ブルーナ・ストラウト

年齢：18歳 ラッツ編では16歳

身長：162センチ

武器：銘火竜弩【緑桜】

防具：リオハートZ

眼や髪：眼の色は赤色、髪の色は桜色で髪型はツインテール。

力：火属性 こちらの属性は火属性で合ってます

ブルーナはラッツに並ぶスカイの幼なじみ。因みに、ブルーナとラッツは初対面。この小説で最初に登場したオリジナル武器が、ブルーナが持つ『銘火竜弩【緑桜】』だ。性能は未だ不明。ラッツ編の4人の中ではラッツよりも強いハンターだ。

ブルーナのキャラ設定は『ツンデレ』キャラで行こうと思います。皆といる時は強い自分を見せ、スカイと2人きりの時は甘える自分を見せる、って感じです。

グラウト・アレルドバーク

年齢：34歳

身長：178センチ

武器：テスカ・デル・ソル、ダオラ、ディグリベグ

防具：リオソウルZ

眼や髪：眼の色は朱色、髪の色は紺色で髪型、前髪は上唇の辺りまで伸びている。

力：無し

スカイが憧れを抱いているハンター。グラウトの影響でスカイはハンターになったという。数多くの古龍の武器を所持しており、使う武器の種類は大剣だけではない、ハンマーや双剣、ランスも使うとか…

超凄腕のハンターなだけあって、グラウトに届けられる依頼はいつも危険なものばかり。

だから、家にいる時間は極僅か。

なんともさびしい生活だ…強過ぎるのも考えようによれば良くないものがあるのかもしれない…

リルア・アレルドバーク

年齢：32歳

身長：158センチ

武器：母親 妻 という立場 / 上目遣い / フライパン

防具：エプロン

眼や髪：一言でまとめちゃいます。茶髪のショート。以上

力：無し

容姿、超絶可愛い！！どんな男でもコロツと引っちゃう可愛さ。

母親をハンターにするか、普通の主婦にするかを迷いに迷った結果、主婦にしました。ハンター希望だった方、すいません…

まあ、とにかく可愛いキャラです。以上！！

第21話 登場人物紹介1（後書き）

作者「どうでしかた？今回の『モンスターハン』」

スカイ「誰が鈍感キャラだ！俺は鈍感なんかじゃ」

作者「スカイ、それは無理だ」

スカイ「え？何が？」

リルア「スーくんの鈍感さは父親譲りだからねえ、相当鈍感なはずよ？（笑）」

グラウト「でも俺はリルアの気持ちには気付いたぞ？」

リルア「あなた…／／／／」

グラウト「リルア…／／／／」

作者・スカイ「こらそこッ、深い方のキスしない！」

グラウト・リルア「…／／／／」

作者「そしてラッツとウルも見つめ合わな　こらキスしない！」

スカイ「ヘッ、バカツプルどもが　ん？リリーもスバンもブル

ーナもどうした？俺の顔になんか付いてるか？」

リリー「…！？あ、うん。何か付いてるから僕が取ってあげるよ」

スバン・ブルーナ「！？コラリリー！！抜け駆けは反則だぞ！！」

スカイ「？全く、変わったやつが多いな（笑）」

作者「…鈍感だなあ…あ！忘れるところだった！この小説のタイトル、長いですよ（汗）」

そこで！読者の皆様、お手数ですがこの小説の省略ネームを考えてもらえたらなあと思ひまして…協力の方、お願いします」

グラウト・リルア「さて！次回の『グラウトとリルアのナイトハンティング』は！」

作者「コラッ！！明らかに18禁エリアに入っちゃうから！何だよナイトハンティングって！」

ラッツ・ウル「次回の『ラッツとウルの〇〇〇ストーリー』は？」

作者「オイッ！！さっきのよりヒドイから！ッて言うか良くそれ言

えたな!？」

スカイ「さて次回の『モンスターハンター【覇気と力を持つ者達】』は？」

作者「…流石鈍感キャラ…ノリが分かってない…」

スカイ「何か言った？」

作者「もういい…次回『決着』」

全員「お楽しみにいッ!！」

第22話 2人の愛

「クソッ！なんてタフなやつだ」

「ほんとだね、そろそろ倒れても良い頃なのに…」

「もう少しはずだ！皆頑張れ！！」

ラッツが回復し、再び4人になったスカイ達は一角竜モノブロスと死闘を繰り広げていた。

ラッツとウルがスカイとブルーナに合流し、狩りを始めて30分が過ぎていた。

「いい加減…くたばれッ！！」

渾身の一撃をモノブロスの脚に炸裂させたが、モノブロスは怯まなかった。それどころかインペリアルソードを持つスカイの方がふらついてた。

それもそうだ。あんなに長い武器を長時間振りまわしているんだ。疲れるに決まってる。

ブルーナはいつの間にか火炎弾から貫通弾Lv1に変更していた。なんとブルーナの使うLB、火竜弩は貫通弾Lv1も速射機能が付いていたのだ。

「おおおらッ！！」

ウルも脚に叩きつけを当てる。だが、それでも倒れる気配はなく、モノブロスがウルの方を見る。

この距離じゃ回避では避け切れない。況して攻撃の後、隙だらけの状況。

そしてモノブロスは片足を一步後ろに下げた。

「クッ！」

突如、ウルは強い力で横に飛ばされ、地面に倒れ込む。しかし、モノブロスの突進を回避する事が出来た。

ウルは、自分を押したのもが何なのかを確かめようとした。

その途端、ウルの顔は赤く染まった。その光景は

「ら、ラッツ！？どうしたのツ？」

すると、ウルに抱きつくように倒れていたラッツは無言で立ち上がり、防具に付いた砂を払う。

「どうした？つて…お前、今危なかっただろうが…心配かけさすんじゃねえよ…」

その時ウルは、自分は危ない状況だった事を思い出した。

「あ！ありがと…つてツ！一番心配掛けさせてるのはラッツの方だよツ！！」

「…それもそうだな…」

ラッツはそう言つて頬笑み、モノブロスの方を向く。…いや、向こうとしたがいなかった。

「しまった…！」

「まさか…地面の中！？」

その声で4人は自分の足元を見る。

そう、モノブロスは突進のほかに地中からの攻撃も仕掛けてくる。しかも、地中からの攻撃は、誰が標的になっているかが分からず、その上その攻撃をまともに受ければほぼ確実に…死ぬ。

地中からの攻撃を躲すには、地中の中を動くモノブロスの動きを察知する他無い。

モノブロスが近づくと足元が微かに揺れる。その時に緊急回避をすれば攻撃を回避する事が出来る。

4人は神経を足に集中させる。

その時、モノブロスが動いた。最初の標的は

「フツ！」

そのハンターは揺れを感じた瞬間、緊急回避をした。最初の標的、そのハンターは

「ラッツツ！？」

スカイがそう呟いた瞬間、先ほどまでラッツがいた場所の地中からモノブロスが勢いよく飛び出てきた。

「ギヤアオオツ！！」

飛び出たと同時に雄叫びを上げた。

だが、この技の不利点、それは

「その攻撃の後にはあゝ」

モノブロスの頭が低くなった瞬間、スカイは練気を解放した。

「隙が大きいだよッ！」

スカイは気刃斬りをモノブロスの角に炸裂させた。

「ギヤアアオオオ…アギユルウウ…」

次の瞬間、一角竜の角は宙を舞い、最後の力を振り絞ったかのような声を上げ、そして絶命した。

数秒後、宙を舞っていた角が砂の地面に突き刺さった。

「…ああ…」

狩猟が終わって安心し、一気に力が抜けたのか膝から崩れ落ちたウル。

「な、長かったなあ…」

ウルに続きブルーナ、ラッツと尻もちをついた。

スカイもインペリアルソードを砂の地面に突き刺し、その場に座り込んだ。

「ふう…終わったな」

ギザミスヘルムを脱ぎ、スカイは雲一つ無い快晴の空を見上げ、微笑んだ。

狩猟後の帰り道。

モノブロスから素材を剥ぎ取った4人は途中まで一緒にポツケ村を目指していたのだが…

「うおつと…」ふらつくスカイ。無理もない。練気の解放と気刃斬りを使用し過ぎたため、疲労が溜まっていたのだ。

「スカイ、大丈夫か？」

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとな」

心配そうな表情を浮かべるブルーナに、少しでも安心させるために無理矢理笑顔を作った。しかし、それが無理矢理作った笑顔だという事は、久しぶりに再会したブルーナでも見抜く事が出来るほどのものだった。

「あまり無理するなよ…お前は少し頑張りすぎだ…」

ウルに肩を借りているラッツに言われ、スカイは少しムスツとした。

「お前には言われたくねえよ！」

「フツ、そうかもな…」

「おっと…だがやっぱり、ラッツよりも俺の方が重傷らしいな…」

「スカイ、猫車呼ぶ？」

猫車とは、ハンターが狩猟中に力尽き、これ以上狩りに参戦できないと判断された場合に2匹のアイルーが持つて来てくれる、一人分乗れる小さい担架の事を、スカイ達の間で猫車と呼んでいるのだ。

「あ、ああ。頼む。」

「すまない、私の分も呼んでくれないか？」

大した怪我もしていないブルーナが何故猫車の要求をしたのか分からなかったスカイは頭の上にはてなマークを浮かべる。

「何でブルーナが猫車を？」

「あ、いや、その…あ！そうそう。LBも体力の消費が激しいんだ」

「そう、なのか？」

「あ、ああ。LBもかなり重いからな。それを持って動き回るのだから疲労も溜まるのだ」

「それもあるだろうが、内心はと言うと…」

（スカイがいない状況であるの2人の中に私が入るわけにはいかなかったろ…）

と、心の中で苦笑いを浮かべていたブルーナだった。

数分後、計4匹のアイルーと小さめの担架が2つ届いた。

「お待たせしましたニヤ！」

「さあさあ主人！乗ってくださいニヤ！ここからなら1時間もしな

「うちに一番近い街に着くニヤ！」

「ありがとう。それじゃあ先に行って待ってるからな…あまりイチヤイチヤして遅れんなよ」

そう言ったスカイの顔はすぐニヤニヤしていた。

「もう！スカイのバカツノノノ」

「スカイ、あまり女をからかわん方が良いぞ」

ブルーナはLBの銃口をスカイの頭に突きつけた。

「は、はい…」

スカイとブルーナは猫車に乗り、もの凄いスピードで行き去った。

猫車なら1時間もかからないと言っていたが、竜車の場合は3時間ほどかかってしまう。

「ウル、もう遅いしここにテントを張らないか…？」

今の時刻は23時を過ぎていた。流星にこんな夜遅くに、それも疲労が溜まっている今このまま帰るのは何かあったときが心配というラッツの判断だった。

「そ、そうね。そうしよっか」

何故か緊張しているウル。月明かりに照らされ、ウルの頬が赤く染まっているのが微かに確認できた。

夜食生肉を焼き、近くにある木の実を採取したもの。疲労が溜まっていたため調理する余裕もない。

2人は夜食を終わらせ、テントを組み立てた。

テントの外には先ほど生肉を焼くために起こした焚き火の明かりが周囲を淡く照らす。

テントの中にはベッドとまではいかないが布を何重にも重ね、ベッドに見立てたものを作った。

しかし1人分しか作る事が出来なかった。

「ウル。お前は身体を休めろ…明日も少し歩く事になる…」

「え？でもラッツは？」

「俺は見張り押しておく…」

「それじゃあラッツの身体がもたないよ！それにラッツはモノブラス戦で怪我してるんだから、ラッツが休んで？」

「俺の事なら大丈夫だ…それに俺はもうBCヘイスキャンフで休んでる…」

「でも…」

「いいから…お姫様は寝てる…」

その発言でウル顔は一気に赤くなった。しかし焚き火の明かりのせいでラッツには変化は見とれなかった。

ラッツは微かに笑っていた。一番愛する人を安心させる、穏やかな笑顔だった。

「じゃあお言葉に甘えて」

「ああ…」

と言ってウルはテントの中に入って言った。

数秒後、テントに背お向けていたラッツに声が届けられた。

「ラッツッ！」

「…!？」

後ろを振り向くとテントの入口からウルが顔を覗かせていた。

「おやすみッ」

ウルの無邪気で可愛い笑顔に、ラッツは頬を赤くした。

「ああ、おやすみ…」

ウルの寝息が聞えてきたのはそれから間もなくのことだった。

一体どのくらいの時間が経ったのだろう。ウルが寝てちょうど1時間後くらいの事。

ラッツは親愛なるお姫様ウルを護る為に睡魔と格闘していた。

「…剣の手入れでもするか…」

ラッツはテントの近くに置いていたオデッセイブレイドとポーチの中の砥石を1つ取り出した。

シュツ、シュツ、シュツ

オデッセイブレイドの刃を砥石で研ぐ度にシュツという音が鳴り、それがまたラッツと睡魔を戦わせた。

その時、後ろから突然視界何かに遮られた。

「だあれだ？」

正直声がなくても誰だかは分かっていた。

「ウル…どうした…？眠れないのか…？」

「違う。交代の時間！」

「交代…？」

「そう！ちよつと前から見てたけどラッツ、眠たそうだったから」

「…ありがとう…じゃあ甘えさせてもらう…」

そう言つてラッツはテントに入つて行つた。

ウルは近くにあつた細長い木の棒で焚き火の中にある木や灰をつつく。

次の瞬間、ウルは後ろから強く抱きしめられた。それがラッツだと判断するには時間が掛らなかつた。

「ら、ラッツ！？ど、どうしたのツ？」

するとラッツはウルから離れた。ウルは相当焦っていたのがうかがえる。顔も真っ赤に染まつてる。

ウルは後ろを振り向く。そこには思った通りラッツの姿が。ラッツは口をへの字に曲げ、頬を赤く染めていた。いつもならそんな表情も行動も取らないあのラッツが…一体どうしたのか。

「ど、どうしたの？」

あのラッツがモジモジしている。ウルにはさっぱり分からなかつた。その時、ラッツがようやく口を開いた。

「俺たちは」

「？」

「俺たちはまだ若い…これから苦難や困難の壁にぶつかる事もあるだろう…」

「

この時点ではまだラッツが何を言いたいのかは、ウルには分からなかった。だが次の言葉でウルは大きく目を見開いた。

「でも、そんな時こそ2人で支え合って、助け合って生きて行きたい……」

「え……!？」

「ハンターとしてでなく普通の主婦としてでいい……俺がウルを護る……だから……ッ……!」

よく見ると、ラッツの頬は今までに見た事無いくらいに赤く染まっていた。それは焚き火の淡い明かりでも確認できるほど。

「俺と結婚してほしい……年齢的にはまだ早いかもれないが、俺は全力でお前を愛す……ッ……!だから、ウルも俺の事を……全力でなくていい、ほんの微かでもいい……俺を愛してほしい……」

「………何言ってるの?」

「……!？」

下を向いていたラッツはウルの眼を見た。その眼には涙が溢れていた。

そしてウルは徐々にラッツに近づき、抱きしめた。

「微かでもいい?微かな訳ないでしょ……!全力で……全力で愛してあげるから、全力で……愛してね……」

嬉しさのあまり、膝から崩れ落ちそうになるのを、ラッツはウルを抱きしめて止めた。

「じ、じゃあ……」

「これから一生……よろしくお願いします」

2人は口づけをした。お互いを強く抱きしめ合いながら……

そんな2人を月は照らし続けていた。

2人は防具を脱ぎインナー姿で、狭いベッドの上で深く口づけていた。

「つぶは、ねえラッツ」

「…何だ？」

「……やりたくないの？」

「ッ！？」

緩んでいたラッツの表情が一瞬で硬直した。

それと同時にウルがラッツの上に乗った。

所謂……いや、馬乗り状態と言っておこう。

馬乗りの状態でウルは左手を男の急所部分へと運び、掴んだ。

「お、おい……ッ！？」

次にウルはラッツのインナーを脱がした。

そしてウル自身もインナーを脱いだ。

脱ぎ終わるとラッツと再び口づけをした。深く、深く。

口づけ終わるとラッツがウルを押し倒し、今度はウルが下、ラッツが上となった。

「本当に……いいのか……？」

「…うん」

その返事を聞くと、ラッツはすぐにはやらずに手でウルの急所に軽く触れた。

「ひゃんッ／／／ちよ、ちよつと…覚悟決めたのに、焦らさないで／／／」

「いきなりやると…ウルが苦しむぞ？」

「もう…ラッツのバカあ　　ああんッ」

ウルがラッツを叱っている最中にも関わらずラッツは中指と薬指を急所の割れ目に挿入した。

「ちよ……つと、そんな…急に…んああッ、は、激しいよおッ／／／」

ラッツが指を動かすたびにクチュクチャと音を立てる。

ラッツはより一層激しく指を動かした。

「ふああ、んああ！や、やめてッ！い、イツっちゃうッ／／／」
しかしラッツはやめなかった。むしろ勢いを強くした。

「ふああ、んああ！ひゃあ！もっ…む……りッ！ふああああッ／
／／／」

ラッツが挿入れている割れ目から半透明の液体が噴き出した。
ウルは力を失い、荒い呼吸のままラッツの首に腕を回しラッツを引
き寄せ口づけをした。

だが、息が続かずすぐに離れる。

ウルは自分の急所の割れ目を自分で広げた。

「はあ、はあ…ねえ、恥ずかしいから早く……して」
今の一言で、辛うじて、ギリギリで保たれていたラッツの理性は完
全に失われた。

「いくぞ…ッ」

「ひいひいひい、あッ、んああッ、ふああ
」

「はあ、はあ、はあ」

「これは……狩り終わりにやるもんじゃないな……」

2人はある物事で疲労が溜まったようだ。

ウルとラッツは狭いベッドで寄り添いながら横になっていた。

2人は深く口づけをした。

そして眠りについた。

第22話 2人の愛（後書き）

作者「…」

スカイ「…」

ブルーナ「…」

作者「すいません…本来は書かざるべきだと思ったのですが…」

スカイ「まさか、こんな回になるとはな…」

ブルーナ「本当だ！モノプロスを狩って皆で『バンザイッ』な予定が…」

ウル「わ、私は初めてをラッツに貰えて嬉しいよ？」

ラッツ「俺は絶対にウルと俺たちの子を護って見せる…」

作者「こらッ！！話が全く」

ウル「子供の名前どうする？」

作者「ちよいちよいちよいッ！俺が話して」

ラッツ「こう言うのは読者に訊くのが一番だよ…」

作者「だから勝手に」

ブルーナ「スカイ、い、一応言っておくが、わ、私はまだ初めてだぞ？／／／／」

作者「ブルーナは何アピールしてんの！？」

スカイ「え？何が？」

作者「…もう無理です…」

ラッツとウルの間に来た子の名前。ご要望があればコメントして頂けると嬉しいです。

byウル&ラッツ

一応子供も出る予定ですb

第23話 5センチが詰めれなくて

モリブロス
一角竜との戦闘も終わり、スカイとブルーナはラッツとウルよりも一歩先に砂漠の近くにあるセイス村に着いていた。

スカイは練気の解放及び気刃斬りの過度の使用で身体はボロボロだった。

スカイ達はセイス村の村長に無理言って空き家を1日だけ貸してもらえらる事になった。

「ほほお、その歳でもう一角竜をお…いやあ感心感心。是非この村の専属ハンターになってもらいたいのお」

「そうですね…しかし専属ハンターになるのはちょっと…しかし、宿を貸してもらったこの御恩は忘れる事はないでしょう。私は旅をしているので近いうちにまた来るかもしれません。その時は是非この村のお手伝いでもさせてもらいたいです」

「ほっほっほ！若いのにしっかりとるのお。…それよりお連れの方の容態はどうじゃ？」

「あ、はい。今は寝ています。大分疲れが溜まっていたらしく…でも少し休めば良くなると思います」

「ほお、無理はいかんぞ？大切にしていやれ。彼氏さんじゃろ？」

「ええッ！？ちっち違いますよッ！大体スカイは」

「ほっほっほおッ！まあ今日はもう遅い。君も寝るといい。君も疲れたじゃろ？」

「あ、え、はい。じゃあそうします。本当にありがとうございました」
「礼には及ばんよ。じゃあのお」

そう言って村長はブルーナに手を振りながら去って行った。

ブルーナは村長が去っても尚、頬を赤く染めていた。

「まったく困った村長だ…」

ブルーナはそう言いながらも夜空を見上げながらも微笑んでいた。相変わらず頬は赤いままだったが…

ブルーナは借りた家に入ると、スカイの容態を見に行った。

スカイが寝ているのは2階に上がってすぐの正面の部屋。ブルーナはその部屋に入った。先ほどから赤かった頬がより一層赤くなっている事は誰にも知られる事はなかった。

「す、スカイ、入るぞ？」当然、返事が返ってくる事はなく、部屋の中にはスカイの寝息だけが微かに聞こえるだけであった。

「スカイ…たく、無茶しおって…少しは仲間を頼る事も　　ッ！
！」

スカイを見て、最初は心配をしていたのだが、ブルーナの心の中にある思いが生まれた。

（今はこの家にスカイと私だけ。何をしても誰にもバレないッ！）
だがブルーナは首を振った。

（いやいや、さすがにそれは　　）

その時、スカイの顔が目に入った。

その顔はとても清々しそうで、幸せそうで、昔から変わらないスカイの顔だった。

自分の過去の思い出が蘇る。

『私は将来、スカイのお嫁さんになるッ！スカイの事が大好きッ！』
自然と、ブルーナの顔はスカイの顔に近づいていた。

「今でも、その気持ちは、変わってないよ？」

ブルーナの口調が少しおかしい。ブルーナはスカイと2人きりになると、『ツンデレ』のデレの方になるのだ。そして、それが今。

「私は今でもスカイの事が…」

更に顔を近づける。ブルーナの顔とスカイの顔、距離にして5センチ。

高鳴る鼓動、速まる心拍。

邪魔するものは何もない。なのにその残り5センチを詰める事が出来なかった。

「…ダメだ。こんな形でしても自己満足に過ぎないよね…」
ブルーナはスカイの顔から距離を取る。

次に瞬間、事件が起きた。

「んあ、誰だお前…」

ブルーナがスカイから顔を離している時にスカイが起き、誰かを確認するために、ブルーナはスカイに後頭部を掴まれ、再び顔を近づける事になった。その距離は3センチ程。

「す、す、スカイツ!?!」

「ん? ああ、ブルーナじゃねえか…」

「う、うん…スカイ、身体はもう大丈夫なの?」

「い、いや、正直まだ動かないよ。それよりブルーナ、お前口調変じゃね?」

「へ、変じゃないよツ!?!…って言うか…」

「ん? 何だ?」

「ち、近いよおおおッ!!」

「ああ!! すまない」

そしてようやくスカイはブルーナの後頭部から手を離す。

2人の間に気まずい雰囲気の流れる。

「と、とにかくスカイは身体を休めるといいよツ」

「あ、ああ…俺もだがブルーナ、お前も身体を休めろよ?」

「う、うん、ありがと…」

そう言っつてブルーナはその部屋を後にした。

だが、それからすぐの事。ブルーナはすぐにスカイの寝る寝室に戻つて来た。

「どうした?」

「えっと…その…ベッドがここにしか無いんだけど…」

そう、もともと客を招く準備なんてしていなかった為、ベッドが1つしか用意されていなかったのだ。

「えっと…どうする?」

「そんなの決まってるだろ、お前がベッドで寝ろよ、女の子なんだから」

「いやしかし、スカイは怪我人だよ？」

「困ったなあ……」

「う〜ん……」

するとスカイが何やらいい案を閃いたらしい。

「あ！こんなのはどうだ？」

「ん？」

（何で…何でこうなったツ／＼／＼）

ブルーナとスカイ、背中合わせ。と、言う事は…

そう、スカイとブルーナは1つのベッドで一緒に寝ているのだ。しかもスカイは何も気にしていないのがまた、ブルーナの心を軽く傷つける。のか？

そんな事はさておき、ブルーナは心臓の鼓動がスカイに伝わらないか心配だった。

（こんな…こんな事ってツ／＼／＼）

ブルーナは瞳を強く閉じた。

（こんな事ならスカイの案なんて採用しなければ良かった…）

突如声はその部屋に響いた。

「ブルーナ、本当にゴメンな…本当ならベッド全部をお前に譲りたかつたんだが…」

ポツと赤くなるブルーナの頬。その時スカイがこっちの方を向いている事に気付いた。

「す、スカイ…」

突然、強く抱きしめられた。

「す、スカイツ！？ち、ちよつと…ッ」

返事は返ってこなかった。スカイはブルーナを抱きしめたまま寝てしまったらしい。

そしてそんな姿勢で寝られて一番困るのはブルーナである。
もう、どうしていいかわからない。

「あ、えっと、その、す、スカイ、寝たの？」

やはり返事は返ってこない。

「…私も寝よっと…」

ブルーナが寝たのはそれから数分後の事だった。

第23話 5センチが詰めれなくて(後書き)

グラウト「えっと、今回は俺とリルアしかいないんだ」

リルア「そうなの、作者さんとスーくん達は温泉旅行でユクモ村つてところに行ってるの」

グラウト「そんな事より…ブルーナちゃんがスカイのお嫁さんなら大歓迎なのになあ」

リルア「本当よねえ。何ていうか何でも出来そうって言うかえ？尺巻いて？」

グラウト「どうやら時間がないそうだ。皆コメントね」

リルア「と言うわけで次回【緊急依頼】」

グラウト「…何か嫌な予感がする…ッ」

第24話 緊急依頼（前書き）

作者「ついさつき、温泉旅行から帰って来てちょっと休憩…といきたいところなのだが皆に報告がある。それは」

スカイ「ラッツ編もあと2〜3話で終了の所まで来たんだッ！」

ラッツ「おいスカイ。お前なんで嬉しそうなんだ…？」

スカイ「…正直、ラッツ編はもう飽きた（笑）」

ラッツ「…俺たち親友だよな…？」

ウル「まあ私はラッツ編が終わっても時々出るみたいだからいいけどねえ」

ラッツ「あ、あれ…？そ、そんな事言うのか…？俺たち確か付き合ってた」

スカイ・ウル「では！モンスターハンター【覇気と力を持ち者達】、スタートッ！」

作者「もうダメだ…」

第24話 緊急依頼

暖かい日差しと共に小鳥たちのさえずりが聞こえと来たのはブルーナが起きてすぐの事だった。

ブルーナは普通の人と比べて少し起きるのが早いようだ。

それでも、やはりスカイの方が早いようだ。

ブルーナは、少し早く起きてスカイの容態を確認しようとしていたらしいのだが、隣にはスカイはもう既にいなかった。

「ん…あれ…？スカイ…？」

眠たく、なかなか開かない目を擦りながら後ろを見ると、背中を預けていたはずのスカイは既にそこにはいなかった。

現在の時刻は5時6分。既に行かないという事はスカイはかなり早起きだな、と働かない思考でもそう思えた。

そしてようやく眠気が覚めたと思ったら、何かの軋む音が聞こえてきた。その音が、木製の階段を上ってくる音だと分かるのに時間は掛らなかった。

階段はこの部屋の正面、しかしベッドの配置上、ベッドから階段は直接は見れない角度。

階段の上る音がしなくなつてすぐ、寝室に誰かが入つて来た。

「お！ブルーナ、起きてたか。朝食が出来たぞ」

「す、スカイか、体調はもういいのか？」

「ああ、この通り。もう全然平気だ。そんな事より早く食べよう、冷めちゃうからな」

と言ってスカイは階段を下りて行った。

「ふっ、まるで夫婦だな」と上半身だけ起こしているブルーナは思った。そして、その自分の発した言葉のせいで顔がボンッと赤くなつてしまった。が、誰にも見られる事はない。

階段を下りるにつれて、1階からは食欲をそそらせる良い匂いが漂ってきた。

「良い匂いだな、スカイは料理が出来たのか」
「ああ、学校にいた時に『料理学』という授業があったからな」
2人は椅子に座り、手を合わせ、「いただきます」と言ってお食
を食べ始めた。

「ブルーナ、訊いてもいいか？」

「食事中、スカイはブルーナに質問をした。」

「ん、何だ？」

それにブルーナも応じた。

「俺がハンターの学校に行ってた時、お前は何をしてたんだ？」

その時、ブルーナの箸が止まった。そして俯いた。

「ブルーナ、どうした？」

「……」

ブルーナは何も答えなかった。スカイは動揺が隠せなかった。

（やべえ、変な事訊いたかな…あまり過去の事は　　）

「後悔してた…」

不意のその言葉に、スカイの思考は止まった。そして1つの疑問が
生まれた。

「…後悔？」

その言葉の意味がスカイには分からなかった。何を後悔していな
か、がだ。

しかし、答えはすぐにブルーナから告げられた。

「お前に…スカイに着いて行かなくて…後悔してた…ッ」

「…ッ!？」

スカイにとってその言葉は驚愕そのものだった。

何故なら、ブルーナはスカイが村を出てハンター養成訓練学校に行
くに行った時、『私は絶対に行かない!!』と言っていたからだ。

「スカイは村を出て行ってからの私の生活に残されたものは、退屈
と後悔だけだった…ずっと後悔してた…何でスカイに着いて行かな

「かつたんだって…」

スカイはブルーナの表情が気になった。

（ま、まさか…泣いてないよなッ！！）

だがブルーナは泣いてはいなかった。しかし身体が小刻みに震えていた。

スカイはフーツと安堵の息を漏らした。その後もブルーナの話は続いた。

「だからッ！だから私はスカイに一步でも近づくために【弟子入り】したんだッ！」

さつきまで俯いていたブルーナが顔を上げた。その時の瞳は、いや表情は輝いていた。

「で、弟子入り？そうか、弟子入りしていたのか…ッ」

スカイは、ブルーナがどうやってハンターになったのかが分からなかったのだが、今ようやくその理由が分かったらしい。

「ああ！師匠の名前はルート。ルート師匠に会ってから私の人生は変わった！」

「変わった？」

「退屈ではなくなり後悔は忘れれた。そして、ルート師匠は人生で2番目に心を許した人なんだ」

「そうか…良い人に会えて良かったなッ。ん？2番目？1番目は？」その発言にブルーナは赤面になった。流石と言うべきか…

これが鈍感クオリティ^{スカイ}。真顔で言われると、どう言い返しているのかわからなくなるもの分かる。それが好きな相手からなら尚更だ。

ブルーナが赤面になった事に、スカイは頭上に疑問符を浮かべる。

「いや、えっと、その…1番は…す、す…」

「す？」

「す、スカイなのッ！！」

ブルーナ、【ツンデレ】のデレモード発動。

「お、俺…か？」

「う、うん…」

ブルーナは強く瞳を閉じて、目の前の現実から目を背けたがっている。

スカイは黙って立ち上がり、ブルーナの横に立った。ブルーナは恐る恐る目を開ける。

「す、スカ」
座っていたブルーナは無理矢理立ち上がらされ、強く抱きしめられた。

「ち、ちよつとツ!?す、スカイツ!?!」

「ありがとおツ!!そう言ってもらえて嬉しいよツ!」

最初はテンパっていたブルーナもそう言われて、恥ずかしいけどこの時間がずっと続けつと願った。自然と笑みがこぼれた。

その後、2人は食事を終えてポケット村に戻るため準備を始めた。

準備をしながらブルーナは自分の師であるルートの事を考えていた。
(師匠、彼が私の…好意を寄せる人です…ノノノでも、彼といるときも師匠の事を忘れた事なんてありません。だから、師匠も私の事をずっと見守っていてください)

スカイ・ブルーナの準備が済むとほぼ同時にラッツ・ウルの2人がこの借り家を訪れた。

2人の間にはちよつとだけ気まずい雰囲気の流れているような気がした。

(ラッツめえ、何かやつちやつたなあ)

「す、スカイ、もう大丈夫なの?」

「ああ、大丈夫。ありがとな!じゃあ出発するかツ!」

スカイとブルーナは村長にお礼を言いに村長の家を訪れた。

「昨夜はありがとございました」

「気にするでない。気を付けて帰るのじゃぞ?」

「はい」

「あと、そっちの水色の髪のお…えっと確か
何を言いたいのか察したスカイは、」

「あ、スカイ・アレルドバークです」

と名乗った。村長はスカイの名前が分からなくて困っていたのだ。

「そう、スカイ君。彼女さんを幸せにしてやってくれのう、ほっほっほ」

「分かってますよ」

「ち、違う。私とスカイはそういう関係ではあ…」

そう、村長とスカイの意味のとらえ方は若干異なっている。そのためブルーナは動揺が隠せない。

4人は村長に手を振りながら村を出た。

4人がポツケ村に着いたのは2日後のことだった。

「ただいまッ！」

スカイの言葉に、他の何人かのハンターとGMがスカイの方を向いた。

「おかえりい、どうだった？今回の狩りは？」

そう訊かれてスカイは、今回の狩りを思い返す。

「ん、何かと面白かったですよ。狩りは面白くなかったですけど

…」

「ん？どういうこと？」

「内緒です」

その瞬間、スカイはもの凄い力で胸倉を掴まれ耳元でGMがこう囁いた。

「教えないと4分の3殺しにするけどいい？」

その速さ、1秒あっただろうか。

スカイは身震いと冷や汗が止まらなかった。

「いや、えつと、し、しかし確信が掴めていない事なので
「良いから話して？じゃないと5分の4殺しにしちゃう」

（さ、さつきより殺し率が大きいッ！しかも笑顔の裏にとてつもない恐怖を感じる…てい、ティガレックスよりも怖いかも…）

今は胸倉を掴まれていないから逃げる事も出来る。しかし、その後が怖すぎる…

（逃げれない恐怖がこれほど怖いとは…逃げれば間違いなく殺される…どうする、どうする俺ッ！！）

その時、救いの手が差し伸べられた。

「スカイ、帰っておったか。さっそくで悪いのじゃがちよつと来てくれんかの。あとラッツもじゃ。ラッツはどこにおるかのお？」

スカイの元に来たのは村長さんだった。GMも村長には頭が上がない。

「ら、ラッツならもう次期に帰って あ、来ましたよ
そう言つてスカイは出発口を指さす。

ラッツだけでなく、ブルーナ、次いでウルが帰つて来た。

村長はその3人に手招きをする。

「どうしました村長…」

「話は後じゃ。とにかくワシの家まで来てくれんかう？」

「は、はい…」

4人は村長に連れられ村長宅へ。

室内、リビングにはちょうど5人分の椅子が用意されていた。

「それぞれ座つてくれ。これから4人を集めた訳を話す」

村長はいつになく真剣な面持ちだった。

「…ワシの親友の村がディアブロス亜種によって奇襲されたのじゃ
4人は目を大きく見開いた。

「そのディアブロス亜種は上位レベルらしいのじゃが…」

「…どうしたんですか？」

「いや、片角は折れとるのじゃ」

「それって、弱ってるって事じゃないんですか？」

「ああ、普通はそうじゃが、通常より勢いを増しとるといっつか…」
その時、ラッツが簡単に結論を出した。

「つまり…俺たちにそのディア亜種を狩ってほしい…と…？」

腕、脚を組み、軽く俯き気味で、片目を閉じ、片目だけを村長に向けるラッツの姿があった。

「ああ、そういうことじゃ…」

部屋の中に重い空気が流れる。そんな相手を俺たちが相手出来るのか？という不安。または死ぬかもしれないという恐怖。

「ま、まあ君達の力なら何とか出来るとワシは思っとるよ。強制とは言わん。降りたいものはこの依頼からは降りろ」

突如思い掛けないラッツの発言に誰もが驚愕した。

「今回の依頼、俺とスカイだけで行かせてほしい…」

「な、何故じゃ？ウルちゃんやブルーナちゃんがいた方が」

「相手は上位…それに体力も下がっているはず…2人で行っても狩れない相手ではない…そうだよな、スカイ…ッ！」

「たりめーだッ！！本来俺1人で行くかと思うていたんだが久しぶりにラッツと2人つてのも悪くないなッ！」

ラッツもスカイも余裕の面持ちだ。

「そう来なくてはなッ！じゃあ2人に任せ」

「ら、ラッツが行くなら私も行くッ！」

「私もだ！スカイが行くのなら私も行くぞ！」

「ダメだ」スカイとラッツの言葉が重なった。

「何でッ！」ウルとブルーナの言葉も重なった。

そこで仲裁したのは村長だ。

「まあまあ、話はここまでだから行くかどうかは自分で決めて、今日はもう自分の家に帰りなさい」

ここはラッツの家。家にはラッツとウルしかない。

「何でダメなのッ？」

「何でもだ……」

「そんな理由になってないッ！」

「理由がいるのか……」

「当たり前でしょ！？何？私の事嫌いなッ？」

「違う……」

「じゃあ何ッ？」

「お前を……ッ！」

「ッ！？」

「ウルを危険な目に合わせたくないからだ……ッ！」

「え？」

「それにお前は色んな疲労が溜まって。そんな状態で戦つのは無謀だ……」

「……」

激しい口論の末、勝ったのはラッツだった。ラッツはただ、純粹にウルを危険な目に合わせたくなかったのだ。そう言われたら、行かないのが彼の願いなら、その願いに応えるのが普通だ。

「その代わり……」

ウルはどうやら、何か条件を付けてこの依頼から手を引くらしい。

「何だ……」

「絶対に生きて帰って来て」

ウルは頬を赤く染め、上目遣いでそう言った。

「……勿論だ……」

そう言つてラッツはウルを自分の胸に抱き寄せた。

それに応じてウルもラッツを抱きしめる。

そして口づけを交わした。

ここはスカイの家。

ブルーナは一先ずスカイの家に泊めてもらう事になった。

「ブルーナちゃん、久しぶりだね。元気にした？」

グラウトはまるで我が子のように、いや我が子以上にブルーナの事

を可愛がった。

「お久しぶりです、おじさん、おばさん」

「うんうん、礼儀正しいし、可愛いし、可愛いし、礼儀正しいし、可愛いし…それに比べてスカイ！お前はどくなつてんだッ？」

「…ちえッ、帰つてたのか」

「おい、舌打ち聞こえたぞ、おいスカイ、まだ話が」

「ブルーナ、ちょっと来てくれるか？」

「あ、ああ。では」

「うん、変な事されそうになったら殺^やっちゃっていいから」

「は、はあ…」

ブルーナは苦笑いしかできず、そのまま2階に上がって行った。

「さっきの話…か？」

「ああ、今回は2人で行かせてくれッ！頼む！」

「うっ…」

（す、スカイに頼まれたんじゃなあ…）

「頼む、何でも言う事訊くからッ！」

「そ、それは本当か！」

「ああ、本当だ！だからたの」

「いいだろう」

「あれ、食い気味！？そんなことより…ありがとッ」

ブルーナにとつて思い掛けない収穫だった。

「あ、ああ。…約束してくれ、生きて…帰つてくると…」

「そんな事、決定事項に決まってるんだろ！！」

その発言にブルーナは微笑んだ。

翌日。結局参加者はスカイとラッツだけだった。

「2人で大丈夫か？」

「村長さん、大丈夫ですって！」

「…生きて帰ってくる…」

「その心構えが大事じゃ！それじゃあ、あそこに剛速竜車を手配してある30分もあれば着くじゃろう」

「ありがとうございます！よしラッツ、行くぞ！」

「ああ…ッ！」

「ラッツ！」

振り向くとそこにはウルの様子が。

「どうした…？」

「…帰ったら…」

「…？」

「帰ったらまた相手してもらってからねッ！」

その声はラッツにしか届かないものだった。

「…それは…」

「え？」

「それはこっちのセリフだ…」

ラッツは微笑んだ。ウルに心配させないように。その場の空気をよくするために…ウルしか聞いていないのだが…

そうして剛速竜車は出発した。

「そう言えば被害があった村って何村って言うんですか？」

道案内の為に来ていた被害にあった村の人にスカイが訊いた。

「セイス村って言うんです」

その言葉にスカイとラッツは驚愕する。

（セイス村、俺たちが3日前に訪れた村じゃねえかッ！！）

第24話 緊急依頼（後書き）

スカイ「いよいよ、悪魔の事件に突入したな」

ラッツ「俺の運命もここまでか…」

ブルーナ「もうじき本編に戻るな」

リリー「あゝ長かったよ…やっと僕達再登場する訳だね」

スパン「そうだな、作者によるとどうやって本編に戻すか悩んでいるらしい」

ブルーナ「ん？作者は？」

リリー「…って言うか作者って誰？」

スカイ「ん？作者って何だ？」

スパン「聞いたところによると新種のモンスターとか…」

ブルーナ「ほほう、是非とも戦ってみたいものだな」

ラッツ「と言うわけで次回【悲劇とは一瞬の出来事】」

ウル「お楽しみにッ」

第25話 悲劇とは一瞬の出来事

村長が言った通り、この剛速竜車のおかげでセイス村には30分で到着した。

そして、到着したスカイとラッツが見たものはあまりにも酷い光景だった。

「こ、これは…」

「酷い有り様だな…俺達が3日前に訪れていた村とは到底思えないな…」

「お、お前はいつになく平常心だな」

ラッツの平常心ぶりに呆れるスカイ。

今この村に起きている事態の深刻さを見ても、その平常心が崩れる事はないのだ。

「おお！スカイ君じゃなか！まさか助けに来てくれたのか？」

そう声を掛けてきたのは以前お世話になったこの村の村長だった。

「はい。以前の借りを返しに来ました。と言っても村長に頼まれて来たんですけどね」

スカイは苦笑いしながら頬をポリポリと搔いた。

「早速で悪いのだが狩り場の地図を持って来てくれないか…すぐにも出発したい…」

「おお、すまんのぉ」

ラッツの言葉に村長は若干動揺した。

「まさか、今回の狩り…2人で行くのか？」

「はい」

それを聞き、更に村長の動揺が増すのを感じた。

「何か問題でも…？」

ラッツがそう訊くと村長はかなり深刻そうな表情を浮かべ、2人に告げた。

「今回の敵のディアブロス亜種は恐らく…2人では無理じゃ」

そう言われラッツが疑問に思った。

「何故ですか…？我々は貴方が思っている以上に強いと思いますよ…？」

ラッツの方を見ると、さっきの村長の言葉に腹が立ったのか、表情に怒りがこもっていた。

「2人が弱いと言つとるんじゃない。今回の敵が強すぎると言つとるんじゃない」

そう、今の村の状況を見れば誰でも分かる。木端微塵になった家々、多くの怪我人、この村をこんな風にしたのが今回の相手、ディアブ口ス亜種。

「ワシもこの村には小さい頃から住んでおったが、こんな有り様は初めてじゃ」

「そんなの関係無いですよ」

「!？」

口を開いたのはスカイだった。その言葉に村長は驚いた。

「村長が経験した中で初めてだろうがそんな俺達には関係無い」

「そうだな…俺達はもっとつらい経験をしたことだつてある…」

スカイとラッツの言葉に村長は目を大きく見開いた。

(なんとという奴らじゃ。こ奴ら、将来が楽しみじゃのう)

「うむ、この2人ならやつてくれそうな気がしてきたわい。今すぐ地図を用意させる」

村長はそう言い残すと、どこかに消えて行った。

だが、5分もしないうちに帰って来た。手に丸めて筒状にした紙を持って。

「これが今回の狩り場に地図じゃ」

「ありがとうございます」

スカイはそう言つて村長から地図を受け取り、地面に広げた。その地図の隅に石を置き風で飛ばないようにしている。

スカイとラッツが作戦会議を始めると村長はまた、どこかに消えて行った。恐らく村復興のための手伝いにも行ったのだろう。

スカイ達の作戦会議は30分にも及んだ。

「よし、こんなもんだろう」

「そうだな…じゃあ出発しよう…」

「え！？もう行くのか？」

「ああ、あまりこの村の人に迷惑は掛けられないから…」

「そ、そうだな…」

スカイはラッツの平常心且つ冷静な案に言い返すことが出来なかった。

そして出発の時が来た。

「村長さん、行ってきます」

「行ってくる…」

「おお、無事に帰ってくるのじゃぞ」

村長はスカイ達が見えなくなるまで手を振り続けていた。

ここはラムイト砂漠。3日前スカイ達が訪れていた狩り場だ。

ラムイト砂漠はセイス村から竜車で3時間の場所に位置している。

「懐かしいな」

「3日前に来たばかりだろう…」

「そ、そうだな」

（今更だが、半年前の天真爛漫のラッツは一体どこに行ったのだろうか…）

「今回の相手は危険だから2人で行動する…いいな…？」

「わかってるよ」

2人が詮索を始めて10分が経とうとしていた。

「なかなか見つからねえな」

「ああ、もうそろそろいてもおかしくないんだ」

ドゴオオオオオン

2人の背後に急に何かが見れるのを感じた。

2人は後ろを振り向く。そこには今までに遭遇した事のない程大きい黒い影があった。

「な、何だ、こ、この大きさは…」

と次の瞬間

「距離を取れ…ッ!!」

スカイはその言葉で我に返り、急いでその黒い影から距離を取ろうとした。しかし

ギヤオオオオオオッ!!

「うぐッ」

鼓膜が破けてしまいそうな声。いや、叫び。

スカイは耳を塞ぎ、その場に立ち尽くす事しか出来ない。

(これはヤバいッ!)

咆哮が終わると、スカイはそのモンスターから距離を取り、正面ではなく横側に逃げた。

そのモンスターはラッツに向かって突進を仕掛けた。

「この大きさ…回避性能があつてキツイな…」

あの無表情のラッツが苦の表情を浮かべる。やはり今回の敵は相当厄介らしい。

辛うじて回避する事が出来たラッツは体勢を立て直す。そして、モンスターの方に目を向けるとそこには既にモンスターはいなかった。

(しまった…ッ!潜られた…ッ!)

ラッツの足場が微かに揺れた。と同時にラッツは回避した。

ラッツの足場からはそのモンスターが勢いよく飛び出てきた。

(気付くのがあと一瞬遅れていたら…危うかったな…)

しかし、そのモンスターのラッツへの猛攻は止まない。

突進や地中からの攻撃、全てラッツを狙っている。

(くそ…ッ！このままじゃ体力が…)

ラッツはこの状況を打開するためにある方法を取った。

「スカイ…ッ！一旦別のエリアに逃げるぞ…ッ」

「わかったッ」

もつたいたいと思いつつもラッツは閃光玉をそのモンスターに喰らわせ、一旦別のエリアに移動した。

「大丈夫か？」

「あ、ああ、大丈夫だ…」

大丈夫と言っているが大分息が上がっているラッツ。無理もない、集中狙いをされていたのだから。

「それにしてもよく体力もつたな」

「ああ…体術+2があるからな」

体術+とは回避行動やガードなどのスタミナ消費量を軽減するスキル。

「なるほどね…なあラッツ」

「なんだ…？」

「今回のクエスト…リタイアしないか？」

「…！？」

「ウルやブルーナも一緒にさ、そうすればもつと安全に狩ることが出来るし　！？ラッツ避ける…！」

「！？」

不意の出来事だった為ラッツの回避が若干遅れてしまった。

そしてそれがすべてのきっかけだった。

ドゴウオオオオオン

その轟音の中に別の音がスカイの耳に入った。

「グアアアアアッ！！」

スカイがその声の方を向いた。その声は空からだった。見上げるとそこには

リリー、スバン、ブルーナは一点を見ていた。

最初はブルーナが話していたのだがブルーナは知っている部分が少なく内容も薄い。

すると突如、スカイが口を開き、過去について語り始めたのだ。

「す、スカイツー!!」

「お、おい！俺はまだ病み上がりだぞ？」

上半身だけ起こしていたスカイにリリーは勢いよく飛びかかったのだ。

「心配したよ…もう…起きないんじゃないかって…」

スカイの顔の横にリリーの顔があるためスカイからは見えないが、リリーは泣きじゃくっていた。

「悪かったな、リリー。心配かけて」

そう言っただけスカイはリリーの背中をポンポンと軽く叩いた。

「スカイ、相変わらず女の子を泣かせるのが上手いなあ」

「う、嬉しくない…」

スバンも瞳に涙を浮かべている。

「それと…」

とスカイは呟くとブルーナの方を向いた。

「久しぶりだな、ブルーナ」

「そ、そうだな」

「え？何で今一瞬照れたんだ？」

「う、うるさいッ！」

ブルーナは背負っていたLBの銃口をスカイに向けローディングする。
ライトボウガン

「ちょ、ちよつとブルーナ！？それはマジで死」

312号室に銃声が響いたのは夜の十時を回ったことだった。

第25話 悲劇とは一瞬の出来事（後書き）

リリー「やっと本編に戻ったね！」

スバン「ああ、これで一安心（？）」

ブルーナ「作者から伝言だ！過去編の内容でスカイが話したのはスカイは知っているところだけ、つまりラッツとウルがあんなことやこんな事をしたって事はスカイ達は知っていない設定ですので…とのことだ」

グラウト「ウルちゃん、もしかして妊し」

スカイ「お前はなんて事を訊いてんだよッ！！」

グラウト「だって、もししてたら1人じゃ育てるの厳しいだろ？」

スカイ「だからって…訊き方があるだろ！」

グラウト「俺はそんなちまちましたのは」

リリー「はい！！と言うわけで！次回のモンスターハンター【覇気

と力を持つ者達】は？」

ブルーナ「出発前夜」

皆「お楽しみに！！」

第26話 出発前夜

スカイの口からはモクモクと黒い煙が吐き出されている。

その事その場にいた者は誰も触れない。全てはスカイが悪いのだが、そんな事はさておき。

「スカイ、お前…記憶が」

訊いたのはスバン、だがその疑問はその場にいた者、そう、スカイも含めて皆が思っていたことだった。

「ああ覚えてる。俺がハンター学校を卒業したての頃の事も…ラッツとの最後の狩りの事も…でも」

スカイの最後の言葉に、その場にいた全員の頭の上に疑問符を浮かばせた。

「でも？」

リリーが不思議そうに尋ねた。

「…いや、何でもない」

その返事に3人は納得しない様子だったが詮索はしなかった。

「そんな事はさておき、今日はもうすっかり暗くなってる。リリーもスバンもブルーナも今日は帰って寝るといい。俺の事なら心配しなくていいから」

部屋の窓から外を覗くと、空には無数の星が輝きを放っていた。

「そうだな、今日はもう寝る時間だな。そろそろ自分の帰るところに帰るとしよう」

ブルーナは何やら嬉しそうにそう言うと2人の背中を押し、病室から出そうとする。

「え、何？ちよ、待ってよお」

「ぶ、ブルーナ。お前何を」

「スカイだって疲れてるんだ。今日はもう帰るぞ」

3人が病室を出る寸前にスカイが声を掛けた。

「お前等」

3人はスカイの方を向く。

「俺はどのくらい寝てたんだ？」

3人は答えずらそうだったが口を開いたのはブルーナだった。

「一ヶ月だ、お前は一ヶ月寝込んだいたんだ…」

それを聞いたスカイは更に質問を続けた。

「俺の事を一ヶ月間看病していたのか？」

「あ、ああ…」

「そうか…ありがとな」

その返事にブルーナは頬を赤く染めた。そしてその顔を誰にも見られないように下を向き、2人を押しながら病室を出て、スライド式のドアを閉めた。

「お前は変わってないな…ブルーナ」

3人は病院を出たところで解散した。

「ここからはお前達だけで帰れるな？」

「元々僕達だけでも帰れるよ…」

「ではまた後日、スカイの病室でも会おう」

ここはリリー達が借りている宿。

「いやあ、それにしてもスカイの意識が戻って本当に良かったねえ！」

リリーは本当に安心した表情を浮かべている。

それに対してスバンはと言うと…

「全く、一体それだけ心配をさせれば気が済むんだ…」

とため息をつく。しかしそんな疲れた表情の中にもホッと安心した表情が隠れているのは本人ですら気付かなかった。

場所は変わって、ここはスカイの病室。スカイの病室には2人の人影が。

1人はスカイ、もう1人は

「ぶ、ブルーナどうした？」

先ほどとは違い、一度借りている宿に帰り私服に着替えて、ここに戻って来たらしい。

ブルーナは病室に入ってすぐの所でずっと俯いている。

「わ、忘れものか？」

ブルーナは何も答えなかった。

時間だけが過ぎてゆく。

スカイは気まずそうな顔になる。

と、そこで初めてブルーナに動きがあった。

「スカイ……」

その声はスカイにギリギリ届くものだった。

「な、何だ？」

よく見るとブルーナの身体が小刻みに震えているのが分かった。

「ど、どうしたんだッ！」

ベッドから降り、ブルーナの元へ駆け寄ろうとするスカイ。だが身体が言う事を聞かない。

「うッ」

壁にもたれかかるスカイ。その声を聞いてブルーナは顔を上げた。

ブルーナの瞳には涙が溜まっていた。

「だ、大丈夫？」

スカイに肩を貸すブルーナ。そこでスカイと目が合った。

「ようやく、顔を上げたな」

「えッ」

2人の間に無言が続いた。

「ま、まあとにかく横になって」

スカイをベッドまで運び、座らせた。

「ありがとな」

微笑んでくるスカイにブルーナも微笑んだ。

そして、先ほどまで溜まっていた感情が一気に溢れそうになる。

「無理、しないでよ…」

「ぶ、ブル」

突如、スカイは横倒しにされ、何かがスカイの上に。

「ぶ、ブルーナ!？」

「お願い、少しこのままでいさせて…」

スカイはブルーナのお願いを聞き入れ、そのままにした。当然スカイには下心など微塵もないが。

どのくらい時間が立ったのだろうか。スカイにとってはとても長い時間を感じた。

「ありがとっ、急にごめん…」

「いや、別にいいけど」

その後、ブルーナはスカイに膝枕をしてもらい、2人で夜空を見ていた。

スカイはブルーナの頭を何でか撫でた。ブルーナはもの凄く気持ち良さそうにしている。

次にブルーナを見た時には既にブルーナは寝ていた。

その寝顔はとても心地良さそうで、幸せに満ち溢れていた顔だった。スカイは記憶の後を辿ろうとした。

「俺は何故、生きているんだ…」

そう、ラッツとの最後の狩り。スカイはラッツが殺られて放心状態になっていた。そんな状態でディア亜種を狩れる訳がない。では、何で自分は生きている。スカイの心の中には疑問だけが残った。

記憶を辿る。ラッツが殺られた後の事。

「俺は」

頭痛が走る。スカイは両手で頭を押さえる。

「つぐあッ」

思いだそうとする度に走る頭痛。

「はぁ、はぁ、…俺の身に一体何があったと言っただ…」

第26話 出発前夜（後書き）

スカイ「明らかになって行く俺の真実」

リリー「スカイの過去には一体どんな秘密が隠されているのか!!」

スパン「その真実は今後をどう左右するのか!」

ブルーナ「次回モンスターハンター【覇気と力を持つ者達】」

スカイ「決意」

皆「お楽しみにッ!!」

第27話 決意

スカイがポツケ村を出て10ヶ月が経過していた。

ここはポツケ村。各地の村、街の村長達が集まり世界の異変についての会議を行っている。

「もう10ヶ月じゃ。スカイは果たして仲間を探しだす事が出来たのじゃろうか…」

「恐らく無理じゃろうな…1年で仲間を探し出すなど」

「しかし時間がないのも確か。今も尚、崩竜は大陸を移動しとるそうじゃ」

「しかもスカイ君は一回1人で崩竜に挑んだそうじゃないか。その闘いで致命傷を負ったとか…」

「…それでもワシらはスカイ君を信じるしかないんじゃ」

そう、ここにいる村長達だけではなく、全世界の人類はスカイを信じなければならぬ。

この世界でこの事態を、崩竜を倒せるのがスカイしかいないからだ。

「だあかあらあッ！一緒に旅をさせないとか、同行させないとかそういう問題じゃないんだよ！
今は一刻も早くポツケ村の戻って」

「そんな事、私の知った事ではない。この2人はスカイに大怪我を負わせたんだ。一緒にいさせる訳には」

「あれはリリーとスバンは悪くないんだ！俺が勝手に戦いに行つて、勝手に怪我を負ったんだ！」

火花を散らす2人の会話に、リリーとスバンは立ち尽くす事しか出来なかった。

2人にも責任感を与えるブルーナの言葉に対して、スカイはそれを

フォローするかのような言葉で、リリーとスバンに安心感を与える。ここはスカイが入院している312病室。

スカイは1ヶ月間も寝ていただけあって、怪我はもうほとんど回復していた。ブルーナの手術の腕もあってだが：

「スカイの怪我は私が手術した。私はお前にとっての命の恩人だぞ？少しは私の言う事を聞け！」

「この件が無事終わったらいくらでも聞いてやるよ！」
リリー、スバン、ブルーナが一斉にスカイを見る。

見られたスカイも「まずい事言ったか？」とおどおどする。病室に沈黙が続く。

その時扉のノック音が聞こえた。

「ちよつと失礼しますよお、頼まれていた服持って来ました…よ…？」

扉をノックしたのは看護婦さんだった。看護婦さんもこの場の空気の重さ気付き、服を渡し早々と病室を後にした。

そして、看護婦さんが病室を出てすぐ届け物が来た。

「失礼するニヤ！」

「失礼するのニヤ！」

そう言っ入って来たのは宅配アイルーだった。

宅配アイルーとは荷物を運んでくれるアイルーの事。名前のまんまだ。

「ああ、どうぞ。誰から分かるか？」

「はい、ポツケ村の村長様からですニヤ！」

「ですニヤー！」

「村長から？ありがとう、そこら辺に置いていてくれ」

「了解ですニヤ！」

「では、ここにサインを下さいニヤー！」

スカイは記入欄に渡されたボールペンで自分の名前を書いた。

「では、失礼しますニヤー！」

「しますニヤ！」

と一回お辞儀をして、2匹のアイルは病室を出て行った。
スカイに届けられたのは、少し大きめのダンボール。かなり重く、
2匹のアイルが持てたとは思えなかった。

4人、いや3人は興味津津だ。ブルーナを覗いた3人は。

スカイがダンボールを開けると、中に入っていたのは赤色の鎧。

「これは」

「レウス…X？」

今思えば、スカイの愛防具であるリオソウルZ（特注バージョン）
は崩竜との戦いで無残な姿になってしまい、修理しなければ使い物
にならない。いや、修理しても治らないレベルまで達している部分
もあるが。

「それは、私が村長に頼んで持って来てもらったんだ。スカイの事
だから、亜種の防具があるってことは原種の防具もあるだろうと思
つてな」

「さすがだな！幼馴染なだけはあるな」

と言われ少しだけ頬が赤くなるブルーナ。好きな人の満面の笑みを
見せつけられたら赤くなるのも無理もない。

その笑みをブルーナに1人占めにされ、ムツとするリリーとスバン。

（僕もスカイの為に結構頑張ってるんだけどなあ…）

（幼馴染と言うのはずるいものがあるな…）

「すぐにでも出発したい、すまないが少し病室を出ていてくれない
か」

「どうしてだ？」

「防具に着替えるからだよ。お前達も出発の準備は出来てるのか？」

「す、スカイ！？まさかスカイも参戦する気なの？」

「当たり前だろ？防具まであるんだ、いかな理理由がない」

「り、理由ならある。お前は怪我を負ってるんだ。無理する事はな
い」

2人はスカイの参戦に猛反対。

それもそのはずだ。万が一また致命傷を負ってしまえばスカイの身体が持たない。ましてや命を落としてしまつては…

大好きな人が死んでしまうのは本当につらい。これ以上、好きな人に危険な目に遭つてほしくないのだ。

その時、スカイは話し始めた。

「俺は1つ、決めた事があるんだ」

リリーとスバンは反論を止めスカイの話に耳を傾ける。

「記憶を取り戻して、ラッツの真実を知った。それでも尚俺は後悔してる。ラッツを救えなかつた事も何もかも…でも」

3人は真剣にスカイの話を聞いている。

「いつまでの後悔ばかりしてられないんだッ！

俺がラッツの分まで生きて、ラッツの命を無駄にするような行為だけは出来ないッ！

今回の件は俺達だけの問題じゃない。俺はもう1度死んでる身だ、この命を誰かの為に尽くせるような命にしたい。今がその時だと思
う」

そこまで言われたら言い返せる者などいるはずもなく…

「ここまで言つてるんだ、もう何を言つても聞かないと思つぞ？」

「そうだね、短い付き合いだけど僕にも分かるよ。もう無駄だつて
ね」

「私も同意見だ、だが無理はするなよ？」

「分かつてる、分かつたから病室を出てくれ。じゃないと着替えられないから」

そう言うところ人は何の抵抗もなく病室を出てくれた。

「さてつと、さっさと着替えるか…」

スカイが着替えている途中、病室前の廊下では3人の美少女が話し合いをしていた。

「言つておくが、私はまだあなた達を許した訳じゃないからな」

「うう…」

「私だつてお前を信用した訳じゃない、と言つてもあなたとはここでさよならだけどな」

「なッ!？」

「だつてそうだろう?あなたが同行する理由がない、理由もないし権利もない」

「…それもそうだな、私に権利なんて」

「権利なんか無くてもいいよッ!」

スバンとブルーナの口争いに終止符を打ったのはリリーだった。

「り、リリー?」

「ッ!？」

「理由や権利なんて無くてもいいんだよ、理由なら後で作ればいい、今はなんとなくでいいんだよ」

予想外の言葉にスバンとブルーナは言葉を失くす。

「スカイが寝てた時、ブルーナは少しだけ優しくしてくれたよね。その時、心が温かくなった気がしたんだ。だから僕もブルーナに少しだけ優しくする。ブルーナは嫌かもしれないけど、受け取ってほしい」

「…君は優しいな。私が許さないと云っているのに、こんな私に優しくしてくれるのか…」

ブルーナの口元に自然と笑みがこぼれる。

「はあ、全く…リリーは誰にでも優しいな」

一見、リリーに呆れているようにも見えたがそうではない。

リリーの心の広さに敬意さえ抱いているのだ。

その時、レウスXを装備したスカイが病室から出て来た。リオソウルZ同様、ヘルムは特注（バイザー仕様）になっている。

「うう、あまり落ち着かないが、我慢するか。じゃあ行くか?」

スカイは色々な手続きを済ませている間に3人は荷物の用意。

そしてスカイの手続きが終わると同時に3人の準備も整い、病院の

前に3人が見えた。

「はい、あ、はいはい、色々とお世話になりました。いえいえ、では」

スカイだけの声しか聞こえなくて、どう言う会話かは分からないが、スカイはこちらに向かって歩いて来た。

「みんないるよな？それじゃあ行くかッ！！」

行き先はスカイの故郷、4人は最終目的地であるポツケ村に歩み始めた。

第27話 決意（後書き）

スカイ「そろそろこの話、終盤に近付いて来たな」

リリー「じゃあ、もう終りなの？」

スバン「いや、【崩竜伝説】が終わっても続きがあるらしい」

ブルーナ「私が聞いたところによると今回の話よりも日常風景とかほのぼののシーンが増えて、作者的にも今後の話の方が楽しみらしいぞ？」

スカイ「それは楽しみだな！！」

リリー「ま、次のシーズンの事はさておき次回のモンスターハンタ

ー【覇気と力を持つ者達】は！！」

スバン「仲間を連れて」だ」

皆「お楽しみに」

第28話 仲間を連れて

モンスターと人々が生きるこの世界で、未だ嘗て無い危機が訪れていた。

天候は荒れ、モンスター達の生息地域が変化していた。

【太古の森】と言われている狩り場、『樹海』に生息する迅竜ナルガクルガが沼地や砂漠に生息している記録や、火山に生息する岩竜バサルモスが雪山に大量生息している記録がある。

火山の噴火が激しくなったり、雪山の雪が徐々に解け始めている。

この根源は神話に現れる伝説の竜の中の一体、崩竜ウカムルバスと言う竜。

その竜を倒すべく1人のハンターが動いた。

そのハンターは仲間を集め、そしてまた1つの伝説の始まりを告げようとしていた。

今はまだ、その伝説の始まり、切っ掛けに過ぎないが…

ここはポツケ村。季節問わず雪が積もっているこの村も、殆ど雪が溶けている。勿論、原因はあの竜だ。

そんな被害に遭っているポツケ村に一通の手紙が届いた。

「村長！スカイ・アレルドバークから手紙が届きました！」

「！？そうか、スカイは生きておったか！良かった良かった」

その言葉に村長は目を見開き、差し出された手紙を受け取った。目を見開いたのは、村長はスカイの消息が不明だったため。

村長は折られていた手紙を開き、書かれている文章を読み始めた。

「村長へ」

え、元気にしてますか？

俺は…まあ元気です。死にかけましたけどね。その件に関しては村

長も知っていると幸いですので、説明しません。
まあ、雑談はともかく用件を話します。

俺と同じ力を持った仲間と出会う事が出来ました。俺を含めて4人です。

まさかこんなに出会うとは思いませんでしたよ。

しかもそのうちの1人が幼馴染のブルーナだったんですよ。正直、
驚愕の嵐でした。

…意味分かりませぬ、すいません。

とにかくこの手紙が届く頃にポツケ村に着くと思います。

では、そう言う事で。

長文？失礼しました。

ついでに言うと、ブルーナを見て興奮するのはやめて下さいね。

最後のついで、記憶戻りました。
では。

～スカイ・アレルドバークと書

いて最強と読む男～

「…なんだこりゃ？」

手紙の内容がしょうもなく、ただただ呆れる村長。

だが、いくつが驚愕する部分もあったらしい。

「…そうか、ブルーナちゃんも力の持ち主だったのか…スカイの記憶ものお…そして何より」

村長がこの手紙で一番驚いたのは

「スカイ…こんな陽気な手紙を書けるようになったのか」

本人も知らずして村長は笑みを浮かべていた。そして内容に驚いた理由、それは

（あのクエスト以来、冗談は愚か、笑いすら忘れていたスカイがのう）

村長が手紙を読んで1時間ほど経った時、聞き覚えのある声がした。

「村長、今帰ったあ」

「おお、帰って来たか。短いようで長い旅じゃったのあ」
村長や村の人がスカイ達に駆け寄って来た。

「村長、お久しぶりです」

村長を呼んだのは

「おおッ！ブルーナちゃん！可愛くなったのう！」

そう言われて照れたブルーナは頬を若干赤らめた。

次に村長は、力を持った者全員に向けて言い放った。

「皆さん、長旅で疲れたじゃろうが今は時間がない。さっそく会議場へ来てくれ」

4人は村長に連れられ集会場の2階、今は会議場になっている場所に向かった。

いや、向かおうとした。

「何のために行くんですか？」

スカイが村長に尋ねた。

「何のためって、帰って来た報告と作戦会議」

村長がまだ説明してるのも関わらずスカイが割って入って来た。

「いいですよ、そんな事より出来れば出発を早くしたいので、今日は準備や身体を休めたりしたいのですが…？」

「そんな事って…スカイお前な」

と次はブルーナが割って入って来た。

「すいません村長、私もスカイの意見に賛成です。作戦なら道中でも考えれるし、今は時間ありません。スカイの意見が尤もだと思います」

村長は困った表情を浮かべていた。しかし、村長もスカイの意見が正しいと判断したのか、渋渋許可した。

「分かった、村長達にはワシから説明しておこう。しっかり身体を休めるのじゃぞ？それから」

「？」

スカイが頭上に疑問符を浮かべる。しかし、次の村長の言葉でスカイの表情が一変する。

「皆には申し訳ないのじゃが、今のとこ空き家がなくてのう、すまんがスカイの家に泊ってくれんかのお？」

「……え？」

「じゃあ、そう言うことじゃからのお」

村長は4人に背を向け手の甲をこちらに向け手を振って去って行った。

スカイ達4人はあまりの出来事に停止状態になった。

だが次の瞬間

「……ええええええええツ!!!!????????????」

4人の悲鳴がポケット村に響いた。

第28話 仲間を連れて（後書き）

スカイ「今日は少し短めだったな」

ブルーナ「そ、そうだね…」

スカイ「ん？ブルーナ口調何か変じゃねえか？」

ブルーナ「そ、そんな事無いよ？」

スカイ「心なしか頬も赤い気がするな？熱でもあるのか？」

ブルーナ「ぜ、全然平気だから！！それよりスカイ、次回予告は？」

スカイ「そ、そうだな。はい！次回のMH【覇気と力を持つ者達】は？」

スカイ・ブルーナ「騒動。お楽しみに」

スカイ「…何で手繋いでるんだ？」

ブルーナ「…／／／／」

第29話 騒動

「…決まっちゃった事をとやかく言うつもりはない。ないんだが…」

ここはスカイ宅。スカイ宅で今、1つの事件が起こっていた。

「何で、何でお前達は俺に密集してくるんだあぁッ!!」

リビングにある少し大きめのソファにスカイは座っていた。ただ座っていただけなのだ…

「座るところは他にもあるだろ？そこにも机を挟んで椅子は4つもある。それなのに何故俺の隣に座ろうと…うわあぁッ！ブルーナ抱きつくな！離れ…ちよッ…お、折れる、肋骨折れちゃうから、痛いッ」そう言うのとブルーナは抱きしめる力を少し緩めてくれた。スカイが座っているソファ、スカイの両サイドにはリリーとスバンが、後ろからはブルーナが大胆不敵にも抱きついている陣形だ。リリーとスバンはスカイの両手に抱きついている。

鈍感なスカイは今のこの状態が、一般人からしたらどれだけ幸せな事が、全く理解していない。

バカと言うか、哀れと言うか、男として情けないと言うか、呆れてものも言えない。

「スカイ…鈍感にも程があるよ？」

「え？」

リリーの問い掛けに疑問符を頭上に浮かべるスカイ。当然だ、鈍感なのだから。

スカイの返事に「ハア…」と溜め息を零すリリー。こんなにアタックしているのに全く相手にされないのだ、溜め息の一つも出て当然だ。

「スカイ、今自分がどんな状況下に置かれていると思うの？」

この質問をしたのはスバンだ。

普通なら「超幸せえ」「やべりーハッピーッ！」などと帰って来

ても可笑しくないのにスカイの答えは、

「えつと…ちよつと暑い、そして軽く苦しい…かな？」

だった。苦笑いを浮かべているところを見ると、「ちよつと」ではなく「だいぶ」、「軽く」ではなく「かなり」だと言つのが見え見えだ。

それを聞いた3人はより強く抱きしめ、より強く手を握った。

「うぎゃあああああ！や、やばい！真面目に折れるう！」

3人の表情はムツとしている。

「スカイのバカ…」

「まったく、恋する乙女の気持ちも分からんのか…」

「そう言う所は全く進歩していないな…」

乙女の咳きはスカイの悲鳴に掻き消され、誰にも届く事はなかった。

「まったく、俺が何をしたつて言うんだよ…」

誰にも聞かれていないと思つたスカイの咳きに返事があつた。

「何もしていないからダメなんだよ」

声のする方、後ろを振り向くとそのにはリリーがいた。

「ん？リリーお前、2階にいたんじゃ…2人は？」

リリーに問うと、まるでそう訊かれるのを知っていたかのような速さで答えた。

「スバンはお風呂で、ブルーナは村長に呼ばれて出て行つたよ」

「そっか…」

納得したのか、もう2人に関してはスカイはリリーに何も問わなかった。

「さっきの話だが、何も知らないからつてどういふ事なんだ？」

再びその話題に戻り、リリーは少しドキツとした。

「その、何て言うか、別にしてほしい訳じゃないけど、何も知らないのはやっぱり…」

ブツブツと何かを言っているリリー。その声はスカイには届かない程小さい。

「え？何？聞こえないぞ？」

そう言われ我に返ったのかリリーは、

「ま、まあそう言う鈍感なところもスカイらしくていいと思うんだけどね」

と笑みとスカイに見せながら言った。

「え？あ、そうか、ありがとう」

恐らくスカイは、何の事か理解できていない。とりあえずお礼、みたいな感じだろう。

その時ちょうど、村長の所からブルーナが帰って来て、ほぼ同時に脱衣室からスバンが出て来た。

「今上がったぞ。いい湯だった」

胸の辺りから大きめのタオルを巻いて、他のもう一枚のタオルで頭を拭きながら出て来たスバンが視界に入った瞬間、スバンに背を向けるスカイ。

「ば、バカ！そんな恰好でうるつくな！」

しかしスバンは恥じ入る様子も見せずに答えた。

「私は、スカイになら見られてもいいと思っている。どうせ将来的に私の全てを見せる事になるのだ、今見せても変わらないだろ？」

「は？い、意味分かんねえよ！いいから服着ろ！」

スバンが言った「将来的」。この言葉からすると、どうやらスバンはスカイと付き合う事を前提に話をしているらしい。もしくは何れスカイとそう言う行為をしようと思っているか。スバンは痴女なのかもしれない。

スバンははぶてた様子で2階へ行く階段を上ろうとする、するとスカイから「ちよつと待ってくれ」と声があった。

スバンは目を輝かせながらスカイの方を見る。

…だがスカイの言葉はスバンの気持ちを裏切るものだった。

「全員いるからちよつどいい、お前達3人は寝室で寝てくれ。寝室にはちよつど3つベッドがある。1つは小さいけどな」

その時1つの疑問が3人の脳裏を過った。

「スカイはどうするのだ？」

ブルーナがスカイに質問した。ブルーナが質問しなければリリーがスバンがしていたに違いない。

「俺はここで寝る、異性が同じ部屋で寝るのは嫌だろ？それに俺も気が引ける。そもそも女子をソファアールやそこら辺で寝させるのにも抵抗あるしな」

「そ、そんなのダメだよ。ここはスカイの家なんだから」

「そうだ、それに私達は女である前にハンターだ。寝る場所など気にしてはハンターの世界、生きていけない。私達の事は気にしなくていいからベッドで寝てくれ」

「2人の意見が最もだ、私達の事は気にしなくていい」
しかしスカイは自分の意見を曲げなかった。

「俺はいつのソファアールで寝てる。ベッドは使いたくないんだ、それに…」

スカイはそこで言葉を区切った。そして、

「いや、何でもない。いいからベッドで寝ろ。俺は風呂に行ってくる」

話しの続きが気になるころではあったがスカイは脱衣室に入り、中から鍵をした為話の続きを訊く事は出来なかった。

3人は既に入浴を済ませており、スカイに寝るよう言われた為寝室へと向かった。

スカイは入浴中、先ほどの話の続きを、自分だけが知る続きを思い返していた。

（あの3つのベッド、1つだけ小さいのが俺のでそのサイドにある2つは親のベッド、だなんて言えるかよ…使い辛くなるだろうし、あのベッド、リニューアルしてまだ2、3回しか使わなかったといえあの人、父さんのを使う奴が可哀相だからな…）

「父さん、母さん、何処行っただよ…」

スカイがお風呂から上がると、リビングには誰もいなかった。当然だ、明日は朝早くから出発する為出来るだけ早く寝たいのは皆一緒なのだ。それにスカイに寝ると言われたのもあるが…

スカイはある部屋に向かった。

その部屋の扉をあけると無数の武器が収納されていた。

ここは武器庫。武器を収めて置く部屋だ。

そしてスカイは銀色に輝く刀を持ちだした。

この刀はスカイの父であるグラウトが作った太刀、飛竜刀【黄金椿】。刃以外は銀色で統一されており、刃はと言うと金色に輝いている。グラウトがいない今、スカイがその刀を引き継いでいるのだ。

何故グラウトがいないのかと言うと…それはスカイにも分からない。スカイはその太刀を持ってリビングまで行くと砥石でその太刀を研ぎ始めた。

無言が続く静かな夜。太刀を研ぎ終わり鞘に納め、壁に立てて置く。時計を見ると短針は12を示していた。

しばらくの間、スカイは何も考えずにボーっとしていた。

すると、後ろから声がした。

「…スカイ？」

ハッと我に返ったスカイは後ろを振り向いた。そこに夜風に美しい金色の髪を靡かせながら心配そうにスカイを見ているリリーの姿があった。

「リリー、どうしたんだ？眠れないのか？」

「ま、まあそんなとこ。それよりスカイ大丈夫？ボーっとしてただけど？眠いなら寝た方が良いよ？」

「俺の事なら大丈夫、ありがとな」

「う、うん」

2人の間に沈黙が続く。

「まあ座れって」

その場の空気を打開したのはスカイだった。さっきは離れると言っていたのに、今は自分の横を座るように自分の横をポンポンと叩く。そしてリリーもそこに座る。

「…お前はさあ、俺より歳も低いのに頑張ってるよな」

「え？何が？」

「今回の件、行きたくないんじゃないか？」

「え？」

「まだ15だろ？後悔とかしてないか？」

「…してないよ」

突然リリーはスカイに手を掴まれた。

「でも、震えてるぞ？」

「うう…」

「怖いだろ？まだ15なんだ、そう思うのが普通だ。嫌なら行かなくてもいいんだぞ？」

「…」

スカイはリリーを抱きしめた。その行動にリリーはただただ驚く。

「え！？す、スカイ？何」

「責任を」

「ッ？」

「責任を感じてるのなら、悪かった。俺が無理矢理この戦いに巻き込んだせいで、お前に責任感を与えてしまった」

「…スカイ」

「お前は、責任を感じる事なんてないんだ。行きたくないなら言ってくれ、俺は何とも思わないから…」

「…スカイ、僕は後悔なんてしてないよ？」

「え？」

「だってこの旅に行かなかったら僕はスカイとすれ違うだけの関係になっただけ」

「…」

「スカイ、僕とスカイはまだ短い付き合いだけど分かった事がある

んだ」

「分かった事…？」

「僕ね…スカイの事が、スカイの事が…」

「え？」

「好きだよ」

「えッ!？」

「仲間としてじゃなくて、ハンターとしてじゃなくて、ただ純粹にスカイの事が好き」

「…でも俺は」

その時、スカイの唇にマシユマロのように柔らかい何か当たった。視界には真っ赤に染まったりりりの顔が入っている。

その柔らかいものの正体がりりりの唇である事はすぐに分かった。

「…スカイが僕の事をどう思ってるかは分からない、でもこの気持ちだけでも受け取ってほしい」

「あ、ああ…」

間の抜けた返事し出来ないスカイ。

再び2人の間に沈黙が続く。

そして再びその空気を打開したのもスカイだった。

「今すぐに、答えは出せない、出た答えが悪い結果かもしてないけど、答えが出るまで待っていてくれないか…？」

「…うん」

その後りりりは寢室に戻り、スカイも眠りについた。

第29話 騒動 (後書き)

スカイ「……」

リリー「……」

スパン「……」

ブルーナ「……」

????「次回『決選直前』、あと厚かましいかもしれませんが評価の方をして頂けるととても嬉しいです。じゃなくて作者が嬉しいと言っていたぞ!!! (汗)」

第30話 決戦直前（前書き）

スカイ「第一章の【崩竜伝説】も、残すところあと僅かだな」

ブルーナ「そうだな、二章からは日常風景やギャグ要素もあるらしいな」

スバン「いや、楽しみだな」

リリー「未来の事は置いて！」

全員「MH【覇気と力を持つ者達】始まりだ！」

第30話 決戦直前

「皆、準備は万全か？」

スカイは3人に確認を取る。3人はほぼ同時に頷いた。

「よし、行くぞ！」

4人はスカイ宅を後にした。

4人が向かった先はポツケ村の集会場。スカイ宅から3分くらいの場所に位置している。

集会場の入口の木製の扉を開くとそこにはポツケ村の村長とユクモ村の村長が4人を待っていた。

「村長おツ!!！」

リリーはポツケ村の村長の横にいるユクモ村の村長に飛び付いた。

「おおリリちゃん、久しぶり。長い旅じゃったのう」

村長は飛び込んで来たリリーを両手で優しく受け止める。

「お久しぶりです村長！」

リリーは村長に満面の笑みを見せた。

「この笑顔はワシの宝ものじゃ、よしよし」

そう言つて村長はリリーの頭を撫でた。

「えへへ」

リリーのその表情に他の3人とポツケ村の村長は自然と笑みが零れる。

世界に危機が迫っているとは到底思えない程の幸せな一時に思えた。こんな一時、もしかするともう味わえないかもしれない。だが時間がなかった。

「リリー、そろそろ」

リリーがスカイの方を見ると、「そろそろ」の続きを悟らせる表情を浮かべていた。

「村長、行ってくる！」

そう言つと2人の村長の表情が曇った。

そんな2人の表情を見たスカイは微笑んで2人に言った。

「大丈夫だよ村長。俺にはこんなに頼れる仲間がいる！それに村長も知ってるの通り俺は」

村長はその言葉を聞いて驚愕した。そんな言葉を今のスカイから訊けるとは…

「俺はグラウト・アレルドバークの息子だからな！」

今、グラウトは消息不明…とスカイには伝えられているが…村長は真実をスカイに教えていないのだ。

…いや、教えようにも教えられないのだ。なにせグラウトは

スカイの強気、そしてグラウトを尊敬している言葉を聞いて、村長達は思った。

（こいつなら…スカイ達ならやつてくれるじゃろう）と。

「じゃあ村長、今度こそ行ってくるよ」

「ああ、手続きは済ましておる。行って来い！そして必ずそこまで言い掛けると続きはスカイに持って行かれた。」

「生きて帰ってくる！俺の夢をこんなところで途絶えさせやしないさ！」

「夢…じゃと？」

「ああ、それは帰って来たら訊かせてやるよ」

スカイは村長に頬笑みを見せ、そう言った。

村長だけでなくその場にいた全員が気になっていた。まあ、あんな中途半端に言われると誰でも気になるのは普通な気がする。

スカイ達は出発口に向かった。スカイの腰には昨日の夜研いでいた飛竜刀【黄金椿】が携えられている。因みに太刀を腰に携えるハンターは恐らくスカイだけであろう…今は。

村長はスカイの姿がある人物と重ねていた。

（グラウト、お前の息子はお前にそっくりじゃ。スカイならやつてくれる。なにせお前の息子じゃからな。お前も見ておるか？自分の息子の生きる道を）

スカイの過去の話に出て来た剛速電車が手配されており、現在崩竜ウカムルバスが目撃されている極圏まで1時間半でいけるそうだ。その間、スカイは3人に自分が体験して得た情報を伝えた。

「ウカムルバス：大きさを言えばグラビモス2頭分はある。

攻撃は、顔の近くにいれば前足で攻撃してきて、離れていたら口から氷のビームみたいなものを放ってくる。その攻撃は氷の塊も一緒に飛ばしてくる。当たれば：命はない」

他にも一般的な突進だったり尻尾払いなどがある。スカイは自分が知っている攻撃を3人に全て話した。

目的地に近づくに連れてどんどん寒さが増していくのを自分の体で感じる。

そしていよいよ、運命の時は来た

「この道を真っ直ぐ行けば目撃されている場所に着くニヤ…」

「ありがとう。お前の顔、絶対に忘れないからな」

スカイはそのアイルーの頭を撫でた。

「またいつでも見れるのニヤ！スカイのだんニヤは生きて帰ってくるのニヤ！」

「ハハハ、そうだな。じゃあ一狩りしてくるよ、じゃあな！」

スカイがそう言うと4人はアイルーが言った道を真っ直ぐ進んだ。

「グアオオオオオオオオ！」

その白い巨躯は4人を睨みつけて咆哮した。今までに聞いた事のなほほどの大きさの咆哮。

その咆哮は氷の大地に亀裂を走らせた。

「この前は世話になったな…ウカムルバスよおツ!!」
スカイは太刀を抜き、白い巨躯に向かって走った。

第30話 決戦直前（後書き）

スカイ「いよいよ初まったな…」

リリー「うん、恐らく第一章はもう10話くらいで…もしかすると
もっと少なく終わってしまうかも…」

スパン「そこでだ！まだ気が早い第二章で『こんな話があつてほ
しい』とか『こんなキャラが出てほしい』などの意見があれば是非
コメントして下さい」

ブルーナ「他にも『○○○○編』的なものもあれば書いてくれ！待
ってるぞ！」

スカイ「あと、作者に言ってくれて頼まれたんだがこの作品のメ
インヒロインが誰がいいか、それも書いてくれると嬉しい…て言っ
てたが何の事なんだ？」

3人「…」

村長「次回『スカイの本気炸裂！』お楽しみにのお、カッカッカッ
カ」

第31話 スカイの本気炸裂

【白き神】と謳われた崩竜ウカムルバスにスカイは何の躊躇もなく正面から向かって行った。

他の3人も一斉に武器を構え、戦闘態勢に入った。

ブルーナは火炎弾を装填している。リリーとスバンは背負っている大剣の柄を片手で持ち、スカイの後を追う。

「オラッ！」

スカイは、シャベルのような形をしているウカムルバスの顎に一太刀浴びせた。

すると、その切り口からは【火】と言うよりも【炎】属性の攻撃効果が発動していた。

【火】属性は小爆発を起こすのだが、スカイの攻撃は僅かだがウカムルバスの鱗を【燃やして】いた。

これがスカイの持つ【火の力】なのだ。

「もう一発　！？つとお。危ない危ない」

スカイはもう一度続けて攻撃しようとしたが、ウカムルバスが腕でスカイを払おうとしてきた為、スカイは攻撃する事が出来ず、回避を取った。

次の瞬間、ウカムルバスの頭に次々と【火球】が直撃した。その数は3発。その火球はまるで、リオレウスが口から放つ火球のようだった。

（一体どこから…）

スカイは火球が飛んで来た方に目をやる。そこにはブルーナの姿が、そしてブルーナの構える銘火竜弩【緑桜】の銃口からは煙が。と言う事は

「今のは　」

「私がやった。火炎弾に私の力の炎をコーティングした【業火弾】だ」

業火弾。それは火炎弾速射で射出される寸前に火炎弾の周りを、ブルーナの【火の力】で出した炎でコーティングした弾。見た目はリオルス、リオレイアが放つ火球に似ており、破壊力は計り知れない。

その速射数は3発。一度に3発以上速射するとボウガンのメンテナンスが面倒な事になるらしい。それにボウガン自体へのダメージも大きくなる為もある。

スカイがブルーナに説明を受けている途中でもリリーとスバンの攻撃の嵐は止む事をしらない。

「おおおお……りゃッ！」

リリーは向かって左の後ろ脚に溜め斬りを浴びせる。

移動中スカイの説明を聞くと向かって左後ろ脚は攻撃も滅多にしていなかった。そこにいるものに攻撃する方法がウカムルバスの脳内にはないようだ。

その時、リリーがあるモーションに入った。旅の途中、ティガレックスに浴びせた技。

「雷剣」

リリーは再び溜め斬の態勢に入る。しかし、先程とはフォームが微妙に違う。

リリーの大剣が少しずつ青白く発光していくのが分かった。

「落としッ！！」

と同時にリリーは大剣をウカムルバスの脚に振り下ろした。

その瞬間ウカムルバスの脚に雷で出来た巨大な剣が落とされた。

そして蓄積されていたダメージもあってか、ウカムルバスは横向けに転倒した。

「今だ！ありったけの攻撃を叩きこめ！」

スカイはそう叫び、抜いていた太刀を鞘に納める。一見するとスカイがさぼっているように見える。

しかし、それは違い次の瞬間、スカイにはちゃんとプランがあった事と言う事を思わせる。

「リリーばかりにカツコいいところを持っていかせる訳にはいかねえな！」

（ここからウカムルバスまでの距離は：10〜15。いける！）

スカイは左手を鞘に添え、右手で太刀の柄を握る。そして軽く前傾姿勢になる、その為、踵かかとの部分は地面についていない。

「俺の実力を見せてやるッ！…炎一線」

そう言うときスカイの右腕全体が炎で覆われた。よく見ると踵の部分にも小さな丸い炎が付いている。

次の瞬間、その丸い炎は爆発し、その勢いでスカイはもの凄いスピードでウカムルバスに近づいて行く。

そしてウカムルバスまであと数メートルの所で抜刀。太刀も腕同様炎で覆われていた。

抜刀された太刀はウカムルバスの顎を切り裂き、そのまま勢いよく腹を斬り裂いて行く。

尻尾の先端部分まで到達しスカイは太刀を振り抜く。

「終炎百火」

そう言い終わるとスカイが斬った切り口から炎が噴き出した。

「ガアアアアアッ！」

斬り口を焼いた筈なのに斬り口からは血が止めどなく溢れている。

気付くと右腕と太刀を覆っていた炎がいつの間にか消えていた。だが右腕も太刀も焦げた痕跡など微塵もなかった。

当然か。自分も燃えるのだあれば使つてなどいない。

「ただだぜ」

スカイは再び太刀を鞘に納める。今度は何をするのかと思う矢先、スカイは太刀を使わなかった。

スカイはさつき同様炎の小爆風で一瞬でウカムルバスの腹の目の前へ。

とその時　スカイの左右の拳が炎に包まれた。

スカイは右手を後ろに引く。

「爆」

右手を勢い良く突き出す。その拳はウカムルバスの腹にめり込んだ。そして次は
バァーン

激しい効果音。スカイが殴った部分が火属性特有の爆発が起きた音だ。しかし通常の火属性攻撃とは威力が比べものにならない。

「炎」

次は左手。右手同様激しい爆発。

「正」

そしてまた右手。

だがフィニッシュは違った。両手を後ろに引き。同時に突き出す。

「拳ッ!!!」

今までにない爆発。その殴りは腹鱗を粉々に砕いた。

その技の衝撃でウカムルバスは僅かにスライドした。

「どんなもんだッ！」

誇らしげにスカイは言い放ったが右手を左手で押さえている。右手への負担が大きいのは確かなようだ。

それもそのはず。さっきの一撃も今の殴りも右手を使っている。負担が大きいのは当たり前だ。それにさっきの一撃は、腹を斬り裂いている最中、右手への抵抗は計り知れない。右手の疲労は相当なものだろう。

スカイはポーチから緑の液体が入ったビンを取り出した。

回復薬、疲労等の体力消費を回復してくれるアイテムだ。

スカイは回復薬を一気に飲み干すと、空になったビンを投げ捨てた。

「これで少しは楽になるだろ…さあまだ付き合ってもらおうぜ！」

スカイは抜刀してウカムルバスに斬りかかった。

3人が【力】をフルに活用している中、1人だけ【力】を使っていない力の持ち主がいた事にスカイはまだ気付いていなかった。

第31話 スカイの本気炸裂（後書き）

スカイ「少しづつ終わりに近付いているな」

リリー「うん…」

スカイ「おれどうしたリリー。元気ねえな。何かあったか？」

リリー「実はね、僕達が」

スカイ「すまないリリー。依頼が入って今すぐ行かねえといけなくなつた。話はまた今度な」

スタスタスタ…

リリー「…」

???「次回【解放】お楽しみに！」

第32話 解放

一体どれだけの時間が経っただろうか。

ウカムルバス崩竜からの攻撃は全くと言っていいほど受けていないが、彼らの持つ【力】は使うと同時に体力を消耗する。そのため、回復薬や回復薬グレートを使い、そのアイテムが底を尽きようとしていた。

1人を除いては、だが。

「はあ、はあ、スバン、お前体力の方は大丈夫なのか？」

接近戦であるスカイ、リリー、スバンは一度後退して体勢を立て直すと同時に、スカイがスバンに訊いた。

「え？」

「お前、何で【力】を発動させないんだ？」

「え？あ、それは…」

スバンが困ったように俯いていると

「来るぞ！」

ここは戦場、一瞬の油断が命取りになる。

スバンはウカムルバスがいる方を見る。すると、ウカムルバスの口からは白い冷気が漏れている。

この攻撃モーションは、最も危険な攻撃の予備動作。

「スバンッ！！早く逃げろ！」

だが、スバンは動かなかった。いや動けなかつた。良く見るとスバンの身体が小刻みに震えている。

自分の身に迫る死。ウカムルバス崩竜の威圧感とそれに対する恐怖。

（か、身体が言う事を利かない…私は本当に足手纏いだ…【力】持つかえないのに戦いに参加して…）

その時、ウカムルバスの口から冷凍光線が放出された。その冷線はもの凄いスピードでスバンに接近する。

（スカイ…すまなかつた…最後まで足を引っ張ってしまつて…さよな…）

突如、スバンは強い力で横に飛ばされた。

いや、飛ばされたと言うより、何かに抱き抱えられたまま横に動いている。

「お前つてやつは…ハンターだろ？」

スバンは声のする方を見上げる。そこにはスカイの特別仕様の頭が^{ヘルム}あった。我に返って良く見ると目の前にはスカイの防具であるレウスXの胸が、^{スイル}自分の腰にはスカイの腕が回してあるのがわかる。恐らく自分の後頭部に添えられてあるのもスカイの手だ、と自覚するスバン。

今の状況が理解出来た瞬間、顔がボンッと赤くなった。

しかし、頭を^{ヘルム}被っている為、ばれる事はない。高鳴る鼓動がスカイに伝わっているかもしれないが…

スカイはどうやら足の裏に炎を大量に溜め、先ほど使った小爆風を持续させているようだ。

「まったく、世話掛けさせやがって」

飛んでくる氷の塊を避けながらスバンに言った。

その言葉に『責めている』と言う言葉は感じられなかった。スカイは少しでもスバンに責任を負わせないためにも冗談のつもりで言っただけらしい。

「す、すまない…」

しかし、スバンは冗談に受け取れなかったらしい。より空気が重くなってしまった。

「じ、冗談だよ…」

渋渋フォローに入るスカイ。

ウカムルバスから大分離れたところでスバンを降ろす。

頭の中でスバンがガツカリした表情を浮かべたのは誰にも内緒だ。

「話を戻すが何で【力】を使わないんだ？」

再び俯くスバン。

「…言いたくないか？」

知られたくない過去は誰にでもある。スカイにもある、リリーやブ

ルーナにも恐らくあるだろう。

「まあ。言いたくなければ言わなくてもいいけど

」

突如スバンがブツブツと何かを呟いた。その声は目の前にいるスカイにすら聞こえないほど小さい。

「え？」

「リリーには話したんだが私は

」

「スカイとリリーは何してんの？」

黙々と狩りをしているリリーはチラチラと2人の方を見る。

「一番年下の僕が頑張ってるのに……」

リリーははあっと溜め息をつき、戦いに集中する。

リリーとは少し離れた場所でブルーナも援護という形で戦闘に参加していた。が、

（あの2人は一体何をしているんだ。世界の危機だと言っのに、呆れてものも言えん）

ブルーナは所持して来た火炎弾60発分を全て業火弾にして使いきり調査分の火炎弾を使用中。

（出来れば火炎弾を使いきる前には倒したいが無理だろうな）

と思いながらブルーナは業火弾を全てウカムルバスの顔面にヒットさせる。

「人を…殺めた？」

スカイはスバンに訊き直した。しかし帰ってくる答えは変わらない。

「…数年前、私はあるハンターに弟子入りしたんだ、そしてその師

匠に告げられた『お前には不思議な力がある』と…水属性値の少ない剣なのに私が使うと属性の威力が強いんだ。師匠が使っても何ともないのに…ある程度武器も【力】も使えるようになった私は師匠と一緒に狩りに行ったんだ。その狩りの最中に【力】が暴走して…師匠の…師匠の身体を…斬り裂いていたんだ…」

それを聞いたスカイは驚愕した。

そんな辛い過去を心に抱いたまま、これまで狩りをしてきたなんてこと思った。

スカイは急にスバンを抱き寄せた。

「なッ！？す、スカイ、何を」

「抱え込むんじゃねえよ」

「え？」

最初何を言ったのか聞き取れなかったが、その言葉は繰り返され、スバンの耳に入った。

「一人で抱え込むじゃねえよ！この言葉は俺が言える台詞じゃねえけどよ」

そう、同じような経験をしているスカイだからこそスバンの気持ちをつかかってあげられる。

同じような経験をしているスカイだから、その恐怖も分かり合えるし、その辛さも分かる。

「俺が一人で崩竜ウカムルバスに挑んで、負けて、死にかけて、運ばれて、目え覚まして、その時お前ら泣いてただろ？俺はその時思ったんだ、何で俺の為に泣いてくれてんだろうって。

その答えはきつと仲間だからだと思う、仲間が一人で悩んだり、悲しんだりするのって仲間からすると嫌なんだよな、だから俺はもう仲間に隠し事はしない、悩みがあったらお前達に相談するし、助けだって求める。だからよ」

スカイはスバンから1、2歩分離れ手を差し出す。

「？」

その差し出された手の意味がその言葉を聞いて初めて理解できた。

「お前も、仲間からの救いの手を素直に取れ。嫌な事も辛い事も解決したいなら全部、仲間を頼る事から始めるといい。一緒に解決しようとしてくれるのが仲間ってモンだろ？」

それを聞いて涙が溢れた。頭を脱ぎ自分の手で拭おうとしたらスカイが拭ってくれた。

「泣きたい時は泣けばいい、その涙は俺が拭ってやるから」
スバンの嗚咽が止むまでスカイはスバンの涙を拭った。

「クソツ！いい加減！倒れる！」

リリーは向かって左後ろ脚をずつと攻撃していた為、脚はグチャグチャだ。そんな足でも尚、この巨体を支えているとは、白き神と謳われるだけはある。

「あと…26発か。さっさとくたばれツ！！」

ブルーナのLBから放たれた3発の業火弾。全弾顔面に命中した。しかし死には至らず、ウカムルバスはブルーナを睨む。

「丁度いい、これを喰らってもらおうか！」

ブルーナはポーチから1つの玉を取りだした。それをウカムルバスに向かつて投げた。

その玉はウカムルバスの目の前で強い光を放った。

「閃光玉？」

リリーが呟いた。そう、今の玉は閃光玉と言って、強烈な光を発する手投げ玉の一種。

モンスターの目を眩ませる事が出来る。

「リリーッ！」

「分かってる！」

リリーは雷特有の活性化効果を使い一瞬でウカムルバスの目の前へ。そして溜め斬のモーションに入った。少しずつリリーの大剣が青白

なくなっていく。

あと数秒で『雷剣落とし』を炸裂させられる、その時だった。

「リリー！逃げろ！」

「え？」

リリーには見えなかった。溜め斬に集中し過ぎてウカムルバスの『尻尾』の動きが。

闇雲だがウカムルバスは尻尾で自分の周りにあるものを薙ぎ払おうとした。

そしてその尻尾はリリーに迫っていた。

（この距離間に合わない…ッ）

リリーは瞳を閉じた。だが溜めは止めない。

瞳を閉じた時真っ先に考えたのはスカイの事だった。

（スカイ…助けて…）

ズドオオオオオン

「ギイグアアアアア！？」

どれだけ時間が経っても尻尾がリリーに当たる事はなかった。

その事を不思議と思い、いつの間にか溜め斬を中断していた。瞳を開けるともがいている白い巨躯。

その少し左に切断された巨大な尻尾。

自分は生きている、と自覚したリリーは思った。

「助けてくれたのは…」

その答えはリリーが望む答えではなかった。

「残念ながら私だ」

リリーが振り向くを、そこには水で覆われた大剣を担ぐスバンの姿があった。

水で覆われた大剣、覆っている水自体が大きな剣の形をしていて、超大剣とでも言うべき姿だ。

遅れてスカイの登場。

「ちよつと2人とも、今まで何をしてたのさ！」

問われたスカイは素直に答えようとした。

「何ってスバンが【力】を」

しかしスバンが入って来てとんでもない事を話し始めた。

「いや何、スカイが疲れたと言うものだからご奉仕していたのだ。

私のこの胸と下にある〇〇〇を使って　痛ッ！」

スカイはスバンの頭にげんこつを一発入れた。

「これからって言う子供の前でどんな事を言っただお前は。

そんな事もしてないし、もう少し表現を濁らせる！」

スバンを叱りながらもスカイはホツとしていた。

(よかった、何か吹っ切れたようだな)

「そんな事よりも」

3人は同じ方を見る。遅れてブルーナも3人に合流し同じ方を見つめる。

「準備はいいか、決着を付けるぞッ！」

4人は暴れる巨躯に走り始めた。

第32話 解放（後書き）

スカイ「まったく…スバン、お前冗談が卑猥過ぎるぞ？」

スバン「す、すまない。調子に乗りすぎたようだ」

リリー「……」

スカイ「ほら見る、リリー黙っちまったじゃねえか」

ブルーナ「まったく、思春期の者はこれだから困る」

スカイ「お、おいブルーナ？近い、顔が近い！何？何が目的なの！？」

???「次回『覚醒』お楽しみに」

スカイ「前々から思ってたんだか、あんた誰？」

???「……」

第33話 覚醒

スバンが【力】を使いこなせるようになり、狩りはより安定を見せた。

背中の子の部分には亀裂が入り、特徴的な顎も数ヶ所割れている。狩りは益益終わりに近づく。

だが、簡単に終わらないのが狩りと言うもの。

人間はモンスターと違って脆く、そして儚い。こんな巨躯の攻撃を一度でも受けてしまえば、人間は簡単に死ぬ事が出来る。それが人間の運命さだめとも言える。

「うおおおおおッ！」

スカイの技、炎一線【終炎百火】による攻撃で、崩竜の横ビレに大きな裂け目が出来た。

スカイが納刀し崩竜に目を向けると、崩竜はスカイに向かって冷凍光線を放とうとしていた。

スカイはすかさず小爆風を起こし回避する。

しかし、攻撃は冷線だけではない。冷線によって抉れた氷地の氷の塊が4人を襲う。

スカイを除いた3人は難なく回避。しかしスカイは距離が近い為、直接飛んでくる氷の塊を避けるのには苦勞する。

3人には放物線を描いた氷の塊しか飛んでこないが、スカイのような近距離者は違う。氷の塊が自分に向かって一直線に飛んでくる時もあるのだ。

「っと！危ない危ない。流石に今のは死ぬかと思っただぜ」

と一息付いていると遠くの方から声が聞えて来た。

「スカイ、大丈夫？」

リリーの声だ。その声に心配している様子は窺えない。スカイがこの程度で死なない事を分かっているようだ。

「ああ、こっちは大丈夫だ、そっちは？」

リリーの言葉から焦りが感じられないので異常はないのだろうかと思いつつも念の為に訊いてみるスカイ。

「こっちも大丈夫！」

案の定の答えだった。安心したスカイは反撃に入る。

爆風で一気にウカムルバスの横に移動したスカイは左前脚を斬る。

「気」

まずは右上から左下へ。

「刃」

次は、反動を利用して左上から右下へ。

そしてフィニッシュはクロスに斬って振り下ろす。

「斬りッ！！」

暴れているのはスカイだけではない。

リリーとスバンは同じ脚に同時に溜め斬を浴びせる。

水と雷、相手にとっては最悪の攻撃だ。

ブルーナも業火弾を速射している。その弾は全弾顔面に命中している。

その時、今までには見せなかった攻撃をしてきた。

ガリガリガリガリガリッ

「も、潜った！？」

「クソ！とにかく走れ！」

地面が大きく揺れる。ウカムルバスが氷の地面の中を削りながら移動している証だ。

そして標的は

「わ、私か！！」

標的はブルーナだった。ブルーナを地中からヒレだけを出して追う崩竜。ブルーナがいくら逃げて崩竜の早さには勝てず、ヒレがすぐそこまで来ている。

「クソッ」

ブルーナの足元から白い巨躯が現れ、ブルーナは宙を舞う。

「ぶ、ブルーナツ!!」

「おい、リリー!?!」

リリーがブルーナの元に走り出した。スカイは勿論止めようとしたが活性化したリリーはスカイにはどうする事も出来ないスピードでブルーナの元へ走り出した。

「リリー! 止まれえええッ!!」

遅かった。ブルーナしか見えなかったリリーには崩竜など見ていなかった。

そのため、リリーは崩竜の前脚によるを受けた。

「ガハッ

ゴホッ

飛ばされたリリーは氷の壁に叩きつけられ動かなくなった。リリーの大剣はリリーのすぐそばに地面に突き刺さった。

2人のも死んではいけないだろうが、最悪の状況。

「リリー…リリーッ!!」

リリーに向かって走り出そうとするスバンを必死に止めるスカイ。

「バカかッ! リリーの二の舞になるつもりか!」

必死に止めるスカイ。それに反抗するスバン。

「うるさいッ、離せッ!」

「ガハッ…」

スバンはスカイの腹に殴りを一発叩きこんだ。叩きこまれたスカイは力を緩めてしまい、捕まえていたスバンはリリーの元へ走って行った。

「い、行くなあ…スバン…」

崩竜はそのシャベルのような顎を氷の地面に差し込み梃子てこの原理で氷の塊をスバンに向かって飛ばした。

「避けるおおッ!」

氷の塊は放物線を描きスバンに向かって落下した。

「グハアアアッ」

氷の塊はスバンには直撃はしなかったが、真後ろに落ちた為、氷の破片や衝撃で前に吹き飛ぶ。

災難な事に、棘状になった氷の欠片が防具を突き破ってスバンの足を貫通している。

絶望的過ぎるこの状況。まともに戦闘できるのはスカイだけ。

スカイはポーチから閃光玉を取りだし、崩竜に炸裂させた。

「ギャアアアオオツ!？」

「…少し黙ってる…」

低く、冷たい、恐怖を感じさせるような声で崩竜に言い放ったスカイは一瞬でスバンの元へ移動した。

「大丈夫か？」

スバンを背負いながら訊くと、小さい震えた声で答えた。

「すまない、本当にすまない…」

「反省してるならそれでいい、しっかりつかまってるよ？」

次に駆け寄ったのはリリー。頭を強打したことで意識を失っているらしい。

「気絶してるのか…まあいい」

リリーを右肩に担ぐスカイ。

その時、先ほど当てた閃光玉の効果が切れた。

「…もう一発喰らってる…」

崩竜に対する言葉はやはり低く、冷たい声。それを聞いてスバンは思った。

(私達が…スカイを怒られてしまった…全部…私達の責任だ…)

密かに罪悪感を抱くスバン。だが、その考えはスカイには見え見えだった。

が、今は急いでいる為慰める余裕などない。

急いでブルーナの元に駆け寄る。

「こいつも気絶してるな。参ったこりゃ、スバン」

「な、なんだ？」

「少しの間、支えてやる事が出来ないがいいか？恐らく10秒くらいだ」

「あ、ああ。分かった」

それを確認したスカイは「よし」と言つてブルーナを左肩に担ぐ。

「しつかり捕まってるよッ！」

スカイは猛スピードでBCへと向かった。ベースキャンプ

スバンは吹き飛ばされそうな身体を掴みあつた両手で力いっぱい支えた。

「よし着いた、じゃあお前達はここで寝ていてくれ」

傷が悪化する事はなかったが、流石に戦力にはなれないとスバンも分かつていた。それでも1人で行かせたくはなかった。愛する人、好意を寄せる人が怪我をしているのは見たくない、少しでも彼の力スカイになりたい、そう思つた。

「待つてくれ、私も行く」

「：何を言い出すかと思えば、その傷じゃ無理だろ？」

「うう：か、回復薬、いや、秘薬を飲めば」

「そのアイテム事自体に怪我を直す力はない。回復薬や秘薬は体力や打撲とかに効くだけ」

そう言われては返す言葉がない。スカイの言う通り、回復系アイテムには怪我を直す力はない。そんな力があればハンターはほぼ無敵だ。

黙りこみ俯くスバンにスカイは告げた。

「意識のあるお前には2人を見てやってほしい、それが今お前が出来る俺への1番の助けだ」

スカイは今の状況からは到底浮かべる事の出来ない笑顔を見せた。その笑顔はスバンを安心させ、スカイが頼んだ仕事を進んで受け持つてくれた。

「じゃあ行つてくるッ！」

「え、ま、待て」

スカイはスバンの言葉を聞かずに崩竜へと挑んで行つた

「さつきは仲間が世話になつたな……」

崩竜がスカイに気付く。

スカイの言葉から感じられるのは、憎しみと怒りだけ。

そんなスカイに臆することなく立ち向かう崩竜。スカイに向かって突進してきた。

「お前の命」

スカイは腰に携えた飛竜刀を抜き、切っ先を突進してくる崩竜に向けて言い放った。

「灰にしてやるよ」

その瞬間、スカイの周りを大量の炎が覆う。そしてその炎の色、赤色は徐々に蒼くなっていく。

しかし、崩竜も突進を止めない。そのままスカイに突っ込む。スカイとの距離10メートルを切っている。

突如炎の中から声が聞えた。

「稀炎」

スカイを覆っていた炎が消え、中にはスカイが。しか様子がおかしい。

姿形は何の変化もないが色に黒みが増したような、それに炎の色も防具と同じ色に変化している。

「バーストフレア稀炎飛翔ッ!!!」

炎で出来た翼が広がり、その熱風で崩竜は勢いを失くし、突進が止まった。

レウスXがリオソウルZの色のように蒼く、そして濃くなったこの防具、リオソルZXゼクスは、スキルもリオソウルZと殆ど変化はない。しかしあるスキルが付く。それは

「炎魂：炎を物体化させられる力を持つこの防具。それがリオソルZX。」

さあ本当の狩りは

スカイは特注のバイザー仕様のバイザーを降ろして告げた。

「ここからだッ！」

「スカイ：大丈夫なのか？」

2人を見守りながら思っていた。

（あの白き神と謳われた崩竜を1人で…）

だがスバンはポジティブに考える事にした。

「スカイならきつと成し遂げてくれるさ」

今の自分にはそう願う事しか出来ないのだから

崩竜の目の前、スカイは斬り上げを喰らわせる。その攻撃によって発生する炎の量は凄まじいほど。

スカイに崩竜の腕が振り下ろされる。だがスカイは炎の翼で受け止める。炎の翼によって止められた手は徐々に焦げ始める。

「グギャアアアアアアッ!？」

崩竜は2、3歩下がって冷線を吐こうとする。だがしかし

「遅いッ!！」

開けていた口を無理矢理閉めた。炎の翼で高く飛び、腕を炎でコーティングした炎拳。それも特大サイズ。そんな殴りを受ければ口を開けるなんて不可能に近い。

地面に降り立ったスカイに向かって崩竜は飛んで来た。あんな巨体で潰されたら跡形も無くなってしまふ。しかしスカイは潰された、いや正確に言えばスカイの『分身』が潰された。

「炎武者：炎で作った俺の分身だ」

スカイは人語が分かるはずの無い崩竜に教えた。勿論返事は返ってこない。

「そろそろ終わりにしよう、リオソウルZじゃないのにこの技を使った為か防具が悲鳴を上げている…それに、もうそろそろ帰らないとスバン達に殺されるからな…」

スカイはそう言っただ刀を鞘に納めた。

「炎一線」

スカイがもの凄いいスピードで距離を詰めようとしたその時、ノーモーションで冷線を放って来た。

「何ッ!？」

スカイは抜刀し、冷線を斬り裂く。だが、腕に掛る負担は半端なものではない。今にも腕が折れてしまいそうになる勢い。

徐々に勢いを失くす。翼をはためかせ勢いを付ける。

「こ、こりゃ無理かもな……」

諦めかけたその時スカイは自分が、自分の狩りをしていた事に気付いた。仲間を傷つけられ怒りに狂い我を失い、周りに事を考えていなかった。

（この狩りは俺の狩りじゃない、皆の狩りだ。俺がここで負ければ皆が負け、世界が終わる）

そう、この狩りはスカイだけの問題ではなく世界全体の狩りだと言う事に気付いた。

（何をしてたんだ俺は…俺は世界皆の代表。代表が弱気になってどおすんだよッ!）

「うおおおおおおおりゃあああああッ!！」

スカイは冷線を斬り裂き、飛翔した。

「これで終わりだ ああ ああッ!
!」

スカイは翼以外の炎を太刀に集中させた。

「炎月」

太刀を振ると三日月型の炎の斬撃は崩竜を襲った。

「紅蓮」

さらにもう一発放たれた。

「刃ッ!！」

最後の斬撃は太刀を纏っていた残りの炎を全て放った特大サイズの斬撃。

それは崩竜の首を切断し、爆発した。

その白い巨躯は力を失くしその場にひれ伏せ、動かなくなった。

そう、スカイは勝ったのだ。あの白き神と謳われた伝説の竜との戦いに勝ったのだ。

「俺は…勝った…のか…」

白い巨躯は絶命したと同時に、スカイもその場に倒れた。

最終話 別れ（前書き）

サブタイトルに『最終話』と記してありますが第二章もありますのでこの最終話はいくまで第一章のものと考えて下さい。

そして、これからMH【覇気と力を持つ者達】に未永く付き合ってもらえると作者からしても嬉しい限りです。
では！

第一章 最終話 『別れ』 スタート…

最終話 別れ

目を覚ませば、見慣れない白い天井が目に入ってきた。

身体を起こそうとすれば全身に走る激痛。そして右手の妙な違和感。辺りを見回すと、自分がベッドに寝ている事が分かり窓から入る日差しと涼しい風が朝である事を告げた。

窓から見た外の景色は…とにかく白い。山も家も道も、何もかもが雪で覆われていた。何処か見慣れた景色、そしてようやくここがポツケ村である事が分かった。

そして何故自分がここにいるのかを思い出そうとした。答えはすぐに分かった。

白き神・崩竜ウカムルバスとの死闘

戦っている最中の記憶が蘇る。仲間が瀕死状態に陥り、自分は【あの力】を解放した、その事は鮮明に覚えている。そして冷線を斬り裂き、そして崩竜の首を斬った。その後

「その後、どうなったんだっけ…？」

分からない、だか1つだけ…いや2つ、分かった事がある。まず1つ目、身体に走る激痛。激しい戦闘だったので…と言う理由もあるだろうがそれは激痛の1割分にも満たないだろう。原因は

「稀炎飛翔…のせいか…」

稀炎飛翔　スカイの本気と言っても過言ではない、【力】を最大限に使った技。

その技は、スカイの身体能力を活性化させるとともに『炎魂』を言うスキルを発動させる事が出来る、スカイの『覚醒状態』だ。

『炎魂』は炎を物体化させる事が出来るスキル、勿論通常の状態にすることも可能だ。

そしてこの稀炎飛翔の欠点…それは使用後の身体への重度の疲労。よってスカイもこの技を発動させることは滅多にない。

次に、分かった事の2つ目：それは

「世界を…護れたんだな」

その時、病室に誰かが入って来た。首を扉の方に向けるとそこに立っていたのは村長だった。

「村長…」

村長はスカイに歩み寄り、横に置いてある椅子に座った。

「身体の調子はどうじゃ？」

訊かれたスカイは苦笑いしながら答えた。

「全身痛くて動かせませんよ」

それを聞いた村長は大笑いした。

「さてはお又シ、『稀炎飛翔』を使ったの？」

村長にはまるで全てが見えているようだ。隠す気はないが、こつこつ簡単に当てられてしまつと…なにかいやな感じがしたスカイだった。

「なんで分かるんですか？」

「いやなに…そんな気がしたただけじゃ」

と言うと村長は微かに笑った。

「…：…：終わつた…：…：んですよね？」

スカイはが村長に確認を取る。正直言うと、まだ夢のような気がしているスカイ。

「終わつたんじゃよ…：世界の危機は…：お又シが終わらせたんじゃ」

帰って来た答えはスカイが思っていたものと一緒だった。

だが1つ修正を加えた。

「俺じゃないつすよ…：俺”達”が終わらせたんですよ…：」

（俺一人だと今回の敵、ウカムルバスは絶対に倒せていなかった…）スカイは窓から外を覗いた。首しか向けられないが。

またこれから平穏な日々を暮らせる。そう思うと自然と笑みが零れた。

そして　　笑顔のまま眠りについた。

3週間後。

「身体の方は大丈夫なのか？」

村長は毎日のようにお見舞いに来てくれた。

「スカイ！退院おめでと！」

「あんな事で3週間も入院とは、幼馴染として情けないばかりだ」

「そ、それ、どう言う事だよ……」

苦笑いを浮かべるスカイ。退院日だと言うのに嬉しくない……と言った表情をしている。

「おめでとっスカイ。そして、ありがとう」

「ありがとう？どういう意味だ？」

疑問符を浮かべる。『ありがとう』なんて言われるような事したか？とフル回転で脳の中を探る。だがスカイが答えを出す前に、スバンがその正体を告げた。

「今、こうして私達が話せているのも、痛みを感じるのも、笑えるのも、なさせないと思えるのも全部スカイのおかげだ。それにお礼を言っているのだ」

そう言われたスカイは首を振った。

「俺じゃなくて俺”達”、だろ？」

3人はスカイを見ていてプツと吹き出してしまった。

「何で、笑うんだよ？」

「本当に、スカイはスカイだな」

「どういう意味だよ……」

ここは病室48号室。

3人は皆、スカイよりも重傷で3人同じ部屋で入院している。当然の事ながらスカイは今日退院日、3人よりも早い退院だ。

「じゃあ俺は先に行くよ」

そう告げると何処となく寂しい表情を浮かべ3人。

「毎日見舞いに来い！絶対だぞ？いいな！」

「何で半強制的なんだよ…」

何故かは分からないが3人の顔に「毎日来てほしい」と書いてあるように見えたのは気のせいだろうか

「ああ、毎日来てやるよ！」

3人の表情が一変する。

「あ、ああ、どうせこの腕じゃ狩りには行けねえしな」

と言うとスカイは右腕を皆に見せた。未だにギブスが外れていない。崩竜戦の最後の攻防。

スカイは崩竜の冷線を斬り裂いていた時、腕には物体化した炎がコーティングしてあった為酷い方向に曲がったりする事はなかったが、炎が消え、ポツケ村に運ばれ医者が腕を見た時の表情は酷かったそう。その酷かった原因が碎けに碎けた右腕の骨。

医者から訊いたところによると長期間狩りは出来ないの事は当たり前。しかし狩りが出来なくなる恐れはないの事そう。だ。

「まあそうゆう事だ、また明日来るよ」

そう言い残しスカイは病室を出た。

スカイが病院を出ると、スカイは大勢の村人に拍手で迎えられた。何が何やら分からないスカイはその場に立ち尽くしていた。

立ち尽くしていると後ろから左肩をポンッと叩かれた。叩かれた方を見るとそこにいたのは村長。

「どうじゃ、ワシからのサプライズは？」

と言いながらニヤニヤしている。そこでようやく気付いた。

（村長、俺をお見舞いに来てたんじゃなくて退院日を聞きに来て、そのついでに見舞いに来た感じか！？）

スカイはハアッと溜め息を漏らした。

「俺は世界を救った英雄ですよ？」

「お！もしやするとワシのお見舞いの意図が読めたか？」

やっぱりかと思いつつ再び溜め息を漏らす。

「ハア、別に何かものが欲しいとかそう言うのじゃないですけど、何か腑に落ちないな…」

と言い残し、スカイは何処かに歩みを始めた。しかしまずはこの人込みを掻い潜らなくてはならない。

「ちょ、ちよつと通して下さい。と言うか通せ!!」

スカイは人込みを脱し、一目散にある場所へと走った。

スカイは荒い呼吸をしながらそこにいた。

ここはスクライの森の入り口にある『護りの樹』。

スカイは荒い呼吸のまま『護りの樹』に左手を当てた。

「…父さん、俺世界を救ったんだ…俺1人じゃないけどな…」

スカイはひとりでに話し始めた。その木に向かって…

その木に対する話は5分以上だった。

スカイは話し終わるとその木に向かって「じゃあな」と言い放って村に帰って行った。

そして月日は4ヶ月経ち、完全とは言わないが3人も無事退院した。3人の退院はスカイの時同様、大勢の村人が拍手で迎えてくれた。た。

一段落して4人はスカイ宅に向かった。

4人分の椅子があったので4人は机を囲むように座った。

「…長かったな」

「うん、本当に…」

徐徐に空気が重くなるのを感じた。

「3人はこれかたどうするんだ…?」

スカイは3人に訊いた。3人も薄々気づいていただろう。この質問をされると言う事を…

「私は…」

口を開いたのはブルーナだった。

「私はもう少し医療を学ぶ旅に出ようと思っている」

ブルーナは医療が出来るハンター。しかもその腕は医療都市ルットライマの医療技術にも劣らない。

「…そうか。2人は？」

スカイが2人の方を向いて問う。しかし2人は俯くばかり。

「…じゃあ俺からの意見を出してもいいか？」

俯いていた2人はスカイの方に目を向けた。

「まずスバン、お前は修行に出るといい」

「わ、私がか！？今回の狩りで不十分なところがあったか？」

スバンが身を乗り出したスカイに訊く。

「まあまあ落ち付け、何の修業かと言うと【力】を使いこなせるようにする為の修業だ」

「！？」

「お前は今回の狩りで【力】に対する恐怖が軽減したはずだ、だから次のステップだ、【力】使いこなせるようになればそこからは自分で決めるといい。専属ハンターになるのもよし、旅をするのもよし、自由に生きる！」

それを聞いたスバンは最初は悲しい表情を浮かべていたが、そうするべきだと自覚したのか、スカイがスバンに告げ終わると頷いた。

「次にリリー、お前の村のユクモ村だが」

リリーにはその言葉の続きが分かっていた。そうリリーの拠点であるユクモ村には

「専属ハンター、お前しかいないんだろ？」

俯くリリー。そう、ユクモ村には専属ハンターがリリーしかいないのだ。

「だからお前は村に帰るべきだ、それでもし村を任せれそうな専属

ハンターがユクモ村に来たら、スバンにも言ったが、自由に生きる
といい」

リリーの願い、スカイと一緒にいたいという願いは今叶いそうに
もないと分かったのか、リリーのスカイの言葉に頷いた。

「念の為に言うけど、俺はお前達の事が嫌いだから村を出て行って
ほしい訳じゃねえからな？」

焦りながら告げるとリリーとスバンは頬笑み「分かってるよ」「
と言り返した。

それを聞いて安心したスカイは、

「それでもまあ、今日は病み上がりだし、泊って行くといい。出発
は明日だ」

そう告げられた3人は飛び跳ねて喜んだ。

「また会えるかな…?」

リリーが心配そうに聞いて来た。

「会えるさ!きつと!」

そう聞いて安心したのかリリーの表情が明るくなるのを感じた。そ
してスカイに満面の笑みを見せた。

「それと…」

「ん、何だ?」

リリーが何やらもじもじしている。

「な、何でもない!!」

「そ、そうか。じゃあな、暇が出来たら会いに行くよ」

「ほ、ほんと!?!」

「ああ、絶対だ!」

スカイがそう告げると、リリーは頬を赤くして小さい声で、

「ありがとスカイ、大好きだよ」

と言って電車に乗った。

「…最後、何て言ったんだ？」

こいつ最低だ、聞き取れなかったらしい。まあ鈍感王のスカイならしかたがないか。

「スバンもブルーナも元気でな」

「うん、ありがとう、スカイも元気でな」

「私の知らない間に死んだ殺すからな！」

「おいおい、あの世に行っても殺されるのか俺は」と苦笑いしながら3人の出発を見届ける。

「元気でなああああ」

スカイは3人の乗った竜車が見えなくなるまで村長と一緒に手を振り続けた。

竜車が見えなくなると村長に今後の事を訊かれた。

「これからどうするのじゃ？」

「そうですねえ、腕が完全に治るまでもう少し掛りそうですからクレストには行けにですね、まあ久しぶりに帰って来たので、家の掃除と、街をぶらぶらしよかと…」

村長はその答えに納得したのか「そうか」とだけ言い残し、自宅に帰って行った。なにか冷たい気もするが、まあいいかとスカイも自宅に帰った。

スカイは知るよしもなかった。

もうすぐ、自分と人生を共にする、パートナーとあんな出会い方を
するなどと…

…そして、自分に迫る恐怖がすぐそこ

まで来ている事など

最終話 別れ（後書き）

スカイ「第一章終了!!」

リリー「次からは第二章がスタートだよ!」

スバン「第二章からは日常風景がてんこ盛りらしいな」

ブルーナ「それと悲しいお知らせ」

読者の皆様なら察しているでしょうが私達の登場シーンが極めて少なくなり　え?私とスバンは登場しない方針!?

スバン「そんなバカな!」

スカイ「ん?何やら騒いでるな…まあいつか!

次回MH【覇気と力を持つ者達】第二章第1話『出会い』お楽しみ
に
」

第一話 出会い

リリー達と別れ月日は2ヶ月経ち、スカイは平穏な日々を取り戻しつつあった。

腕もなんとか狩りが出来る程度に回復し、今日も上位のシヨウグンギザミを倒して、今はその帰り道。と言うよりそう既に家の前まで来ているのだが…

「ふう…今日も疲れたなあ、まだ上位のシヨウグンがやっとか…」
本来ならG級ハンターのスカイだが、まだ完全復帰とまでは行かなく、さつき言っていた通り上位のシヨウグンがやっとならしい。【力】を使えば余裕だろうが極力【力】は使わないようにしているらしい。何せ身体への負担は今のスカイにとっては重いらしく、村に帰ってこれない恐れがあるからだ。

スカイはキッチンへ行き、調理を始める。
今日は相当疲れているらしく、簡単に済ませ、脱衣室に入って行った。そろらくシャワーで済ます気だろう。

ここはポツケ村から遠く離れた村、アール村。

この村の1人の少女は一夜で全てを失った。その少女が見たのはあまりにも悲惨極まりない光景だった。

何の抵抗もなく父親の首が食い千切られ、一瞬にして母親や友達が灰と化す光景。

少女はただ物陰に隠れ見つからないよう願うばかりだった。

その願いは叶い、村を襲った赤い飛竜は飛び去って行った。

だが、そこに残ったのは灰と化した村や親、友達と哀れで無力な少女だけだった。

「いやあああああああッ!！」

少女は叫んだ、叫ばずにはいられなかった。赤い飛竜に対する憎しみと、自分に対する哀れさ、自分の周りに何時もいてくれた人に対する罪悪感。その3つの感情で胸が張り裂けそうになった少女はただただ、叫んだ…

髪をタオルで拭きながら脱衣室から出て来たスカイはふと窓から夜空を見上げた。

「何してるかな、あいつら…」

2ヶ月ほど前まで一緒に狩りをしていた仲間の事を思い出していた。

「……………寝るかな」

そう言つてスカイは腕の事も考えて寝慣れないベッドで寝た。

「今日の依頼はドスランポス2頭討伐かあ、昨日よりは楽な依頼だな」

今回の狩猟場はフィクル森丘。基本的安全な狩猟場だか鳥竜種モンスターが多く、棲み家を作っており、雑魚モンスターがいつも多発しているエリアが多い。

その狩猟場に向かう道中、スカイはある事に気付いた。

「…？焦げ臭い」

辺りを見渡すスカイ。すると左斜め前に大量の煙がモクモクと上がっている。

地図を広げると大体そこら辺には『フィクル村』と言う村が地図には描かれていた。

ここは森の中で、今スカイのいるところから直接村を確認する事は木が邪魔して出来ない。

村のある方に歩み寄るよスカイの目に飛び込んで来たのは見るも無残な光景だった。

家々は焦げ崩れ、人は部分が無い死体が多い。そこから中に血が飛び散っており、スカイは一目で確信した。

(モンスターによる襲撃ッ!!)

その村までスカイは走り、生き残りがいないか確認する。

「おおおおおいッ、誰かいないのかああッ！生きてたら返事しろおおッ!!」

しかし返事は返ってこなかった。スカイは拳を固く握った。

「俺が、腕を負傷してなければ…この村を襲ったモンスターを…狩猟していたかもしれないのに…」

スカイがそう言い残しその場を去ろうとした時、物陰からガサガサと言う物音が聞えて来た。

(モンスターッ!!)

スカイは腰の夜刀【月影】の柄を握る。

しかし物陰から出て来たのは、スカイとそう歳の変わらなそうな少女だった。

スカイは柄から手を離しその少女に駆け寄る。

「大丈夫か!!」

その少女の至る部分に煤が付いている。少女の綺麗な橙色の髪も煤で汚れている。

この村の生き残りなのは間違えなさそうだ。

「おい、大丈夫か？怪我してないか？」

少女は口を開かない。スカイの事も一行に見ようとしない。少女の瞳を覗きこむと髪と同様に橙色、しかしその瞳は生きる希望を失くしている、死んだ瞳をしていた。

「あ、俺の名前はスカイ・アレルドバーク。ここからちょっと離れたポツケ村でハンターをしている」

スカイが自己紹介しても少女は無反応だった。耳に入っているのかも疑わしいと思っていた時、少女の口が開いた。

「・・・エルア・・・」

「え？」

「・・・エルア・ウィーベルオ・・・」
それが少女の名前だろう。少女はスカイの元にギリギリ届く声で自分の名前だけを名乗り、他の事は一切口にしなかった。
改めてこの村の有り様を見渡した。

「クソッ！」

再び拳を固めたスカイ。その様子を見てエルアはスカイの顔を覗いた。スカイも少女を見た。

そこで初めて少女と目が合う。先ほどと変わりなく、死んだ目をしている。

目から視線が外れ、少女の今の状況を確認したところ、スカイはエルアに背中を向け辺りを見渡し、何かを探している。

そしてその何かを見つけそれを手に取りエルアを見ないように彼女に近づく。そしてそれを渡した。

彼女が受け取ったのは少し大きめの布切れだった。

「・・・？」

彼女は小さく首を傾げた。

「と、とにかく今はそれを巻いてる、色んなものが見えてるから・・・」

／／／／

エルアはまったく気に留めなかったと言う事を聞いて巻いてくれた。

「私・・・ ればいいの・・・？」

「え？」

エルアの声が小さ過ぎてスカイには聞き取れなかった。スカイはエルアに耳を近づける。

「私・・・ 何処に・・・ 帰ればいいの・・・？」

そう、彼女は今全てを失った状態だ。家も家族も友達も・・・

こんな少女を放っておいたら何をしてくるか分からない、それに悪い輩に捕まって無理矢理性的行為をされる恐れだってある。最近はその言う輩が多いからな・・・

（ならば俺に出来る事は ）

スカイはエルアの手を引き竜車へと向かった。

「…？」

「俺の家に来い」

エルアを無理矢理竜車に連れ込み竜車を180度回転させ、ポツケ村に向かわせた。

「す、スカイ君！？もう帰って来た

え？その子は？」

「クエスト失敗だ、悪いが急いでてな、話と手続きは後だ」

スカイはエルアを連れて早々に集会場を後にした。

スカイはエルアを自宅に連れ込み、ソファに座らせた。

「ちよつと、待っていてくれないか？すぐに戻ってくるから」

スカイはエルアの返事を聞く前に家を出た。エルアは最初はソファに座っていたがソファを汚してしまふのではないかと思いを
使って、スカイが出て行ってすぐ座るのを止め立つことにした。

その頃、スカイは村長宅を目指して走っていた。だが、村長宅に着く前に、フラフラしていた村長に会った。

「村長ッ！」

呼ばれて驚く村長。いつものノホホン顔は相変わらずだ。

「どうした？おヌシ、依頼に行ったんじゃ

「そ、それが

スカイは今日の出来事を全て村長に話した。

「そうか…それは災難じゃったな…それでそのエルアとやらは？」

「今は俺の家にいます」

「それで、どうする気じゃ？」

「…俺が面倒見ようと思います、と言っても1人でも無事やっていける程度になるまでですけど…」

「うむ…まあええじゃろう」

「いいんですか！？」

「ああ、それにここまで来て放っておけんしのお。困ったことがあ

れば何でも言え?」

「あ、ありがとうございます!」

そこでスカイは村長と別れ、自宅に歩みを始めた。

スカイ宅の扉を開けるとリビングが広がっていてそのリビングに彼女は立っていた。そして窓の外を見つめていた。

「ん?どうした?」

「私は…何処に帰ればいいのか?」

エルアは軽く首を傾げスカイに尋ねた。未だに死んだ目をしていて彼女を見てスカイの心は締め付けられるような気がした。

スカイはエルアに歩み寄り、そして、抱きしめた。

「お前は…エルアはもう…1人じゃない…お前の帰る場所はここだ

…」

「…ここ…?」

「ああ、村の事は本当に残念だった…お前の家はない…」

「

……………」

「でもなエルア

「?」

抱き寄せられたままエルアはスカイの方を見る。スカイの顔を覗く。

「今日からここがお前の新しい家だ!そして俺が新しいお前の家族だ!」

エルアの心の中の何かが解放されるような音がした気がした。

徐々にエルアの固まっていた表情が解けていく。

「…スカイ…温かい…」

だが、流石にまだ精神状況が整っていないのか片言だ。

それでもエルアは目を瞑りスカイの温もりが気持ちいいのか微笑んでいた。

第一話 出会い（後書き）

スカイ「ついに始まったぜ第二章！」

エルア「…そうね…」

スカイ「作者によるとエルアは話が進むにつれて明るいキャラになつて行かないぞ？」

エルア「・・・」

スカイ「…こりゃ参ったな…」

エルア「次回MH【覇気と力を持つ者達】第二話…『同じ痛みを知っているから』…」

スカイ「お楽しみに」

第二話 同じ痛みを知っているから

エルアと出会い、今日で三日目。スカイの中で問題視されていたエルアの服は、村長の奥さんが着ほど作ってくれてなんとか平穏な日常に近づいていた。

エルアも俺に対しては普通の言葉遣い…と言うか片言ではなくなつた為、距離が縮まった気がして、スカイは心の中で微かに喜んでいった。

それとエルアに1つだけ、指摘された事がある。それは

「ん？髪…か？」

髪…いつもは『レウスレイヤー』と言う髪型のスカイ。意識してその髪型にしているのではないらしいのだがエルアはこの髪型が気に入らないらしい。

「うん…その髪型、あの竜に…少し似てるから…」

エルアの故郷の村を襲つたのは恐らくリオレウスがリオレイアのことだから間違えないだろう。スカイの髪型がその竜の頭部の形に似ているというのだ。まあその竜をイメージした髪型なのだから似ているのは当然と言うべきだろう。

「そうか…意識してる訳じゃないんだか…いやなら仕方ないか」

と言ってスカイは机の上に放り投げられてあつたハンター情報誌『狩りに生きる』をパラパラとめくり、『狩りの中の美学』と言う連載ページを見る。

そのページは、お洒落に富んだ防具・武器・髪型・髪の色などについて纏められている。

スカイはその中でもピックアップされている『流行の髪型』という欄を見ている。

そしてお勧めの髪型が数種類挙げられてあるのを見てエルアにどの髪型が似合うか見てもらつた。

因みに挙げられていた髪型は、ハンターカット、ディアスタイル、

ドンドルマロング、モノレングス、レウスレイヤーの5つ。

「うーん、スカイに合うのは…この『ディアスタイル』とかどう？
エルアはその髪型を指さし、スカイに見せた。そしてスカイは自分
と合っているか頭の中で組み合わせる。」

「……まあ、いいか！じゃあこれにしよう」

しかし、合っているかどうかは自分では判断し難いのか、エルアの
意見を尊重し『ディアスタイル』にする事にした。

スカイはエルアと一緒に脱衣室に入り、洗面台の棚に置いてあった
ワックスで髪を弄り始めた。

元々レウスレイヤーとディアスタイルは形が似ていたのでそれほど
時間も掛らなかった。

「どうだ？それっぽくなつたか？」

「うん！スカイに似合ってるよ！」

スカイの髪型が変わっただけなのに、エルアは凄く喜んだ。笑みを
見せるほどに。

（村や家族があんな風になっちまってまだ3日目なのにこんな笑顔
が出来るなんて…）

スカイも悠然に笑みを零した。2人は脱衣室を出て、取り敢えずと
いった感じでソファアに座った。

スカイは何気なく窓から外を見た。スカイの目に映ったのは何処に
でもある平穏な町並み。働いている村人や、買い物をしている人、
散歩をしている人。ただただ平穏な時間。

「平和だな…」

何気なく呟いた。無意識に近い。何せついこの前まで世界の危機が
迫っていて、しかもその全責任を自分が背負っていたのだ。そう思
えるのは一般人にとって普通な事かもしれないがスカイにとっては
何よりも嬉しい事。

しかしその隣でスカイの言葉に苛立ちを思う少女がいた。

「平和…なのかな…」

「え？」

振り向くとそこには、身体を小刻みに震わし俯くエルアの姿が。

「どうした、エルア…」

スカイがそう尋ねると、エルアはスカイの顔を睨み強く言い放った。「今、私みたいにモンスターに襲われてる人や村があるかもしれないんだよ！」

その時スカイは気付いた。気付くのが遅いのだが。

エルアは3日前に村を襲われ家族を失い、幸せな気持ちではないのは当たり前。そんな彼女の前『平和』、つまり幸せを意味する言葉は禁句に等しい。スカイも分かっていた。しかし、遅かったのも事実。

「スカイには分からないでしょうね！一瞬で全てを失った私の気持ちなんて！」

その言葉にスカイは反応した。気付かぬ間にエルアは立ってスカイを怒鳴っていた。そして今、スカイも立ち上がりエルアに向き合った。

「…分かるさ」

「え？」

スカイは窓から何処となく空を見上げて、エルアに告げた。

「エルア…村や家族の事は忘れる」

その瞬間、スカイの頬を何かが叩いた。スカイは叩かれた勢いで顔が横に向く。そして自分の頬にてお当て前を向くと、涙目になったエルアの姿があった。スカイの頬を叩いたのはエルアだった。

「何で…何でそんな冷たい事言うの…？」

先ほどとは異なり、エルアの声は小さく弱弱しく変化していた。

エルアの質問にスカイは答えた。

「俺も、目の前で仲間を…親友を失くした」

「え？」

エルアは目を見開いて聞いた。驚きの表情を隠せない。スカイは話を続けた。

「その後の記憶は曖昧なのだが家に帰ったら両親ともいなくなっ

な。そして今もいないままで」

エルアは驚愕していた。目の前に自分と同じような道を歩んでいる人がいたなんて…と。

「だから、エルアの気持ちがあく分らない訳じゃないんだ。悲しみも辛さも痛さも分かる。だからこそ言ってる。家族の事は忘れた方がいい」

「…な、何で？」

「いなくなった家族の事を覚えてたら、いつも悲しくなるだろ？悲しくなつて辛くなつて…きつとそんな事、いなくなった親は望まないと思う。それに」

と言うとスカイ微笑んでエルアに言った。

「今のお前には俺がいる！」

エルアの心が一気に温かくなるのを感じた。3日前、スカイがエルアを出迎えてくれた時と同じ感覚に陥っていた。

「俺だけじゃない。村長や村人の皆、お前の事を見守ってくれる、家族みたいなもんだ」

涙が溢れそうになった。こんなに、温かくしてくれる人が、助けてくれる人がいるなんて…と。

いつの間にか、エルアはスカイに抱きついていた。スカイの胸に顔を埋めて嗚咽を繰り返すエルアを、スカイは優しく受け止めた。

エルアの嗚咽が止まったのは3分ほどしての事だった。

「あり…がと…」と告げるとエルアはスカイから離れた。そして再びソファアに座る2人。

色んな事があつた為、2人の間には沈黙が続く。

スカイがこの状況を打破しようと、脳をフル回転させ話題を探していたら

「スカイ…」

とエルアがこの状況を打破したのだ。名前を呼ばれスカイはエルアを見る。エルアは何かを決心した、そんな目をしていた。

「なんだ？」

とスカイが訊くと、返って来た返事はスカイを驚愕させるものだった。

「私、ハンターになる！」

第二話 同じ痛みを知っているから（後書き）

スカイ「俺は…」

エルア「…？」

スカイ「俺はこう言う日常風景系が好きなんだあ！正直狩りなんてどうでもいい！俺はホノボノしていたい！」

エルア「…次回MH

」

スカイ「あれスルー！？」

エルア「【覇気と力を持つ者達】第3話…『経験有り』」

スカイ「…お、お楽しみに…」

第三話 経験有り

スカイの顔が引きつっているのは言うまでもないだろう。

突然の告白に動揺を隠せないスカイ、そんなスカイ笑みを見せるエルア。

「は、ハンターになるッ!？」

「だ、だめ…?」

(こんちきしょッ! そんな上目遣いで俺を見るんじゃねえッ!)

とかなんとか思うスカイ。そんな事はともかくスカイはエルアがハンターになるのは反対だった。

それが普通だろう。スカイがエルアの師匠になっただとしても、エルア本人の素質、才能に左右される職業。それにエルアは村をモンスターに襲われている為、モンスターに対する恐怖を持っている可能性が極めて高い。狩り場に行つてモンスターと遭遇して動けなくなる事も考えられるからだ。

「いや、しかしな…言葉で言うのは簡単だが実際は狩りはもの凄く危険なもので」

スカイが反対の意見を言っている途中なのだがエルアは無視し、衝撃の一言をスカイに告げた。

「でも私、ずっと前だけど狩りの経験あるよ?」

それを聞き、スカイは目を大きく見開き驚愕する。

「な、なにイツ!？」

再びスカイに笑みを見せつけるエルア。その笑顔にどういう意味が込められているのかは分からないが、その笑顔で、何故かは分からないがエルアが嘘を言っているようには感じられなかった。

「本当だよ? えつと…ドスランプスつてモンスターなら倒した事もあるし」

「…本当なんだな?」

再確認するスカイ。だが実際スカイは嘘とは微塵も思っていない。

スカイが確認したのは

「本当にハンターになるんだな？」

そう尋ねられたエルアは真剣な表情へと一変する。その表情に迷いは感じられない。

「…うん」

「2つほど…訊いていいか？」

首を傾げるエルア。

「なに？」

「まず1つ目。どうやってハンターになり、何でハンターをしていなかったんだ？」

一応つといた感じの質問。ハンター訓練養成学校の出なら止める理由がなくなる。逆に学校の出なら、何故ハンターをしていなかったのか…と言う疑問が生まれてくる。

そして、独学ならば教える事が細かくなって面倒。そこら辺を知っておきたいが為の質問。

「どうやって？お父さんが教えてくれてハンターになった。だから基本的な知識みたいなのはある程度知ってるよ」

なるほど、とスカイは思った。だから村を襲われた時、危機を凌ぐ事が出来たのだろう。エルアは話を続けた。

「辞めた理由は、狩りをする理由が無かったから」

スカイは首を傾げ、頭上に疑問符を浮かべた。

「理由が無かったから？」

そう訊くとエルアは素直に頷いた。

「うん、お父さんに訊かれたの。何で狩りをするのかって。よく考えると自分でも何で狩りをしてるんだろって思って、それから狩りはしてないの」

なるほど、と思った。そして今のエルアは昔の自分に似ているとも思った。そう思っていると自然と笑みが零れた。

「なんで笑ってるの？」

スカイは誤魔化す理由などなかったが、エルアの質問に答えずに誤

魔化した。

「いやいや、何でもない。じゃあ次の質問だ、何でまたハンターになろうと思ったんだ？」

そう尋ねるとエルアは頬を赤らめ、俯いた。

「ん？どうした？」

先ほどからモジモジが絶えないエルア。何故エルアがモジモジしているのかスカイは分からない。

勘のいい奴ならこの時点でも察しているだろうが相手はあのスカイ。鈍感極まりないスカイが気付くはずもない。

「スカイと……」

スカイの耳にギリギリ届く小さくて細い声。

「スカイと……一緒にになりたいから」

表現が軽く卑猥な感じがするが触れないでおこう。エルアがスカイの顔を上目遣いで見上げると、スカイの頬は微かに赤くなっていた。

「俺と……？」

「うん……」

照れくさそうに答えるエルア。それがまた愛嬌ある仕草。大抵の男ならコロツとイッしまうだろう。

おっと、表現がよろしくなかったか。まあ置いといて。

「……まあ別に経験があるなら否定する理由もないし、最悪俺も付いてる。ハンターになる事を認めるよ」

観念したのか、スカイはエルアがハンターになる事を認めた。

「本当に!？」

「ああ、だがもし危ない目にあつたら俺を」

突如スカイは何かによって押し倒された、と言っても何に押し倒されたのかスカイも分かつてはいるのだが。

「ちょ、え、エルア!？」

「ありがとうッ！」

その時のエルアの表情はとても幸せに満ちた、今までスカイに見せた中で最も男への威力抜群な笑顔だった。

…… エルアの豊富な胸がスカイに押し当てられ、それに気付いたスカイは顔がボンッと一気に赤くなった。

「エルア、ちょっと一回離れる！な？なッ？」

しかしエルアは一向に離れなかった。エルアが離れないと言う事はエルアの豊富な胸もまた離れないと言う事。スカイは思考がクラクラしていた。

（な、なんだ、俺の胸部に擦り当てられている柔らかい2つのものは……でも嫌な気分じゃ）

そこで我に返る事が出来たスカイ。エルはの肩を押し、一旦エルアを自分から離れた。

（何を考えてるんだ俺は！最低か俺は！俺はそんな目的でエルアを家に呼んだんじゃない。落ち着け、落ちつけ俺！）

「カイ？」

思考を取り戻したスカイはエルアが何か言っている事に今気づいた。

「スカイ？どうしたの？顔赤いよ？大丈夫？」

一度深呼吸をし、落ち着きを取り戻したスカイは冷静にエルアに答えた。

「大丈夫、ありがとな」

そう言つて頭一個分小さいエルアの頭を撫でる。エルアは目を細め、気持ち良さそうにしている。

「あ、そうそう。エルアがハンターになるらな用意するものとか買わねえとな」

「なに？用意するものって？」

「なにつて防具や武器だろ、普通。」

と言う事で2人は武器屋に向かった。

第三話 経験有り（後書き）

スカイ「今回もちよつと短かったな」

エルア「そうだね」

スカイ「名前聞いた時に思ったんだが、エルアの名前と俺の母さんの名前似てるんだよな」

エルア「そうなんだ、まあそんな事はさておき！」

スカイ「次回MH【覇気と力を持つ者達】第四話『訓練』」

エルア・スカイ「お楽しみに」

第四話 訓練（前書き）

最近 誤字や脱字が多いですね
え？最近じゃなくて最初から？

そうでした（汗）

すいません、今後はそう言うのが無いように気を付けますので…

それと、厚かましいのですが「評価」や「感想」等を頂けると嬉しいです（泣）

では！スタート！！

第四話 訓練

スカイとエルアは武具屋に行きハンターシリーズ一式と片手剣であるハンターカリングを買って、一度家に戻った。

武具屋に向かう道中、エルアに訊くと昔は片手剣を使っていたらしい。

まあ、こんな小さな身体で太刀や大剣、ハンマーや狩猟笛は不向きなのは当然と言える。

それにこんな可愛い少女がそんなものを持っているのなんて想像もしたくない、と全世界の男（スカイを除いて）は思うに違いない。

2人がスカイ宅に着き、数分後に武具屋のおじさんが訪れた。スカイはこのおじさんのことをおっちゃんと呼んでいる。

「スカイ、お届け物だ」

「おっちゃん、遅いぞ」

スカイはノックされた扉を開けると扉の前にいた武具屋のおっちゃんに、腕組みをして仁王立ちを見せた。

「まあまあ怒らないでくれ」

おっちゃんはスカイに両方の掌を見せ、怒りを堪えるように頼む。

まあ、実際スカイは言うほど怒っていないのだが。おっちゃんもそれを知った上で頼んでいる。その証拠におっちゃんの表情から反省の色は見えず、笑みを浮かべているのだけ確認できる。

「…それで、持って来てくれたのか？」

スカイは呆れた表情を浮かべながらおっちゃんに訊いた。その言葉におっちゃんの表情は更に笑みを増した。そしてスカイに自分の後ろの荷車を見せつける。

「当たり前だ！じゃねえとこんな家になんて来ねえよ」

その言葉に反応したスカイ。こめかみの所に青筋を立て、意図の掴めない笑みを浮かべている。

「なん…だとおおッ！」

スカイの怒りが爆発しそうになったが、怒るのもバカバカしく感じたのか、その怒りを何にもぶつけずに自分の中で抑制した。

「ふう…どうでもいいがそっちのお譲ちゃんは誰だ？」

どうでもいいって…と思ったスカイ。おっちゃんは自分から目を逸らし奥のソファアがある方を指さした。

思った通りそこにはソファアが。そしてそのソファアに座ってこちらに視線を向けているエルアの姿。おっちゃんが言っているのはエルアの事だろうと思ったスカイは「面倒臭い」といった感じでエルアの紹介を始めた。

「はあ…彼女はエルア。いろいろあつて今は俺は面倒を見てやってるんだ」

「ほお、しかし可愛い譲ちゃんだな、おっい、俺が面倒見てやろうか？」

とエルアに向けた声はエルアに届いただろうが返事は返ってこなかった。エルアはまだスカイ以外の人物との接し方…と言うより態度・言葉遣いが整っていないのだ。理由は…言うまでもないだろう。

「バカツ！…あまり茶化すんじゃねえ。エルアは今、精神状態が整ってないんだよ」

スカイはおっちゃんの頭を叩き、エルアに聞こえないようにおっちゃんの耳元でそのことを話す。

「精神状態が？…まさかツ、レイプか！？」

「ち、違つツ！！その歳で、しかも真顔でよくそんな事が言えたな…」

スカイが顔を真っ赤にしながら否定した。そしてチラッとエルアの方に目をやる。エルアはソファアに座ったまま窓の外の景色を見ていて、恐らく聞かれていないだろうと安堵の息を漏らした。

「そう言う事を大きい声で言うな、特にエルアの前では。じゃあ届け物は貰ったからあんたはさっさと帰れ。あんたがここにいと色々迷惑だし、悪影響なんだよ！」

「へいへい、それと」

リビングに戻ろうと、おっちゃんに背を向けていたスカイは振り返る。

「なんだ、まだ何かあんのか？」

「あの防具はもう少し時間が掛りそうだ。だが、時期に直るから心配はしなくていい」

その言葉を訊いたスカイの表情が一瞬和らいだように見えたのは気のせいではないだろう。

しかし、スカイの言葉はまるでその事に何の感情も抱いていないように素っ気なかった。

「そうか…」

そう言い放ってスカイは再びおっちゃんに背を向けエルアが座っているソファアに向かった。

「…素直じゃねえな」

とだけ言い残し、おっちゃんは荷車を曳ひき武具屋に戻って行った。

「どうだ？もう出てもいいか？」

「う、うん。いいよ」

エルアが防具を装備するためにスカイは脱衣室へと閉じ込められたのだ。

そしてスカイがリビングに戻るとそこにはハンターシリーズを装備したエルアの姿が。頭ヘルムは被かつていないが…

露わになっているエルアの顔は何故か微かに赤くなっていた。

「ど、どう？似合ってる…？」

「ん？ああ、似合ってるぞ。エルアは何着ても可愛いな」

突然の告白にエルアの顔は一気に赤く染まった。スカイの顔は照れた様子もなく、ただエルアに微笑みを見せていた。

恐らくスカイの言った言葉に深い意味などないのだろう。だがエルアは

「えッ!? あ、ええつと…す、スカイのバカッ!!! / / / /」

嬉しくて仕方がないのだ。

「なんでだよッ!!!」

エルアはスカイの胸をポコポコと叩いていた。その行動は全世界の男たちに愛嬌とは何かを認識させた。

こんな美少女が顔を真っ赤にしてそんな行動をとつたら…今にも何もかもが爆発しそうになる。しかしそんな攻撃をスカイは難なくスルー出来る…いや、スルーしたことにすら気付かないスキル、『鈍感王』を持っている。ダメージなど0に近い

そう、近い。0ではないのだ。

ポコポコと叩いているエルアには見えていないが、スカイは微かに頬を染めて、そこをポリポリと掻いていた。

「まあまあ落ち着け、エルアの装備も出来たことだし、早速狩りに行くか!」

「…うん!」

これでスカイに少し近づけた気がしてエルアは心の中で喜んでいた。しかしふと疑問に思った。それは

(なんでスカイと一緒になれたら嬉しいんだろう?)

と。自分では気付いていなかったのだ。これが『恋』なのだということに。

「おい、何してんだ。さっさと行くぞ」

「え? ちょっと待ってよお」

エルアはそんな疑問を抱いたままスカイ宅を後にした。

「ちょ、ちよつとスカイ君ッ!」

「な、何だよいきなり」

そう声を掛けてきたのはGMキルトマネージャーだった。いきなり怒鳴られたスカイは

オドオドしている。

そしてスカイの後ろにいるエルアはスカイの防具の腰部分をしっかりと握っていた。スカイと2人きり以外の所では未だどういう対応をしているのかが分からないのだ。だから、ただただスカイに付いて行くだけ。

「何ってあんた…最近全然来なかったから…それにその娘は？」

「あゝ、いや、いろいろあつてだな…」

と、スカイは困った表情を浮かべながら頬をポリポリと掻いた。そして肩越しにエルアを見る。相変わらず家以外では無表情なところにハアと溜め息をつく。

「エルア、少しの間ここに座っていてくれないか？すぐ戻るから」
そう言つてスカイはエルアをカウンターの近くにある椅子に座らせた。

スカイはGMに訳を話した。

「そう、それは大変だったわね…」

「ああ、それで一先ず俺があいつを預かってるってわけだ」

「どうするのよ、これから」

「……あいつが一人前になるまでは俺が面倒を見るつもりだ」

「…一人前になったら…？」

2人の会話は誰にも聞かれてはいないが深刻な話をしているというのは離れていても分かるほど重い空気が流れている。

スカイは言葉を詰まらせていた。スカイが今言おうとしている言葉、本人もこの事には躊躇いを抱いているらしい。本当ならこんなことはしたくない、そんな顔だ。

「…あいつが一人前になったら俺の役目はそこで終わりだ。あいつとは逢わないように」

「それってあんまりじゃないッ！一緒にいてあげればいいじゃない。別れる理由なんて」

「わかつてるよそんなこと。酷いことだなんて俺が一番分かってる…でも俺はあいつの近くにいちやいけななんだ…」

「…どういうこと？」

「……………これはまだ今度話すよ。それより今は狩りだ！！」
そう言っつてスカイはエルアの方に戻って行った。

「待たせたな」

「…ううん…大丈夫…」

やはり暗いな、とスカイは苦笑いを浮かべた。まあこれも仕方ないかと自分に言い聞かせ、スカイはエルアの手を取りクエストボードへと向かった。

「え〜と…おつ、最初はこんなモンでいいか」

と、スカイは1枚の依頼書を取り、GMの元に持って行った。

「このギアノス5頭討伐依頼のクエストを頼む」

「はい、了解しました。参加人数は2名でよろしいですか？」

「ああ」

GMは参加人数欄に「2」と記入した。2人の会話、先ほどまであんな深刻な話をしていたとは到底思えない。

「はいでは、手続きの方終わりましたのであちらの出発口から

」

「はいはい、じゃあ行ってくる。エルア行くぞ」

「…うん」

「…ってまだ途中ツ！！」

2人はGMのお叱りの言葉を聞き流しながら出発口へと向かった。

「着いたぞお、やっぱりここは近くていいな」

「…ここ？」

ここはフルークック雪山。ポツ気村から一番近い狩り場だ。今日はここでギアノス5頭を討伐する依頼。

「じゃあ早速行くか…とその前に支給品ボックスだったか」

支給品ボックスとはギルドが支給してくれたアイテムが入っているボックス。そのアイテムの殆どをエルアに渡した。

「…スカイはいいの？」

「…ここであんなに普通の話し方はできるのか？」

「…ごめん」

「あゝ！！すまん、俺が悪かったからそんなに落ち込むな。それに俺は一応G級ハンターだから大丈夫だ」

そう言うのと安心したのか、エルアは微笑みを見せアイテムをポーチに詰め始めた。

「それじゃあ、行くか！！」

その言葉にエルアは頷いた。そして2人は地図で言うエリア1を指して歩み始めたのだった。

第四話 訓練（後書き）

スカイ「次回から狩りが始めまるな」

エルア「そう…だね」

スカイ「おお！少しはちゃんと話せるようになったな。偉いぞエルア」

ナデナデ

エルア「エヘヘッ」

スカイ「はい、そんな感じで次回MH【覇気と力を持つ者達】第五話」

エルア「『頑張る』」

スカイ・エルア「お楽しみに」

第五話 頑張る（前書き）

この小説をご覧になっていらっしゃる方、長い間本当にすいませんでした！
いろいろと忙しくなかなか更新する事が出来ませんでした。

これからは大丈夫だと思うのでこれからも見て頂けると嬉しいです
では最新話、スタートです！

第五話 頑張る

エリア1はBCから5分ほどの所に位置している。

エリア1は肉食系モンスターは存在しない。稀に飛竜が飛んで来ることを除いてだが。

このエリアは主に草食系モンスターや昆虫系のモンスターが存在する。まあ所謂肩慣らし程度の狩りをするエリアだ。

「まあ、あそこにいるポポでも狩ってみろ」

スカイが指をさしたポポはまだ子供でこちらには気付いていない。

ポポとは草食モンスターを代表するモンスター。ハンターを攻撃することは滅多になく、大抵は逃げてしまう。

「わかった！」

そう言うところエルアはヘルムを被り、腰に携えてある片手剣の柄を握りながら走って行った。

それをスカイは高みの見物と言わんばかりに見ている。

「おらああああ！」

エルアは剣を抜き、ポポにジャンプ斬りを浴びせた。

その斬り口からは微量の血が噴き出た。毛も濃く皮の厚いポポには今のエルアの武器ではその程度とスカイは読んでいて、その

通りの結果だったことにスカイは軽く頷く。

ふとエルアの方を見るとエルアは固まって動かない。いや、小刻みに震えていた。

「エルア？」

幸い、ポポはハンターに攻撃しない為危機に遭う事はないが心配になりスカイはエルアの元へ駆け寄る。

その間にポポは2人から逃げて行った。

「エルア、どうした？どこか痛めたか？」

スカイの問い掛けにすら無反応。一体どうしたのだろうか。

「血が…」

「え、何だ？」

声が小さくヘルムも被っているためか、エルアの声はスカイには届かなかった。

スカイはエルアの肩を掴み、問いかける。

「どうしたんだ？言ってみる？」

スカイの言葉を近くで聞いたエルアは安心したのか、スカイの問い掛けに答えた。

「血が…怖い…」

「血が？…あ、そうか。しかたないよな」

エルアはどうやら村を襲われたことで恐怖心を抱くようになったものがいくつあるようだ。

そしてその中に『血』もはいつていたようだ。

『血』が恐怖対象に入っているという事はハンターをすることが出来ないのと一緒に一緒だ。

スカイはこのまま狩りをしてはエルアを危険な目に遭わせてしまうと判断し、村に帰ることを決めた。

「エルア、今日はもう帰るか？それに血が怖いなら無理にハンターにならなくてもいい」

そう言うのと俯いていたエルアはスカイの顔を見上げた。

「やだ」

「え？」

するとエルアがバイザーを上げるのが見えた。それにつられ、スカイも特注の、レウスXのバイザーを上げる。

2人の視線がぶつかる。エルアの頬が若干赤く見えたのは気のせいではない。

「やだつてお前…エルアが血が怖いって言うから言ってるんだぞ？」

「…ありがと、でもいやだ」

そう言われ、スカイは返事に困った。大体何故いやなのかがスカイには分からなかった。

「ん〜…頑張れるか？」

「…うん、頑張るッ！！」

エルアの押しに負け、スカイは渋々ではあったが狩りの続行を許した。

ここはフルークツク雪山山頂。ここに黒い防具を纏い、太刀の類に入る武器の『大鎌威太刀』を背負っている一人のハンターが

いた。フードを深く被っているせいで顔は見えない。

彼は崖の傍に立ち、山の麓の何かを見ていた。

「…アイツが天空の武者、『炎のドラゴロイド』か…キャシシシシ。ここで殺してもいいが、今はまだ面白くなさそうだ、キャシシシシ」
普通、この場所からでは山の麓で誰がいるかまでは見えるはずがない。

この言葉は、このハンターが常人ではないことを物語っている。

「まあそれに、今回の目的はヤツじゃねえしな。キャシシシシ。

さっさとこいつを狩って、帰るとすつか。キャシシシシ」

そう言うと、彼は彼の後ろにいるモンスター、金色に染まっているラ ジャンに向かって大鎌を振った。

モンスターとは距離がある筈なのに、モンスターの動きは止まり猛々しく生えた2つの角の一方がドスリと音を立てながら雪の

地面に落ちた。

その瞬間、ラ ジャンの身体は真つ二つに裂け、力を失くした身体は雪の地面に埋もれた。

「キャシシシシ、悪くねえ。『大鎌威太刀・真羅』。これなら俺の力を十分に発揮出来そうだ。キャシシシシ」

そう言うと彼は大鎌を背負い、突然吹き始めた吹雪の中に消えてい

った。

「よし！やったぞエルア、これで4頭目だ！」

「ハア、ハア、疲れたよお……」

ここはエリア2。ここでもポポを狩っていた。そしてようやく4頭倒したところだった。

「ここまででもよく頑張ったよ、今回の狩りは次回繰越だ」

「え？何で？」

「何でつておま…体力残ってないだろ？その身体でギアノス5頭は無理だ」

エルアは血に対する恐怖感を堪えながらの狩りで体力は0に近かった。

確かにこれではギアノス5頭など無理に等しい。何せ攻撃してこないポポでこんなに苦勞するのに、攻撃してきて尚且つ動きま

わるギアノスなどまだ早すぎるのだ。

「俺はそこらへんでギアノス狩ってくるから、エルアはBCベースキャンプに戻っててくれ」

「え？ちよ、待ってよお」

エルアの言葉も訊かず、スカイは洞窟の中に入っていった。

「もう、スカイのバカ……」

と呟いたエルアはトボトボとBCへと歩みを始めた。

エルアがBCに着いて5分もしないうちにスカイは帰ってきた。

「ただいま、よし、さつさと帰るか！」

「もう、ちよつとはこっちの身にもなつてよね！！」

「え？あ、悪い……」

BCで待っていたのは若干怒り気味のエルアだった。何故怒ってい

るのかはスカイには分からなかった。

そんなスカイを無視してエルアは竜車に乗った。エルアを追ってスカイも竜車に乗った。

そして2人を乗せた竜車はポケ村に向けて、動き出した。

2人は気付かなかった。スカイ達を同じ時間に、スカイとは比べ物にならないくらい力の強さのハンターがいたことを。

そのハンターがスカイを狙っていたことを…

第五話 頑張る（後書き）

スカイ「やっと更新かよ…ちょっと作者あ！！ちゃんとしてくれよな？」

エルア「本当だよ…待ちくたびれちゃったよ」

スカイ「まあこれからちゃんとしてくれれば別に良いけど…まあそんな事より！！」

エルア「次回MH【覇気と力を持つ者達】第六話」

スカイ・エルア「【始動した計画】、お楽しみに」

第六話 始動した計画（前書き）

スカイ「いよいよ本編って感じだな」

エルア「そんな事より…更新、遅い…」

スカイ「…まっただ…」

上記の通り、今後は少し更新のペースが衰えます。

誠に申し訳ございません。

第六話 始動した計画

「北に4人、南に1人、西に1人、東に1人…か、随分とバラバラになってんなあ、キャシシシシ。」
そろそろ計画を実行に移すとすつか。要員も揃ったことだ、まずは誰から行っかな、キャシシシシ」

ここはポツケ村やユクモ村がある大陸、『ベスノール』ではなく、ベスノールの下にある大陸である『アルサクスの北部』の北部。アルサクスの北部に1つの城があった。もう当分の間使われた様子もない、廃城といったところか、そんな城の中に1人の人影があった。背中には大鎌が背負われている。

「おい、オルキロム」
「はッ」

と呼ばれて出てきた彼も呼んだ主と見た目は全く変わらない。呼んだ主は椅子に座り足を組んでいて、呼ばれた彼は床に膝をついている。見た目は一緒だがこの場面だけ見ると上下の差は一目瞭然だ。

「今すぐに出れる死神は何人いる？」
「私を含めて607人です」
「…まだ心もとねえな。その中に覚醒してんのは何人だ？」
「覚醒者は私を含めて2人です」

その返事を聞くと、主は少しの間黙り込んだ。

「じゃあ西と東に300ずつ、南にはお前をもう一人の覚醒者で行

け

「はッ。では北は」

「北は俺一人で十分だ。わかったらさっさと行け」

「はッ」

そう言うと彼は一瞬にして消えた。すると主は立ち上がり手に持っていた骸骨の面をつけた。

「待ってる、天空の武者。今すぐその空から地獄へ落としてやんよ。キャシシシシ」

「エルア、出来たぞ」

「うん」

エルアのハンターへの訓練のためのクエストから3週間がたった。それなりにエルアも狩りを出来るようになり、この前はエルア1人でドスギアノスを倒したのだ。そして今はスカイ宅。スカイが朝食を作り終えたところだ。エルアもスカイに料理を学んでいるらしいが、そんな簡単に上手くはならない。

「むぐ、どうしてこんなに上手く作れるんだろ…」

「…何でだろな。俺にもわかんねえな」

2人はテーブルに向かい合って座っている。

エルアは朝食を食べながらこのウマさに対してしかめっ面しながら軽く愚痴を言っている。

エルアは過去に料理の経験はないのだろうか、とスカイは朝食を食

べながらエルアの方を見ていた。

「狩りもそうだけど、スカイはどこかで料理の腕とか学んだの？」
「ん？ああ、言っただけでなかったか、俺はハンター訓練養成学校ってところに行ってたんだよ。」

その時に料理のことも少し学んだからな、それで多少はましなモンが作れんのもかもしれない」

「へえ……」

訊いた本人にも関わらず、あまり興味を持っていないように感じさせる返事だ。

興味を持っていないと言うより、飯がウマすぎて意識がそっちに行っている感じだ。

それを見たスカイは軽いため息を吐き、そしてまた朝食を食べ始めた。

食べながらスカイはハンター訓練養成学校時代のことを思い出していた。

最短である3年間で卒業、創立始まってスカイで3人目らしい。その3年間の間に、スカイには色々な出来事があった。

「…懐かしいな」

「え？何か言った？」

「何も言っただけだよ」

つい思ったことが口に出てしまい、理由などないがそのことを隠すスカイ。

こういうシーンは何かと見かけると有りがちだが、触れないでおこう。

「何か怪しい」

「何も怪しくねえよ、ごちそうさま」

「あ、ちよつとスカイ」

食器をキッチンに持っていくスカイの後を追ってエルアもキッチンに向かった。

ここはポツケ村から数キロ離れた森の中。

今、ポツケ村に向かって歩みを進める1人のハンターがいた。

「えつと、ここから北に2キロ先にポツケ村かあ。もう少しだ」

身に纏ったレックスXが太陽に照らさる。その色は赤。防具自体は禍々しくも感じられるが、纏っている本人からは穏やかさを感じる。レックスXを纏ったハンターはポツケ村を目指し駆け出した。

ここはスカイ宅。スカイとエルアは食器を洗い終わるとエルアはソファーに座り、スカイは自分の部屋へと戻った。

スカイは武器を納めているクローゼットを開け、中に入っている太刀の整理を始めた。

と言つてもここに置いてる太刀はほんの一部で、殆どは武器庫に置いてあるのだが。

「あ、『アトランティカ』と『ラストエクデイス』ここにあったのか、忘れてん？」

とスカイはクローゼットの中に妙な違和感を覚えた。

何かが、どこかがおかしいような、そんな違和感。暗くてよく分か

らないが。

この時間はクローゼットの中に日光が届かないのだ。

「ん…まあいいか」

と太刀の整理をちゃっちゃと済ませたスカイは一階へと降りて行った。

鈍感で有名なスカイが変に思ったのはほんの些細な違和感。しかしその違和感は確かなもの。

もしこれに気付いていれば

「あ、スカイ。何してたの？」

「ん？クローゼットの中の太刀の整理してたんだ」

「ふん」

スカイはクローゼットの中で感じた妙な違和感のことをエルアには言わなかった。

まあ、スカイにとっては『感じた』という曖昧なことまで言わなくてもいいだろうという判断なのだろう。

「ちょっと出てくる」

「え？どこ行くの？私も行く！」

「ん？来ても何も面白くないと思うぞ？まあいいが…」

会話を終わらせたスカイとエルアは家を出て、ある場所へと向かった。

スカイとエルアが向かったのは武具屋だった。

「おっちゃん、いるか？」

「ちよつと待つちよれーってスカイか。今日は何の用じゃ？」

「おっちゃん…ちよつと会わないうちに随分爺臭くなつたな…」

「今のはノリだ」

スカイは心の中で「どういうノリだよッ！！」と突っ込んだのは言うまでもない…のか？

苦笑いを浮かべていたが首を振って表情を一変させた。

そして本題に入ろうとしたのだが…

「嬢ちゃん、久しぶりだね。元気にしてた？」

「…うん」

…まだスカイ以外の人と話すのは戸惑いが見られる。

未だに精神状態は整っていないらしい。

そんなことよりスカイは、自由すぎる武具屋のおっちゃんに呆れてものも言えない様子だ。

「…ハア。おいおっちゃん、俺の話を聞け！」

「なんだスカイ、男が嫉妬したら終わりだぞ？」

武具屋のおっちゃんはスカイにそう言うともものすごくニヤニヤした顔でエルアの方をチラ見している。

「…意味分かんねえよ。そんなことより本題だ」

「？」

「アノ防具はもう出来たか？」

「…」

おっちゃん表情が一変して暗い表情になる。

「…実はなスカイ。あの防具はもう完璧な復元は無理に等しい」
「…」

「まずあの防具はもう何十年も前のリオレウス亜種の素材で作られておる。

だから予備の素材が無いんだ。お前のアイテムボックスの中にあるレウス亜種の素材を使っても、

それは”新しい”リオソウルZつであって”元”のリオソウルZにはならないんだ」

「…」
「…スカイ」

エルアが心配そうにスカイを見つめる。

そのスカイの表情は無表情だった。

しかし内心では悲しんでいるに違いない。なにせあの防具は…

「本当にすまんッ!!」

おっちゃんは深々と頭を下げる。

「頭を上げてくれ、おっちゃん」

おっちゃんはスカイに言われた通り、頭を上げる。

「…ははは、こんな事だろうと思ってたよ」

おっちゃんは頭上に疑問符を浮かべた。

「でもお前：あの防具はお前の親父さんの」

その言葉でエルアは驚愕した。スカイのお父さんのことはスカイから聞いていたため、父親のものがどれ大切なものかも知っていたからだ。

「ああ、この防具はあの人の、父さんの使っていた防具だ。内心、シヨック受けてるよ。でも」

無表情だったスカイに微笑みが見えた。

「この防具を壊したのは俺だ。俺が未熟だったって話だ。俺が強けりゃこの防具を壊さずに済んだはずなんだ」

スカイはおっちゃんに背を向けて、肩越しにおっちゃんに向かって言い放った。

「修行が足りないってこつたあ」

それを聞いたエルアとおっちゃんは微笑んだ。そして2人とも思った。

スカイらしいな　　つと。

「エルア、帰るぞ」

「あ、待ってよあ」

そして2人はいつもの家に帰り始めた。

「やっと着いたぜ、『ベスノール』。城からここまで案外近かったな、キャシシシシ。」

ポツケ村まであと…2ヶ月つてとこか、楽しみだぜ、キャシシシシ」

新たな災いがあと少しの所まで来ていることに、

スカイとエルアは気付いていなかった。

第七話 赤を纏った訪問者

武器屋から帰宅したスカイとエルアは自分の時間を寛ぐために使っていた。

「いや寛いでいたのはエルアだけだった。」

スカイは自分の部屋に閉じこもったまま椅子に腰をおろしていた。何をするわけでもなくただボーっと窓から見える村の景色に目をやっていた。

しかし、スカイは村の景色を見ていたわけではない。ただ単に考え事をしていたのだ。

その考え事とはおそらくリオソウルズのことであろう。

父がこの家に置いていた唯一の防具。その他の父の武器飛竜刀【黄金椿】を除いては全て無くなっていた。…父と母と共に。

もしかすると、防具のことではなく父と母のことを考えていたのかもしれない。

実際の所、何を考えているのかは本人にしか知り得ないことだ。

スカイは両親がいなくなった寸前の記憶も曖昧だという。

寸前と言っても、ラッツを失ったときから記憶喪失で、ラッツを失ってその次に覚えている記憶は、家に帰ると両親がいなかった、という記憶らしい。

そして、ラッツを失い、その後家に帰るまでの期間は1年程という。その間スカイになにがあったのかは、本人ですら知り得ないことだ。

スカイがなにか考え事をしていると、ノックオンが聞こえてきた。

スカイが扉の方を向くと扉ごしにエルアの声が聞こえてきた。

「スカイ、入るよ？」

「あ、ああ。いいぞ」

扉を開けたエルアは少し心配そうな表情でスカイを見ていた。

「どうしたエルア、そんな心配そうな顔をして。」

「心配そう、じゃなくて心配なの、スカイのことが」

「俺がか？何で？」

「…本当は辛かったんでしょ？防具のこと…」

内心、スカイはエルアが何で自分のことを心配しているのか知っていたに違いない。

「…辛くてもしかたないさ、悪いのは俺なんだし」

スカイはエルアに笑顔を見せた。しかしそれは作った笑顔。感情のこもっていない嘘の姿。

これ以上、エルアに心配をかけさせない為に作った笑顔だ。

だが、エルアはその笑顔が作りものだと分かっていた。

それはスカイのことを想っているエルアだからこそわかるのだ。

「私はスカイの役には立てないの…？」

エルアは落ち込んでいるスカイをなんとかして助けたいと、自分の手で救いたいと思っっているのだ。

本当に優しい子だ。自分はちょっと前に人生のどん底に落とされたばかりだと言うのに。

いや、だからこそと言うべきか。

人生のどん底に落とされた自分を救ってくれた恩人に恩返しをした
い、

その意思が彼女を強くし、彼女を優しくさせているのだろう。

「…そうだな。役に立てないな」

そんな優しいエルアに対してスカイの返事は冷たいものだった。

その返事を聞いたエルアはしゅんとなり俯いた。

「…まだ、だけどな」

その言葉で、しゅんとしていたエルアは顔を上げてスカイの顔を見る。

スカイはエルアを見てニカッと笑って見せた。…ドッキリ？

「ビックリしたか？」

「…んもうッ！！」

と言ってエルアはスカイの胸をポコポコと叩いた。
叩き終わるとエルアはスカイのおなかに顔を埋めた。

「ははは、悪かったよ。でも役に立てないのは本当だぞ？あくまで
”今わ”だけだな」

それを聞くとエルアは顔を上げてスカイを見上げた。

「…え？」

「お前は俺のパートナーになるにはまだまだだ」

「ぱ、パートナー…それって、もしかして…ッ」

「もちろん”狩り”のな」

ズドオオオオン

(ん？何かこける音がした気が…)

と鈍感王のスカイがボケて(？)いる横で、エルアは本当に凹んで
いた

(やっぱりそおゆうことだと思った…)

凹む上に半泣きだ。そこまでいくとは、よほど期待したのだろう。

「エルアは一通り家事も出来るし、料理も上手くなってきてる。あ
とエルアに足りないものは…」

エルアの心臓の鼓動が自然に速まり、高鳴る。

「…まずは他人とのコミュニケーションが足りてないな」

やはりまだ他人と接するには時間が掛かりそうだ。

まあ無理もない。今のエルアの心境は相当複雑になっているはずだ。

「次に、これが一番重要、狩りのスキルだ。もっと上達しないと、
俺の狩りに着いて来れないぞ？」

「う、うん…」

「…まあ、ゆっくり歩めばいいさ」

さっきまでしゅんとしていたエルアはその言葉に温かさを感じた。

その言葉にはスカイの優しさが詰まっている、エルアはそう思った。

「自分のペースで進むのが一番大事だ。」

どんなペースにしる、俺に追い付くには相当の時間が掛かる。

どうせ、時間が掛かるならゆっくり行こうぜ。

俺ならいつでも傍にいてやるから、それが”家族”ってもんだろ？」
ポツとエルアの頬が赤く染まる。スカイはいつもこんな感じの言葉を掛けてる。

恥ずかしくはないのだろうか？まさか自分のことをカッコいいとか思ってる

ないな、スカイに限ってあるわけがない。

それよりいつものものようにこんな感じの言葉を掛けられているエルアはそろそろ慣れないのだろうか？

いつものように、赤くなっている気がするが…

まあ、それが恋する乙女の使命と云うか、何というか…

「さあ、そろそろ下に降りるか、腹も減ってきたしな」

スカイはエルアを置いて、階段を下り始めていた。

「ちょ、ちょっといつも置いて行かないでよお」

「ふう、やっと着いたか？」

そこには赤を纏った少女が山を登って一息ついてた。

少女が振り返ると着いて来ていたと思っていた竜車の姿が無かった。

「ちょっと速すぎたか、まあいい、休憩としよう」

少女は背負っていたハンマーを木に立て掛け、他の木に背を任せ座った。

「懐かしいな、爺い。元氣してつかない。まあどうでもいい」

その少女は気付かないうちに眠りへと落ちていた。

少女の寝顔は、久しぶりに会うお爺さんとの再会を楽しみにしている、優しい表情だった。

少女は竜車が追いついても当分の間、目覚めることはなかった。

時間は12時を回っていた。スカイはキッチンに向かい、昼食の準備を始めた。

エルアはと言うと…ソファアに座って雑誌を読んでいた。その雑誌とはハンター情報誌『狩りに生きる』だ。

おそらく、狩中でのテクニクやモンスターの特徴・弱点等を勉強しているのだろう。

「むう、覚えることがありすぎてわかんないよ…」

「そうゆうことも全部含めて、ゆっくり歩めばいいさ」

エルアが悩んでいるところに昼食の料理を済ませたスカイがキッチンから昼食を持って出てきた。

「時間はいくらでもある、ゆっくり行こうぜ？」

「うん…」

時間はいくらでもあると言うが、エルアが上達しないまでスカイは自分の目的の狩りが出来なくなるのだ。

全てではなくても、少量に限られる。スカイのレベルまで行くと一回の狩りで相当の時間を費やす依頼ばかりだ。

限られた中、スカイの行ける依頼の回数も限られる。

そう考えるとエルアは罪悪感を感じた。

「…どんな理由かはわからないが、今、罪悪感を感じてなかったか？」

（ドキッ！）

なんということだろう。

あの鈍感王の異名を持つあのスカイがエルアの心の内を読んだだと？

あの鈍感王のスカイが？スカイのくせに？

「な、なんでそう思ったの？」

「いや、なんか、そんな気がただただ、勘違いだったらすまない。まったく、スカイにはいろんな意味で驚かされる。

そんなことより、エルアは悩んでいた。

今、罪悪感を感じている、自分のせいでスカイに迷惑をかけることになる、とスカイに言うべきか。

スカイは傍にいてと言ってくれた。その気持ちに応えたいし、スカイの優しさを裏切るようなことはしたくない。

でも、迷惑もかけたくない。

2つの想いが渦巻く。

そして出した答えは

「当たってるよスカイ。私はね、私のせいでスカイの時間を奪ってるような気がしてるの」

「…」

「スカイが私を手伝ってくれるのは嬉しいよ、でも、もしスカイが自分の時間を削って私の手伝いをしてくれると思うと、何か…」

か…」

スカイは昼食を食べながらエルアの話聞いていた。

聞く気あるのか？と心底思う。エルアがこんなに悩んでいるというのに…

「…スゲーな、俺」

「え？」

「つまり俺はエルアの心の内を見事見抜いたわけだ」

「ちよつと、真剣に」

「そんなに深く考えんなって」

「…考えるでしょ普通…」

エルアは少し苦い表情になる。

もはや鈍感の域を超えている。

「俺のことで悩んでんだろ？俺のことは気にしなくていいよ」

「で、でもスカイにだって行きたい依頼とかあるんじゃない？」

「…ないことはないな」

「ほら…」

「でもそれはエルアが成長して、2人で行けばいいかなって思ってたんだ」

「！？」

エルアは何も言い返せなかった。何故かすらわからない。でもスカイの言葉で自分の考えていた何か繋がった気がした。

「…スカイにそう言ってもらえるのが一番嬉しい」

「そうか？それは良かった。さあ、食べよう、冷めたら折角の飯がまずくなるぞ？」

「そうだね」

エルアの悩みを解決し、2人は昼食を取ることにした。

そんな2人の耳に扉のノックオンが聞こえてきた。

ノックされた扉は玄関の扉、つまり訪問者だ。

スカイは席を立ち、玄関に向かった。

「はい、どちらさ」

扉の先には赤を纏った、1人の女。少女のハンターがいた。

スカイに目が一瞬で鋭くなった。どうやら訪問者を警戒しているらしい。

その防具からは禍々しさが感じられる。そのせいだろう。

「あ、いや、怪しい者ではない。ちょっと尋ねたいことがあるのだからいいか？」

「…はい、なんでしょう？」

その言葉の感じから、殺気の類のものが感じられなかったのか、スカイは警戒の目を解いた。

「この村の村長の家はどこにあるかわかるか？」

「あ、はい。村長の家はここから向こう側に行つて」

とスカイはその訪問者に村長の家の場所を丁寧に教えた。

「ありがとう。この礼はいつか必ずさせてもらう」

「あ、いいですよ別に」

その少女のハンターはスカイに聞いた通りの道を進んでいった。

スカイはその少女のハンターが見えなくなるまで、彼女を見ていた。見えなくなると、スカイは家に入り、再び席に着いた。

「誰だったの？」

「…赤い女の人だった」

「何それ怖ッ！！」

エルアは訪問者に対する恐怖を抱いたまま食事を取った。

コンコン

赤を纏った少女は無事、村長の家まで来ていた。

果たして目的は一体：

扉をノックしてすぐ、少女は頭を脱ぎ、手に下げる。

するとすぐ、中から村長が出てきた。

「は〜い、誰じゃ？」

扉を開けた先にいた赤を纏った少女のハンターを見ても、村長は微動だにしない。

そして、少女言った一言は。

「久しぶりだな、爺い」

第七話 赤を纏った訪問者（後書き）

スカイ「誰だったんだ？あれは」

エルア「て言うかスカイ、説明下手すぎじゃない？

訪問者が誰か聞いた時、怖くてご飯食べれなくなりそうだったんだから」

スカイ「悪かったな、説明下手だよ。そんなことより！」

エルア「次回MH【覇気と力を持つ者達】第八話」

スカイ「『死線が交差する森の中で』」

スカイ・エルア「お楽しみに！！」

第八話 死線が交差する森の中で

「久しぶりだな、爺い」

「ふん、もうちいと老人を敬え、小娘が」

「あつれえ、可愛い孫にそんな口のきき方をしてもいいのかなあ？」

少女は村長の襟の部分をわし掴みすると、村長を持ち上げた。

この2人は一体どういう関係なのだろうか？

「わ、わかった。すまんかったツ。じゃから降ろしとくれ〜！」

「うん！分かれればよろしい！…な〜んてな！誰が降ろすかよクソ爺い」

赤を纏った少女は面白半分で、掴んだ村長を振り回す。

そして少女はケラケラと笑いながら村長の家の中に入って行った。

「い、いい加減降ろさんかい！」

「へいへい、分かったよ！うるせえ爺いだな」

少女は村長を丁寧な床に降ろした。

振り回され、疲れ果てた村長を見て少女は再びケラケラと笑った。

「何やら騒がしいわねえ ああ！」

「ん？あ！婆ちゃん！」

「ティナちゃん！お久しぶりねえ」

「婆ちゃん！本当に久しぶりだな！」

どうやらこの3人、祖父祖母と孫と言う関係なのは間違えないらしい。

少女は祖父と会った時より祖母と会った時の方が嬉しそうだ。

「まあそんな重そうな着物は脱いで、着替えてらっしゃい」

「ああ、そうするよ」

「はん！これでやっと可愛い孫が帰ってくるってことじゃのう」

「爺い、うるせえぞ！」

そう言い残すと、ティナは脱衣室に入って行った。

「あ、ティナちゃん。服は」

「あ、大体分かるからいいよ」

数十分後

「まあ！ティナちゃん、自前の可愛さが一層際立つわね」

「そ、そんなことはないですよ」

ティナはフリルがついた真っ白なワンピースを着て、

水色のメッシュが混じった黄色い髪が、

全体的にいいアクセントになっていて、なんとも可愛らしい姿だ。

「こんな服装するのは久しぶりで、ちょっと恥ずかしいです」

ティナは先程とは似ても似つかぬ程に口調が異なっていた。

棘のある言葉から、丸みのある穏やかな言葉へと。

「そんなことはない、似合っとるよ」

「…ありがとう、お爺ちゃん」

口調が変わったことになにも驚かないという事は、2人は普段の服

装になると口調が変わると言う事を知っているようだ。

「ちょっと、外に出てきてもいいですか？」

「ええが、長旅で疲れとるじゃろ？早く帰ってくるんじゃぞ？」

「はい」

そう言つて、ティナは村長宅を出て行つた。

見た目も口調も変わったティナだが、一つだけ変わっていないものがある。

それは

「ティナちゃん、あなたに会えて嬉しそうでしたね」

「…ここを訪れた時からそんな表情かおをしとつたよ」

「ねえ、スカイいゝ、お願い！」

「……………」

ここはスカイ宅。今、スカイ宅ではエルア対スカイの小戦争が勃発していた。

「ねえ！最近ずっと家でぐくたらして、私は一刻も早くスカイと一緒に狩りに行きたいのに…」

依頼を受けようよ！」

「……………」

エルアの問い掛けにスカイは何も答えようとしなない。

答えようとしなないと言うより、スカイは考え事をしているように見えるか？

「今、ちよつとの間考え事をしてたんだ」

「…何の？」

「…今から『スクライの森』に行くぞ」

「何しに行くの？」

「俺と稽古しに行くんだよ」

そう自分から言い出したわりには相当面倒臭そうな顔をしているが、エルアにはスカイの顔よりも言葉の方に気を取られていた。

「ほ、本当！？」

「ああ、本当だ。だから準備して来い」

「準備つて、防具と武器使うの！？」

「そつだ、今回の稽古はちよつと”特別”でな」

”特別”という言葉には本当に特別という意味が込められ、スカイも若干ニヤけている。どうやら何か企んでいるのは間違いないようだ。

「…はい」

そう言い残すとエルアは自室に…というよりスカイの部屋に向かい、防具を纏いに行った。

エルアが階段を上って行くのを見るとスカイも防具を纏いに武器庫へ向かった。

〈数分後〉

2人がほぼ同時にリビングへ戻ってきた。

エルアはハンターシリーズにハンターカリング、スカイはナルガX

シリーズに珍しく『ゴルドイクリップス』という片手剣を装備している。

2人とも頭は^{ヘルム}はまだ装備していない。

「ううゝし、じゃあ行くか」

「うん！」

スカイとエルアはスカイ宅を出て、スクライの森へと向かった。

「スカイ、特別な稽古って何なの？」

ここは目的地であるスクライの森。

ここに着いた途端、エルアがスカイに尋ねた。

そしてスカイから帰ってきた返事はエルアを驚愕させるものだった。

「今からエルアは…俺と勝負する」

「…」

一瞬…森全体が静寂したかと思うほど辺りが無音になった。
と、思った次の瞬間

「ええええええツ!? 私とスカイが？」

「そう。ルールは簡単。俺がエルアに攻撃を5回当てるまでにエルアは俺に攻撃を1回でも当てればエルアの勝ちだ」

「ちよつと待つてよ！」

「ん? 何だ？」

気が抜けているスカイに対し真剣な面持ちのエルア。

スカイに何か言いたげな表情をしている。

「私とスカイが勝負？そんなの私が負けるにきまつてるじゃない。それにもしも怪我なんかしたら…」

「大丈夫だ、防具は頑丈だから。それにこの勝負、否、訓練はエルアが俺から勝てるようになるまで続ける」

「えッ!？」

まさかの告白にエルアは心底驚いた。

自分がスカイに勝つまで…あと何年掛かるか…思うとエルアは気が遠くなった。

いやいやそうじゃない、と首を振って思考を切り替える。

いくら防具…だが、所詮防具。堅く頑丈な部分もあれば弱く壊れやすい部分だってある。

もし壊れた場合、防具はいいとして攻撃が体に当たれば、ごめんごめん、じゃ済まない。

スカイはハンター同士が戦うという意味をちゃんと理解しているのか、とエルアは思った。

「心配するな、俺はちゃんと寸止めするから。あ、エルアは気にしなくてもいいからな」

「そこがダメなの！スカイの事なら本当に寸止めてくれるとは思っけど、もしスカイが怪我したら…」

そう言った途端、気が抜けてやる気が感じられなかったスカイから殺気を感じた。

「そういう言葉は攻撃を当てられるようになってから言え」

「うっ…」

エルアはその言葉は自分に対する挑発と分かっていた。だが、挑発と分かっただけでも恐怖を感じずにはいらなかった。スカイの殺気にエルアは一瞬、言葉を失った。

「いいか、今から俺の事をモンスターと思え。そしてそのモンスターはお前の命を本気で狙いに行く」

スカイから殺気は消えない。エルアは今にも泣きそうになる。

こんなスカイじゃない、こんなスカイ見たくない、今すぐ帰りたい、と心の中で呟いた。

しかしスカイの殺気は、そんな選択肢を与えてはおらず、口にすることすら恐怖に想わせる気迫を纏っていた。

「それじゃあ…行くぞ!」

気付くと目の前にスカイはおらず、見えなくなったスカイから訓練開始の合図が告げられた。

「ここがポツケ村かあ。今まではお爺ちゃん達が私の家に来てたからここに来るのは初めてになるわね」

ティナは村長に許可をもらい外出中。ポツケ観光を堪能していた。しかし、ポツケ村は北部に位置する村、そんな環境に慣れないのか、ティナは少し肌寒そうにしている。

そしてスカイの家の前を通った時、ふと思いだした。

「ここは道を訊いた方の…今度お礼をしないと」

スカイの家の前を通り過ぎると、ティナはスカイ達が訓練しているスクライの森の方へと歩いて行った。

エルアはただ、怯えていた。

スカイから感じる殺気、恐怖。そして今の状況に。

言い出したのはエルアだがまさかこんな事になるなんて思っているだろう。

そんな恐怖を抱いていた時、スカイは動いた。

「おらああッ！」

「きゃッ！」

声に圧倒され、反射的にしゃがんだエルア。その行動がエルアをスカイから放たれた蹴りを紙一重でかわす結果となった。

だが、しゃがんでいるエルアにスカイはゴルドイクリップスの切っ先を向けた。

「お前、一回死んだぞ？」

「す、スカイ…もうやめよ？私、スカイと戦いたくないよ…」

「自分から言い出したんだろ？それに、今はスカイじゃなくモンスターと思えと言ったはずだ」

尤もな正論だった。

「…この訓練が終わったら…俺の狩りに一緒に行こう」

「…え？」

今のスカイからは想像も出来ない言葉だった。

未だに殺気は消えないが、穏やかさも感じる、その言葉はエルアに違和感を感じさせた。

違和感しか感じさせなかった。

スカイはそれ以外、何も言わなかった。

そして再び姿を消した。

「…頑張ろう…」

この訓練が終わればスカイと一緒に狩りに行ける、そう思うだけで頑張れるエルアがいた。

だが、そんなやる気を出したエルアは何者かによってさらわれた。

「んんっ！んん」

「エルア！俺だ！ちょっと静かにしてくれ」

声の主はスカイだった。スカイの手によってエルアの口は塞がれている。

先程とは異なりいつものスカイに戻っていた。

言ったどうしたというのだろうか。

「んぷう、どうしたのスカイ。訓練しないの？」

「それどころじゃなくなっただけだ」

スカイの言葉からは焦りが感じられた。

エルアは何が何だか分からなかった。

「隠れても無駄だぜ？天空の武者さんよ。キャシシシシ」

第八話 死線が交差する森の中で（後書き）

スカイ「いよいよ本編入ったな……」

エルア「次回は戦闘になるの？」

スカイ「それは……実のところ未定……」

エルア「……次回MH【覇気と力を持つ者達】第九話」

スカイ「『大鎌威太刀の脅威 スカイの涙』、お楽しみに」

第九話 大鎌威太刀の脅威 スカイの涙

「隠れても無駄だぜ？ 天空の武者さんよお。 キャシシシシ」

その大鎌を持ち、フードを深く被っている男には、隠れているスカイ達の居場所がバレバレのようだ。

スカイは茂みからフードの男を見つめる。

どうやらスカイはその男に覚えがないらしい。

（あいつが誰かは分からないが、ヤバい感じがする…）

「ねえ、スカイ…」

「ん、何だ？」

さっきまで静かにしていたエルアが小さい声でスカイに何かを問う。

「あのハンターは誰なの？ 何で隠れるの？」

「俺にも分からない… 隠れている理由は… ヤバい気がするからだ…」

その時、茂みから覗いていたスカイの瞳とフードの男の瞳があう。

そのフードの下は骸骨の面で顔を覆っており、骸骨の面から覗く紫色の瞳は殺気を放っている。 その殺気はスカイに負けないほどのものだ。

スカイは目があつた瞬間、顔を背けてしまう。

「いつまで隠れてるつもりだあ？ そんなところで蹲ってたらあ」

「殺すぞ」

スカイはその時、エルアを抱きかかえ横に跳んで回避した。赤黒い斬撃を。

フードの男は背中の大鎌の柄を片手で握ると一気に振り上げた。そのスピードは目に留まらないほど。

振り上げられたる時スカイ達の方に斬撃が放たれ、それをスカイは回避、この一連の流れ、秒にして2秒弱。

「は、速すぎる…」

今の攻撃を見てスカイは背筋を凍らせていた。

もし『ナルガ』装備ではなかったら間違いなく死んでいた、という事実を知ったからだ。

ナルガ装備は回避に特化した防具。そんな防具でも回避するのがギリギリだった攻撃、スカイが好むレウス系統の防具では避ける事は困難。ほぼ0%に等しい。

「…強すぎる」

「俺の実力、分かったかあ？なら分かるよなあ…核の違いってヤツをよお？」

認めたくはないが、認めざるをえなかった。

実際にフードの男の方が圧倒的に強いからだ。

今の自分では歯が立たない事をスカイは分かっていた。

このままでは自分もエルアも必ず死ぬ、どう頑張っても勝てる相手ではない、スカイは考えていた。

この状況を打開する案、作戦を。

そこでスカイの取った選択は

「…エルア、俺が1・2・3の合図を出す、その3の時にお前は逃げるんだ」

「…え？」

スカイはフードの男に悟られぬよう小さい声、エルアにギリギリで届く声でそう告げた。

その言葉を聞いたエルアは察した。

スカイが囷になるうとしてしている事を、そして囷になったスカイはほぼ絶対的に”死ぬ”と言う事を。

エルアはすぐさま拒否しようとした、一緒に逃げようと言いたかった。

だが言えなかった、スカイの瞳がそれを許さなかった。

スカイの瞳は覚悟を決めた瞳をしていた。エルアはそんなスカイの覚悟を裏切り、踏みにじるような事は出来なかった。

「…行くぞ…1…2…3ッ！」

その瞬間、エルアは森の出口へと走って行った。

その行動を見てフードの男はエルアを追うように走り始めた。が、しかし

「…今のは危なかったぜ？キャシシシシ」

追おうとしたフードの男はスカイの攻撃によって回避せざるをえなくなり、そのためエルアを追う事も出来なくなった。

「今の攻撃…確実に当たったと思ったけどな」

フードの男はかなりの速さで走り始めた。スカイはそんな男の腹目掛けて剣を振った。

普通なら避けられるはずがないのだが、男はそれをやって見せた。

スカイは改めて確信した　この男との核の差を。

「…あの女には逃げられちゃったがまあいい、どうせ後で殺すんだからな。キャシシシシ」

「させるかッ!!」

スカイは戦闘態勢に入る。それを見てフードの男も戦闘態勢に入った。

「いつでも来いよ、遊んでやるから。キャシシシシ」

「遊ぶ暇なんざねえよッ！」

そしてスカイとフードの男との戦いは始まった。

エルアはただ走った。出口へ、村へ。

大好きなスカイを裏切りたくない一心で走り続けた。

（待っててスカイ、誰か呼んでくるからね。だから…死なないでッ！）

涙がでそうなのを必死にこらえて、スカイを助けることだけを考えてた。

数分走り続けてようやく村が見えてきた。

エルアは足の疲労など全く考えずに全力で走った。

「…おい、今話題の天空の武者さんってなあこんな弱えのか？がっかりだぜ」

「はあ…はあ…くっ…そ…」

(っ、強い……せめてレウスXと太刀があれば……)

戦闘が始まってまだ数分しかたっていないと言うのにスカイはボロボロにやられ、地面に倒れ伏せていた。

それだけではない。スカイがボロボロなのに対し、フードの男は無傷なのだ。

「今思えばお前…その防具は何だ？」

今のスカイの防具はエルアの訓練用にとナルガー式にしており、武器も太刀ではなく片手剣なのだ。

つまり今のスカイは万全ではないのだ。

しかしナルガー式は回避に特化した防具、片手剣にも盾が付いているのだ。

それでこの有様、いくらなんでも酷過ぎる。

それほどこの男とスカイに力の差があると言う事なのだろうか。

「あ、そうそう」

フードの男から告げられた言葉はスカイを驚愕させた。

「バーストフレア稀炎飛翔は…使わねえのか？キャシシシシ」

「お前ツ！？何故知ってる…」

稀炎飛翔はスカイの最終奥義みたいなもので、人前では愚か、狩獵

時ですら滅多に使わない技。

そんな技を何故初対面であるこの男が知っているのだろうか、スカイは不思議でならなかった。

ウカムルバス

「崩竜戦で……何故最初から使わなかったんだ？」

「！？見てたのか？」

「ああ。キャシシシシ。面白かったぜ？仲間がやられて、それでお前が敵討ちってか？泣かせるねえ。キャシシシシ」

スカイは過去の事、崩竜戦を思い返していた。

（確かに目の前の敵に集中してはいたが、人の気配なんて感じなかった、それはわかる。ならどこで見えていた？）

「まあ、最初から使ってれば仲間をやられる事はなかったんだがな。キャシシシシ」

「……………」

「お前は”使わなかった”わけじゃねえ、”使えなかった”、そうだろ？キャシシシシ」

「……………どうやらお前は全部知ってるみたいだな」

「全部じゃねえが大凡ってとこだ。」

稀炎飛翔、お前の持つ炎の力を最大限に発揮できる技。その技を使うと炎を自由自在、固体にすら出来るようになる。

「……程度だ。キャシシシシ。それと」

「……………」

「その技は身体への負担が非常に大きく、短期間での再使用は”使用継続時間が減る”と共に”寿命を縮める”も、あったな。キャシシシシ」

男の説明は稀炎飛翔のほぼ全てを物語っていた。

残されたスカイは、情けないと自分の弱さを怨み地面を強く叩いた。

（俺は…弱い。力を使わなきゃ、人一人守れやしない。情けねえッ
！）

エルアとエルアが呼んだ増援が来たのはそれから3分もしないうちの事だった。

死神は帰路で考え事をしていた。

その様子は先程までの死神には感じられない悲しさを纏っていた。死神は骸骨の面を外し、空を見上げながら呟いた。

「…久しぶりだったな。元気で何よりだったよ、エルア」

第九話 大鎌威太刀の脅威 スカイの涙（後書き）

スカイ「またまた、てか何時もの如く更新が遅えええええッ！！」
エルア「作者はなにやってるの、まったく…」

スカイ「それにしても今回の話…エルアと死神の繋がりは一体ッ！
！（棒読み）」

エルア「え！？何それ？……ま、まあそんな事より次回MH【覇
気と力を持つ者達】第十話」

スカイ「『護るために 感じる違和感の正体』」

スカイ・エルア「『お楽しみに』」

第十話 護るために 感じる違和感の正体

スカイは、自分の事を死神と名乗る男との戦闘後、病院に緊急搬送された。

スカイの血液に猛毒が検出された。恐らく死神が使っていた武器は特殊攻撃属性の『毒』を持つ武器だったのだろう。

エルアが呼んだ増援の到着があと少し遅ければスカイは死んでいた。まさに間一髪と言ったところだ。

「スカイ、もう大丈夫なの？」

ここは”いつもの”病室。自分は戦闘後丸4日も寝てあれからいた事をエルアから訊きスカイはここ3日間、何か焦りを見せている。一体何に焦っているというのだろうか。

「ああ、もう大丈夫なんだが、何で退院させてくれないんだッ」

「ねえスカイ、何でそんなに焦ってるの？」

「時間……時間がないんだ」

エルアは頭上に疑問符を浮かべた。おそらく、”時間がない”の意味が理解できないのだろう。

「俺達……いや、俺は強くならなきゃならないんだ。この半年間で」
「俺……？」

エルアはスカイが言い直した”俺”という言葉聞き、若干ショックを受けていた。

自分ではやはりまだ、スカイの役には立てない、と。

「…でも、何で強くならなくちゃならないの？」

すると、スカイは落ち込んだ表情を見せ俯いた。そして弱弱しい声で言った。

「俺は、フードの男に一撃も攻撃を当てる事が出来なかつたんだ。ほんと、情けない話だよな」

エルアはその事実を聞き、驚きの表情を見せた。

なぜなら、あのフードの男はスカイが倒したと思っていたからだろう。

エルアは黙ったままスカイの話を聞いた。

「やつは”本気の俺と戦いたい”、そう言つて俺を見逃したんだ。だが、本気の俺でもフードの男には勝てないと思うんだ」

回避に特化されている防具ですら避ける事の出来ない攻撃をレウス装備で避けれるはずがないのだ。

いや、それ以前にスカイと死神では力量の差が激し過ぎるのだ。その事はスカイも自覚している。

「だからこそ、俺は強くならなくちゃならないんだ、村を護るためにも、エルアを護るためにも…」

「スカイ…」

スカイは拳を固めた。

これ以上、皆に迷惑をかけない為に、死神を倒すために強くなるんだ、と言う強い覚悟を決めて。

結局、スカイが退院できたのはそれから2日後の事だった。

スカイはもはや半ギレ状態だったが、怒りが爆発する前に退院する事が出来た。

これでお医者さんたちは命を落とさずに済んだというわけだ。

スカイは家に戻るとすぐにインナー姿になりレウスXを纏い（ヘルム以外）、飛竜刀を腰に携えると少し大きめの袋にアイテムボックスの中のアイテムを適当に詰めた。

「す、スカイ、そんなに焦らなくても」

「…もう護れないのは嫌なんだ、俺が負けて、それで皆が傷つく姿なんて見たくない。俺は1分、1秒でも長く修行したいんだ」

それ以上エルアもスカイも何も言わなかった。

スカイの準備が終わると、玄関の扉の前で止まり、エルアを呼んだ。

「エルアッ」

「な、何？」

スカイとエルアが向かい合う。

スカイはエルアの顔を見ながら微笑み、エルアの頭を撫でた。

エルアは撫でられるのが心地よいのか、目を細めている。

そしてスカイはある約束を告げた。

「必ず、必ず護って見せる。だからここで待ってて欲しい、俺の帰りを」

「……………うんッ」

本当は、半年もの間スカイと会えないのが悲しいはずなのに、スカイの出発を笑顔で見送れたエルア。

自分もスカイに着いて行きたいはずなのに、それをしなかった。

後になって後悔するかもしれない、でもしなかった。

それはスカイを信じているから。スカイは半年間の修行で絶対に強くなる、そしてフードの男との戦いも絶対に勝つ。

そう信じているから。

そして帰ってきたら言ってあげようと思う。

” おかえり” って。

エルアは信じた。だが本当は信じたのではなく願っていたのかもしれない。

フードの男に勝って、帰ってきて、と。

スカイはすぐに旅立つのではなく、ある人物の家に向かっていった。

その家は5分もしないうちに見えてきた。

スカイはその家の扉をノックした。出てきたのはいつもスカイがお世話になっている人物だった。

「なんじゃ、スカイだったか」

「村長、ちよつといいか？」

「……真剣な話のようじゃな。入れ」

スカイは村長に招かれ、村長宅におじやました。

スカイは村長に起きた出来事の一部始終を話した。

「そうか、その『死神』とやらは半年後に来ると言ったのじゃな？」

「はい」

村長は顎に手を当て「そうか……」と呟いた。

「それで、どこに行くのかは決めたのか？」
「一応……ここから少し西に広がる『地獄の森』^{ヘル・フォレスト}に行こうかと」

地獄の森^{ヘル・フォレスト}、その森には絶えず凶暴なモンスターがおり、世界全体でも危険区域に認定されるほど

危ない場所。中には未確認モンスターも数多い。

そんな森に半年間も籠ればいやでもそりゃ強くなるが、常に死が隣り合わせになるのも事実。

「…死神と戦う前に死ぬかもしれぬぞ？」

「そのくらいのリスク無しで強くなれるなんて思ってますん」

その言葉が返ってくると、村長は笑みを浮かべた。

まるでその言葉が返ってくるのを待っていたかのように。

「…とは言ってもあのヘル・フォレストじゃ。万が一の事を考えて、お又シにある者を同行させる。それが旅出発の条件じゃ」

「ある者？一体」

その人物は不意に現れた。

「爺い、そこにあつたラオシャンメロン食べてもいいのか？」

そこには以前、スカイの家を訪ねた赤い防具、レックスマを纏ったハンターがいた。

「いや、あれはいかん。今度隣の村の村長に贈る大切な
ティナ！許可を取る前に食べるなッ！」
おい

ティナは許可を取る前、と言いか村長に訊く前からラオシャンメロンを食べ始めていた。

ラオシャンメロンは超が付くほどの高級食材で、スカイですら数えられるほどしか食べた事がなかった。

「ああ、ラオシャンメロンがあ…探すのに半年も掛かったというのに…」

「はっはっはあ、残念だったな爺い。…ってかコイツは誰だ？」

そこで初めてティナはスカイに気づき、スカイと目が合う。

スカイはその瞬間、ティナに何か違和感を感じた。

（何だこの感じは。どんなハンターを見てもこんな違和感、感じたことねえ）

すると村長から説明が入った。

「ティナ、こいつはスカイ・アレルドバーク、名前くらいは聞いたことあるじゃろ？」

するとティナは顎に手を当て、脳の中でスカイの名前を検索した。
結果。

「……………いや、ねえな」

「……………」

スカイだけでなく、村長も何故か黙ってしまふ。何故かはわからないが気まずい空気になる。

「…ま、まあよい。スカイ、こいつはワシの孫のティナー・オラダング。お又シと同行させるのはこいつじゃ」
「な、何いッ!?!」

村長はティナに事情を説明した。

「はあ!?! 何で俺がこいつと一緒に行動しねえといけねんだよ!」

まあ、初対面の相手と半年間も危険な場所で過ごすなんて、誰が頼まれてもそんな反応になるだろう。

村長はそう帰ってくるのが分かっていたようで、すぐに次の手を打った。

…それより、村長は読心術でも会得しているのだろうか。

「……そう言えはティナ」

「ん?」

「今さっきお又シ、ラオシャンメロン、食べたのう?」

「うぐッ……」

ティナもそろそろ勘づき、苦の表情を浮かべる。

「この半年間、ラオシャンメロンを探し続けるか、スカイと一緒にヘル・フォレストに行きスカイの修行の手伝いをするか、どっちがいい?」

普通、この2択なら、ラオシャンメロンの方を選ぶだろう。しかし、ティナの性格から見てチマチマした作業は苦手、と言うか嫌いなのだろう。

悩みに悩んだ結果

「わあつたよッ！、行きゃいいんだろ、ヘル・フォレストにでもどこにでも言つてやるよ」

作戦成功、と言ったところか。村長はティナに見えないところで笑みを浮かべていた。

「クソッ。…まあいやいやとは言え、半年間も一緒なんだ、仲良くしようぜ？えつとお」

何に悩んでいるのか、スカイには分からなかったが、読心術を身につけている(?)村長にはお見通しだった。

「スカイじゃ、スカイアレルドバーク」

「おう、よろしくな、スカイ」

「ああ、こちらこそよろしく。オラダング」

「いや、そつちで呼ぶのはやめる。ティナでいい」

「そうか？じゃあ改めてよろしく、ティナ」

「ああ」

二人はその場で握手を交わした。

その時村長から、ティナに関わる衝撃的な情報が告げられた。

「スカイ、ティナはおヌシに似た【力】を持っておるのじゃ」

「俺に似た力…？」

「そう、おヌシとは少し性質が違うが【覇気】と言う力を持つておる」

「覇気？」

今までにスカイが感じていたティナに対する違和感の正体がその【覇気】。スカイはその時、やっと違和感の正体が判明したようだ。

「ティナの持つ覇気が、ヘル・フォレストでお又シらを護るじゃろう」

「そ、そうなのか？」

スカイはティナにそう訊いた。若干疑いの目で。

「さあな！それはスカイの態度次第だ」

「どういう事だよッ！」

「まあよい、スカイ、時間がないのじゃろ？」

「そ、そうだった！」

「なら言っ来てい。そして強くなってまた戻ってこい、必ずじゃ、良いな？」

「ああ、もちろんだッ！よし、じゃあ行ってくるッ！！」

そう言って、スカイは外に出て行った。

だがしかし、ティナはすぐには出なかった。

「爺い……」

「ん？何じゃ？」

「………ツケ、こんな雑用させて本当にいいのか？半年、いやもしかするともう一生会えないかもだぜ？」

「…ハッハッハ、その時は墓にラオシャンメロンを供えとってやるわい」

「…そりゃ悪くねえな………じゃあ行ってくる」

そう言っ出て行った。

最後のティナの言葉には悲しさを感じる。

おそらく、表では偉そうにしているが、内心、村長ともう少し長く居たかったのかもしれない。

その意図に気付いていた村長はボソッと呟いた。

「…素直じゃないのぉ」

第十話 護るために 感じる違和感の正体（後書き）

スカイ「いよいよ次回から修行編かあと思ったんだが修行編は力ツトするらしいぞ」

ティナ「そうなのか、まるで『ワン〇ース』みてえだな」

スカイ「ティナ、それは危ないから、いやマジで」

ティナ「そうなのか？つてかいきなり修業後の話なのか？まるで『ワン〇』」

スカイ「コラッ！今回は俺の過去の話、『ハンター訓練養成学校』時代の話らしいぞ、いや〜懐かしいなあ」

ティナ「（興味ねえッ！！）」

スカイ「お、おい、心の中でも興味無いとか思うな！傷つくわ、リアルで！」

ティナ「……つてか！」

スカイ「次回MH【覇気と力を持つ者達】第十一話」

ティナ「『いじめられっ子少女との出会い』」

スカイ・ティナ「『お楽しみに』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5537s/>

モンスターハンター 【覇気と力を持つ者達】

2011年12月11日01時45分発行